兵庫県文化財調査報告　第328冊

赤穂市

赤穂城下町跡

（街）赤穂駅前大石神社線 電線共同溝整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成20(2008)年3月

兵庫県教育委員会

赤穂市

赤穂城下町跡

2008年３月

兵庫県教育委員会

赤　穂　城　下　町　跡

（街）赤穂駅前大石神社線 電線共同溝整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

目　　次

例言

第１章　遺跡をとりまく環境 …… 1

第１節　地理的環境 …… 1

第２節　歴史的環境 …… 1

第３節　赤穂上水道 …… 3

第２章　調査の契機と経過 …… 6

第１節　調査の契機 …… 6

第２節　赤穂城下町跡の既往の調査 …… 6

第３節　調査経過および体制 …… 6

第３章　発掘調査の成果 …… 10

第１節　調査の概要 …… 10

第２節　10区の調査成果 …… 10

第３節　11区の調査成果 …… 12

第４節　12区の調査成果 …… 15

第５節　13地区の調査成果 …… 15

第６節　14区の調査成果 …… 18

第７節　15地区の調査成果 …… 19

第８節　18地区の調査成果 …… 32

第９節　20区の調査成果 …… 38

第10節　21区の調査成果 …… 38

第11節　22地区の調査成果 …… 40

第12節　23区の調査成果 …… 42

第４章　自然科学的調査の成果 …… 47

第１節　兵庫県赤穂城下町跡における樹種同定 …… 47

第５章　まとめ …… 50

第１節　遺構の変遷と赤穂城下町 …… 50

第２節　百々呂屋裏大桝と赤穂上水道 …… 53

第３節　総括 …… 55

図　版 …… 1～55

報告書抄録

例　言

1．本書は兵庫県赤穂市加里屋に所在する、赤穂城下町跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は（街）赤穂駅前大石神社線電線共同溝整備事業に伴うもので、兵庫県上郡土木事務所の依頼を受けて、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が平成15年度に工事立会を実施した。

3．出土品整理は兵庫県西播磨県民局長の依頼を受けて、平成18年度は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が、平成19年度は兵庫県立考古博物館が実施した。

4．本書に使用した方位は国土座標（第Ⅴ系）の座標北を示す。また、標高値は東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした。

5．出土品の分析は、木製品の樹種同定を株式会社古環境研究所に依頼した。

6．第１図の地図は国土地理院発行20万の１地形図「姫路」を使用した。
第２図の地図は国土地理院発行2万5千分の1地形図「相生」・「播州赤穂」を縮小して使用した。
第３図上の地図は明治33年、陸軍測地部発行２万分の１地形図「赤穂」・「坂越」を縮小して使用した。
第３図下の地図は赤穂市発行１万分の１「赤穂市全図其ノ3」を使用した。
図版２の写真３は赤穂市史編纂室から提供を受けた。

7．執筆は、第４章を株式会社古環境研究所が行った以外は、篠宮　正が行った。

8．編集は篠宮が行った。

9．本書にかかる写真・図面などの記録や出土した遺物は、兵庫県立考古博物館に保管している。

10．発掘調査および報告書作成にあたり、
赤穂市教育委員会・赤穂市立歴史博物館・赤穂市史編纂室の各機関および、
赤松和佳・荒木幸治・小野真一・広山堯道（故人）・藤田忠彦・藤原正昭・中田宗伯・宮崎素一
の各氏にご援助・ご指導・ご教示頂いた。記して深く感謝の意を表する。

挿図目次

第１図　1.兵庫県の位置　2.赤穂市の位置　3.赤穂城下町跡の位置　2
第２図　赤穂城下町跡周辺の主要遺跡　4
第３図　明治33年赤穂城下町周辺　赤穂城と調査区周辺　5
第４図　調査区位置図　7
第５図　10区断面・平面、出土遺物（１～16）　11
第６図　11区断面・平面、出土遺物（17～24）　13
第７図　12区断面・平面、出土遺物（25～33）　14
第８図　13区断面・平面　16
第９図　13地区出土遺物（34～61，Ｍ１.Ｍ２）　17
第10図　14区断面　第１面・第３面平面　19
第11図　14区出土遺物（62～82，Ｗ１）　20
第12図　14区鉄滓（Ｍ３～M14）　21
第13図　15区断面・平面　23
第14図　15-16間区、16区、16-17間区第１面平面　24
第15図　15-16間区、16区、16-17間区第３面平面　25
第16図　17区断面・第２面・第３面平面　25
第17図　15地区出土遺物（1）（83～105，M15）　26
第18図　15地区出土遺物（2）（106.107，M16～M21，W2.W3）　27
第19図　15地区出土遺物（3）瓦管（108～122）　28
第20図　15地区出土遺物（4）瓦管（123～136）　29
第21図　15地区出土遺物（5）瓦管（137，138）　30
第22図　15地区出土遺物（6）（139～155，M22～M25）　31
第23図　18地区第１面・第２面平面　33
第24図　18地区第３面平面・断面　34
第25図　18地区出土遺物（1）（156～181）　35
第26図　18地区出土遺物（2）（182～203，M26，W4）　36
第27図　18地区出土遺物（3）土錘（204～277）　37
第28図　20区断面・平面、出土遺物（278，279）　39
第29図　21区断面・平面　39
第30図　22区百々呂屋裏大桝平面・断面　40
第31図　22区出土遺物（280～293，M27）　41
第32図　23区平面　43
第33図　23区出土遺物（1）（294～320，W5.W6）　44
第34図　23区出土遺物（2）（321～333，M28）　45
第35図　木材組織顕微鏡写真　49
第36図　橋本町周辺の宅地・上水道と調査位置　52
第37図　百々呂屋裏大桝の復原　54
第38図　百々呂屋裏大桝の説明版　55

表目次

第１表　赤穂城下町跡における樹種同定結果　47
第２表　赤穂城下町跡土器類一覧（1）（2）（3）（4）　56～59
第３表　赤穂城下町跡土製品一覧（1）（2）　59・60
第４表　赤穂城下町跡瓦類一覧　61
第５表　赤穂城下町跡瓦管一覧　61
第６表　赤穂城下町跡金属器一覧　62
第７表　赤穂城下町跡木製品一覧　62
第８表　赤穂城下町跡種実一覧　62
第９表　赤穂城下町跡骨類一覧　62

図版目次

図版１ 遺跡 １.調査地全景　　２.22区　百々呂屋裏大桝（北西から）
図版２ 遺跡 3.『赤穂城下水筋絵図』百々呂屋裏大桝周辺部分（赤穂市史編纂室蔵） 4.整備された歩道と百々呂屋裏大桝の路面表示（南西から）
図版３ 遺物 上.22区　百々呂屋裏大桝出土肥前染付碗　中.23区　志野向付　下.18区　肥前唐津甕
図版４ 遺物 18区　肥前唐津焼　外面　内面
図版５ 遺構 10区　5.SD1001(西から)　6.SD1001東石列(西から)　7.SD1001西石列(東から)　8.SD1001(南から)　9.完掘(南から)
図版６ 遺構 11区　10.SD1102・SD1101(南から)　11.北壁土層(南から)　12.完掘(南から)
図版７ 遺構 12区　13.SD1201(西から)　14.SD1201(北から)　15.12区完掘(南から)
図版８ 遺構 13区　16.SD1301(南から)　17.SD1301(北から)　18.13北区(北から)
図版９ 遺構 14区　19.第１面(南から)　20.SK1401(西から)　21.第２面(南から)
図版10 遺構 14区　22.東壁土層SK1401・SK1402(西から)　23.第３面SD1403(南から)　24.SK1404(西から)
図版11 遺構 15区　25.全景(北から)　26.東壁土層(西から)　27.南壁土層(北から)
図版12 遺構 15・16間区　28.第１面全景(南から)　29.第１面南壁土層(北から)　30.第１面SD1502　礎石検出状況(北から)
図版13 遺構 15・16間区　31.第１面礎石断面(南から)　32.第２面(南から)　33.第３面(東から)
図版14 遺構 16区　34.第1面検出状況(北から)　35.第１面SD1502　上水道瓦管検出状況・第２面(東から)
36.第１面SD1502　上水道瓦管・第３面(東から)
図版15 遺構 16区　37.SD1502　上水道瓦管接合部覆瓦　38.SD1502　上水道瓦管接合部　39.南壁土層(北から)
図版16 遺構 16・17間区　40.第１面検出状況(北から)　41.第１面SK1501(南から)　42.第１面(北から)
図版17 遺構 16・17間区　43.第１面SD1502(東から)　44.第１面SD1503(北から)　45.第３面(東から)
図版18 遺構 17区　46.第３面(北から)　47.第３面石列(東から)　48.南壁土層(北から)　49.第２面(北から)　50.第２面礎石(東から)
図版19 遺構 18区　51.第１面(北から)　52.第１面(西から)　53.第２面(北から)
図版20 遺構 18区　54.第２面・第３面(西から)　55.南壁土層(北から)　56.東壁土層(西から)
図版21 遺構 18・１9間区　57.第１面(南から)　58.第２面(南から)　59.南壁土層(北から)
図版22 遺構 19区　60.全景(北東から)　61.SD1802(東から)　62.SD1802(西から)　63.最上層全景(北から)　64.最上層集石(東から)
図版23 遺構 20区・21区　65.20区全景(北から)　66.20区南壁(北から)　67.21区全景(南から)
図版24 遺構 22区　68.調査前(北東から)　69.百々呂屋裏大桝検出状況(西から)　70.百々呂屋裏大桝(西から)
図版25 遺構 22区　71.百々呂屋裏大桝(北西から)　72.百々呂屋裏大桝南面(北から)　73.百々呂屋裏大桝東面(西から)
図版26 遺構 22区　74.百々呂屋裏大桝東面(南から)　75.百々呂屋裏大桝東面(北から)　76.百々呂屋裏大桝南側(西から)
図版27 遺構 23区　77.百々呂屋裏大桝南東裏込石(北東から)　78.百々呂屋裏大桝南東裏込石(南西から)　79.百々呂屋裏大桝東側(南東から)
図版28 遺構 23区　80.百々呂屋裏大桝東側(北東から)　81.百々呂屋裏大桝北東側(南東から)　82.百々呂屋裏大桝東側(南から)
図版29 遺構 23区　83.赤穂上水道(南東から)　84.赤穂上水道(南から)　85.赤穂上水道(南西から)
図版30 遺物 10区・12区出土遺物
図版31 遺物 10区・12区・15地区出土遺物
図版32 遺物 11区・13地区出土遺物
図版33 遺物 13地区出土遺物
図版34 遺物 13地区出土遺物
図版35 遺物 14区・13地区・15地区出土遺物
図版36 遺物 14区出土遺物
図版37 遺物 15地区出土遺物
図版38 遺物 15地区出土遺物
図版39 遺物 15地区出土瓦管（1）
図版40 遺物 15地区出土瓦管（2）
図版41 遺物 18地区出土遺物
図版42 遺物 18地区出土遺物
図版43 遺物 18地区出土遺物
図版44 遺物 18地区出土土錘
図版45 遺物 22区出土遺物（1）
図版46 遺物 22区出土遺物（2）
図版47 遺物 18地区・22区・23区出土遺物
図版48 遺物 23区出土遺物（1）
図版49 遺物 23区出土遺物（2）
図版50 遺物 23区出土遺物（3）
図版51 遺物 11区・16区・23区出土遺物
図版52 遺物 羽口・壁土
図版53 遺物 金属器
図版54 遺物 14区鉄滓
図版55 遺物 木製品・種子・骨・貝

第１章　遺跡をとりまく環境

第１節　地理的環境　（第１・２図）

赤穂城下町跡は赤穂市の南端の赤穂市加里屋に所在している。

赤穂市は兵庫県の南西部に位置しており、南は瀬戸内海に面しており、東は相生市、北は赤穂郡上郡町、西は岡山県備前市と接している。

赤穂市街地の北側には標高253ｍの相生層群伊勢累層のガラス質～流紋岩質多結晶溶結凝灰岩でできた雄鷹台山塊がそびえ、市街地を宍粟市千種町に源を発する千種川が流れ播磨灘に注いでいる。赤穂城下町跡は千種川の海岸平野の右岸に位置する。千種川の上流は古代から千種鉄の産地であり、タタラ製鉄が盛んであったため、土砂の堆積作用が著しく、デルタが発達した。このデルタを干拓して近世には塩田が発達した。赤穂城下町が形成された後も洪水による被害の記録が数多く残されている。昭和51年９月には台風17号の豪雨により堤防が決壊し甚大な被害をもたらした。この災害により堤防の復旧、放水路の新設・拡幅など昭和56年までに復旧整備事業が完了し、安全性が高まった。調査地点での標高は2.5ｍ前後を測る。

近世の山陽道は相生から有年宿を経て船坂峠を越えて備前三石宿を通っていた。城下から姫路に向かう姫路街道は池田時代までは千種川右岸を遡り、根木村で千種川を渡り、周世村を経て、横尾村で山陽道に通じた。浅野時代以降は城下から千種川を渡り、千種川左岸を遡り高取峠を越えて池之内村で山陽道に通じた。備前岡山に向かう備前街道は塩屋村・大津村を経て、帆坂峠を越えて三石宿で山陽道に通じた。

千種川には高瀬舟が運行され、上流地域との物資の流通が盛んであった。海路は坂越浦が赤穂塩などの江戸回漕基地として繁栄した。

鉄道は、明治23年（1890）山陽鉄道が開通し、那波駅と有年駅が設置された。大正10年４月には山陽鉄道有年駅と加里屋町を結ぶ軽便鉄道赤穂線が開通した。昭和26年12月には国鉄赤穂線の相生から播州赤穂駅間が開業し、これに伴い軽便鉄道赤穂線は廃止された。

現在は、市街地を国道250号が通っており、昭和57年に山陽自動車道が開通し、市街地の西側に赤穂インターチェンジが設けられている。

第２節　歴史的環境　（第３図）

赤穂城下町跡は赤穂市南部の千種川右岸に所在する。今回検出した遺構は江戸時代以降のため近世以降の赤穂城下町跡を中心とした歴史を概観する。

赤穂の地は天正14年（1586）生駒親正が赤穂６万石を領有し、天正16年には備前岡山城主宇喜多秀家の支配を受けた。慶長５年（1600）には姫路藩領となり、支城掻上城が築かれ、池田長政が２万２千石で知行した。慶長18年、池田輝政死去の後は備前国岡山藩領に加えられた。元和元年（1615）には池田輝政の５子池田政綱が赤穂城に入り３万５千石を与えられ、赤穂藩が成立した。寛永８年（1621）には池田輝政の６子池田輝興が入封した。池田氏の所領になっていた時期に城の主郭・侍屋敷と町屋との間に旧流路を利用した堀を設け、後の浅野の築城はこれを利用している。

正保２年（1645）に浅野長直が常陸国笠間から入封し、本格的な築城と城下町の建設を計画した。慶安元年（1648）から寛文元年（1661）年まで13年を費やして完成した。元和の一国一城令後に新造された城

第１図　１．兵庫県の位置　　２．赤穂市の位置　　３．赤穂城下町跡の位置

郭として、また近世軍学の成果を最大限取り入れた縄張が実践された城として貴重な存在である。長直の隠居後、浅野長友が藩主となるが、延宝３年（1675）に没し、浅野長矩が藩主となった。元禄14年（1701）浅野長矩の江戸城中刃傷事件により、浅野家は断絶した。元禄15年（1702）下野国烏山藩から永井直敬が３万３千石で入封するが、宝永３年（1706）信濃国飯山に移封となる。替わって、備中国西江原から森長直が２万石で入封した。以後、森家は12代に渡って続き、明治の廃藩置県を迎えた。

明治４年（1871）７月に廃藩置県により、赤穂藩領は赤穂県となり、11月には姫路県に編入された。その後、飾磨県と改称し、明治9年に飾磨県は合併し兵庫県となった。

明治22年（1889）の町村制施行により、加里屋村は上仮屋村と中村の３箇村が合併して、赤穂町が成立した。昭和12年には赤穂町・塩屋村・尾崎村・新浜村が合併して赤穂町が成立した。

昭和26年（1951）９月には赤穂町・坂越町・高雄村が合併して赤穂市が市制を施行した。

第３節　赤穂上水道　（第３図）

赤穂上水道は赤穂城および城下町が千種川の河口に設けられたため、井戸を掘ると塩水が湧き、飲料にならないため、設置された。城だけでなく、城下町全体に給水し、各個配水していた。

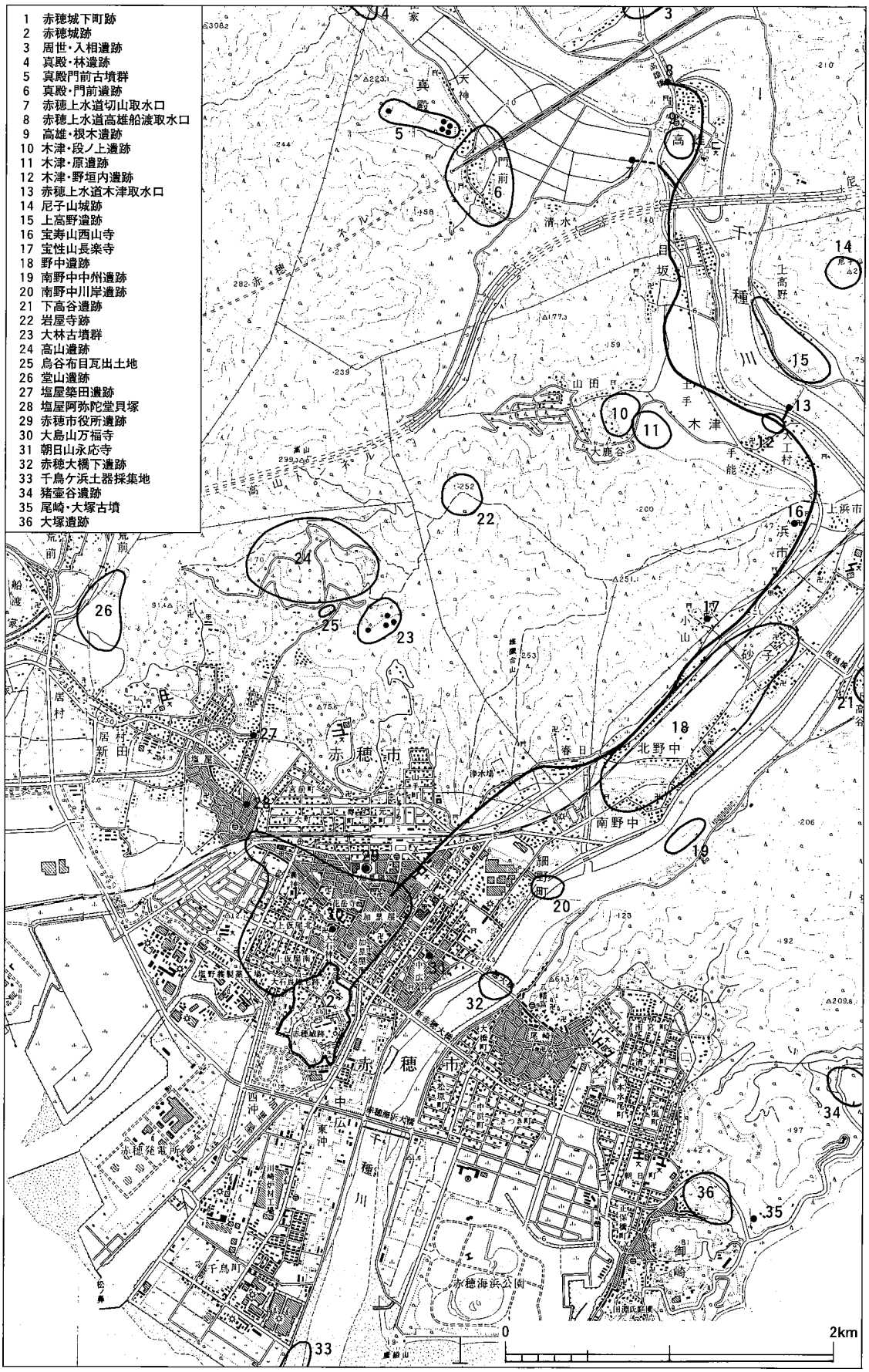
慶長19年（1614）赤穂水道の敷設工事を始め、元和２年（1616）に赤穂の代官であった垂水半左衛門の指揮によって高雄の切山取水隧道が完成し、赤穂水道が通水した。

当初、赤穂城下の上流約７㎞に位置する根木の切山に54間の隧道を掘り、取水し目坂・木津を通り、浜市・野中の山麓を幅1間の明渠で導水し、山崎山の突端に戸嶋桝を設けた。その後、高雄船渡に井堰を築いて取水した。元禄15年（1702）からは木津から取水するようになり、山崎山麓の戸嶋桝から城下北西の新田村に灌漑用水路を分水していた。導水路には山や集落からの悪水の流入防止や余水放流の設備が設けられ、戸嶋桝では土砂止めの堰を設け、上澄みの水を城下に送っていた。

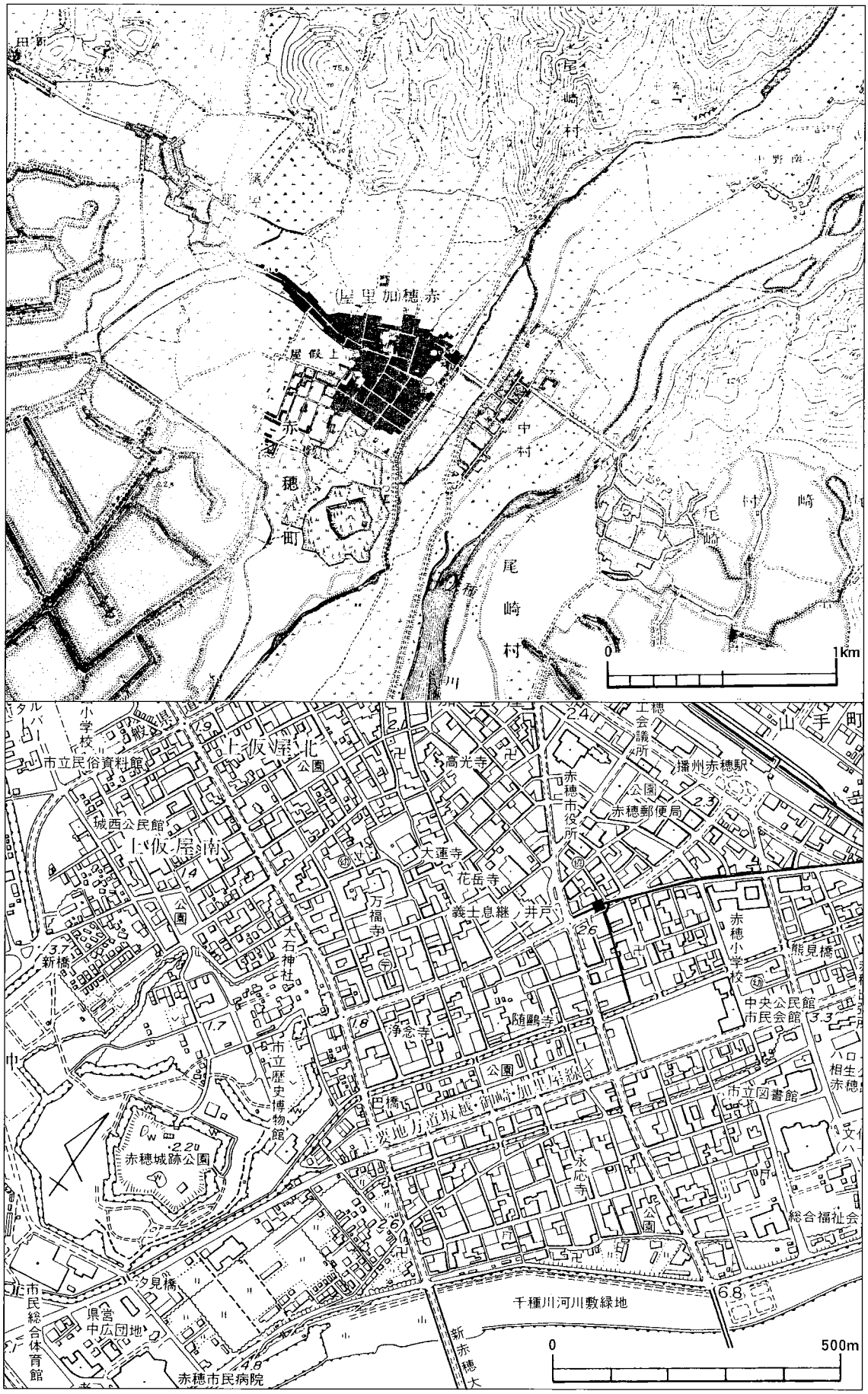
戸嶋桝からは城下に向かい、城下手前に百々呂屋裏大桝を設け防塵竹簀で塵芥を除き、余水は熊見川に流した。百々呂屋裏大桝は二間四方の規模をもち、ここから先は暗渠となった。次の茶屋清三郎前大桝は城内に向かう幹線と西に向かう幹線の分岐点である。

天保11年（1840）５月には赤穂水道の戸島桝から百々呂屋裏大桝までの浚渫と底掘りが行われた。明治中期にはここに礫と木炭による浄化装置が作られた。

昭和19年（1944）12月には近代水道が通水し、その役目を終えた。昭和55年度には赤穂水道の保存のための調査が行われ、保守管理が行われていないため、汚泥の沈殿や水道水としての水質の問題はあるが、雑用水としての活用は可能である事が判明した。この調査を元に旧赤穂上水道の保存計画書が昭和56年12月に策定され、これを元に整備が進められた。



第２図　赤穂城下町跡周辺の主要遺跡



第３図　明治33年赤穂城下町周辺　　赤穂城と調査区周辺

第２章　調査の契機と経過

第１節　調査の契機

今回の赤穂城下町跡の発掘調査は、赤穂市加里屋において兵庫県西播磨県民局上郡土木事務所が計画した街路赤穂駅前大石神社線電線共同溝整備事業に伴うものである。この事業は従来、地上の電柱に設置されていた関西電力の電線とＮＴＴの電話線とを地中に埋設して都市景観を保つものである。この播州赤穂駅から橋本町交差点にかけての事業のうち、南半部の延長約100ｍは周知の埋蔵文化財包蔵地である「赤穂城下町跡」内に含まれている。このため、兵庫県西播磨県民局長の依頼〔西播（上土）第1287号 平成15年10月27日付〕を受けて、調査を実施することとした。調査はまず試掘を行い、遺構の遺存状況と工事により遺構が影響を受ける深さを確認したうえで調査を進めることとした。

第２節　赤穂城下町跡の既往の調査

赤穂城下町跡は赤穂城跡の西側から北側に広がる侍屋敷跡と町屋跡であり、絵図にも描かれていたが、実際に埋蔵文化財として埋蔵文化財包蔵地分布地図に掲載されたのは最近である。

昭和55年には赤穂上水道の試掘調査が行われ、良好な成果を得たため、今後の下水道敷設に当たって、赤穂上水道の保存を行いながら工事を実施する「赤穂旧上水道保存計画書」が昭和56年12月に策定された。

赤穂市では赤穂駅前大石神社線街路整備事業に伴い、平成10年度から平成16年度にかけて、11次の発掘調査を実施している。この間、交通広場整備や防火水槽設置、加里屋まちづくり会館建設、花岳寺門前広場整備、民間宅地開発などで６次の調査を実施している。

いずれの発掘調査も赤穂城下のうち町屋部分のみであり、武家屋敷部分の発掘調査は行われていない。なお、赤穂城跡は昭和46年に史跡指定され、昭和47年度から整備が進められた。昭和58年から平成元年にかけて本丸の発掘調査が行われ、昭和61年度から平成２年度にかけて御殿の間取り表示や大池泉の復原整備が行われた。平成４年度から平成７年度にかけて本丸門の桝形石垣・高麗門・櫓門・厩口門などの発掘調査が行われ、復原整備が行われた。

二の丸は平成７年度と平成11年度から平成13年度の発掘調査により、錦帯池と大石頼母助屋敷を検出し、復原整備が行われた。三の丸は平成12年度に大手門桝形の発掘調査が行われ、復原整備が行われた。

第３節　調査経過および体制　（第４図）

街路赤穂駅前大石神社線電線共同溝整備事業に伴う赤穂城下町跡の調査は、平成15年度に発掘調査を実施し、平成18年度と平成19年度に出土品の整理を実施した。

１．発掘調査の経過

この事業による赤穂城下町跡の発掘調査は、平成15年11月に試掘調査を実施し、この調査成果に基づき平成16年１月に工事立会による調査を実施した。

試掘調査

工事及び調査に先立つ、試掘調査は平成15年11月５日と６日に実施した。試掘は、埋設管の状況と埋蔵文化財の有無、深さの確認を目的に行った。試掘は、①当初Ｒ16桝を予定した工事立会による調査の18-19間区部分、②当初Ｒ15桝を予定した工事立会による調査の22区の北側部分、③Ｒ８桝の工事立会による調査の16区部分、④Ｔ３桝の工事立会による調査の14区部分、⑤Ｅ３桝の工事立会による調査の11区部分の５箇所で実施した。

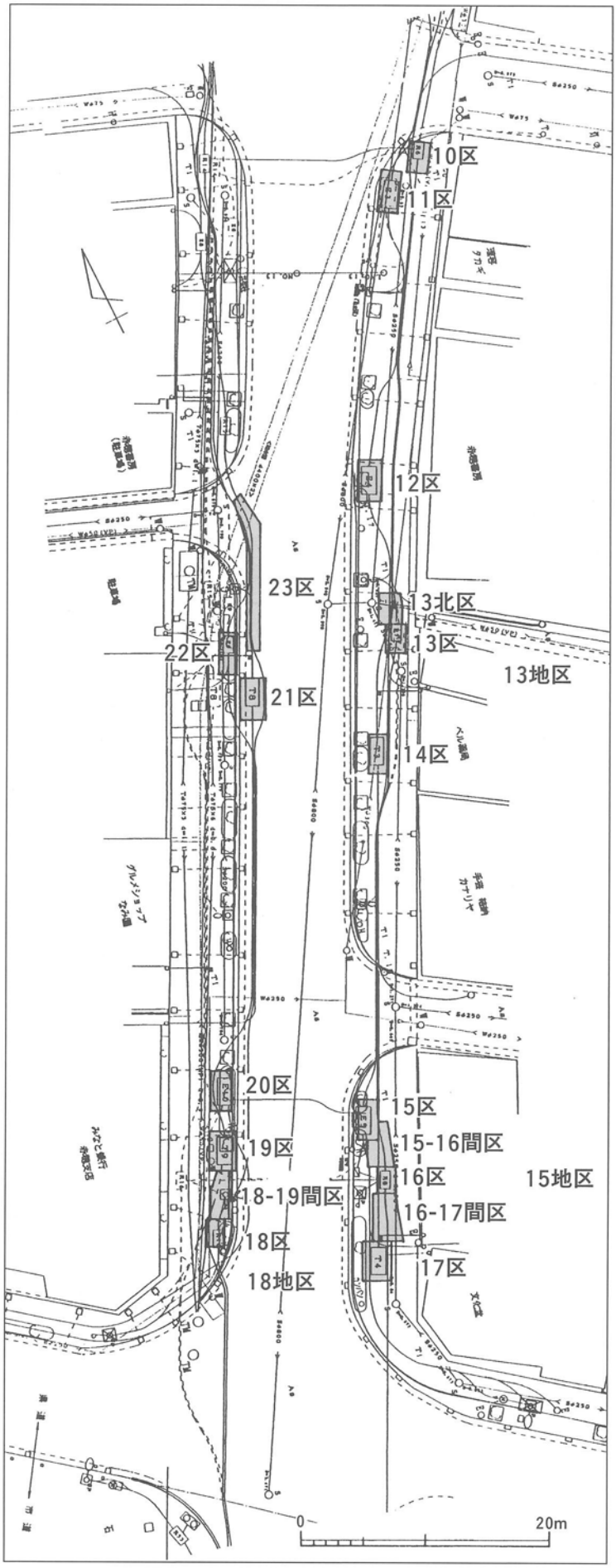
この結果すべての地点で遺構の存在が確認され、調査が必要であることが判明した。また道路西側の①②地点では埋設管が込み合っているため、Ｒ16桝・Ｒ15桝・Ｔ８桝・Ｅ９桝の位置が当初設計から変更された。なお、調査区は、調査終了後に埋め戻しを行った。

工事立会による調査

工事立会による調査は平成16年１月７日～１月27日にかけての実質14日間で実施した。調査面積は107㎡である。

電線共同溝整備事業の工事工程に伴い、まず桝の設置部分の調査を実施し、記録を取り、調査終了後桝設置工事を行った。管路部分については桝周辺で幅が広くなる場所や、重要な遺構が予測される場所を中心に行った。なお、桝周辺で幅が広くなる場所でも既設の管により、遺構面の破壊が想定されている場所は調査を行っていない。

東側11箇所と西側７箇所の総計18箇所で調査を行った。



第４図　調査区位置図

延長約100ｍの東側歩道部分は桝部分で８箇所（北から南に向かって10区〔Ｒ６桝〕・11区〔Ｅ３桝〕・12区〔Ｅ４桝〕・13区〔Ｒ７桝〕・14区〔Ｔ３桝〕・15区〔Ｅ５桝〕・16区〔Ｒ８桝〕・17区〔Ｔ４桝〕）と管路部分３箇所（13北区・15-16間区・16-17間区）の合計11箇所で調査を行った。

延長約70ｍの西側歩道部分は桝部分で５箇所（南から北に向かって18区〔Ｒ16桝〕・19区〔Ｔ９桝〕・20区〔Ｅ10桝〕・21区〔Ｔ８桝〕・22区〔Ｅ９桝〕）と管路部分2箇所（18-19間区・23区）の合計７箇所で調査を行った。

アスファルトやコンクリートおよび盛土などはパワーショベルによって掘削を行い、遺物包含層以下は人力によって掘削を行った。遺構は複数面存在する場合が多く、各面で写真と図面の記録をとり、調査を進めた。調査が複数日になる場合は夜間に覆溝板で覆い養生した。調査終了後には工事を施工した。

２．遺構の保存と保護

22区〔Ｅ９桝〕では『赤穂城下町絵図』に描写のある赤穂上水道の重要施設である「百々呂屋裏大桝」の一部を検出したため、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所と兵庫県西播磨県民局上郡土木事務所、赤穂市教育委員会、赤穂市加里屋地区まちづくり整備室も交えて保存協議を行った。その結果、現状での保存が決まり、①砂を入れて埋め戻すこと、②「百々呂屋裏大桝」以外の場所に〔Ｅ９桝〕を設置するように変更設計すること、③「百々呂屋裏大桝」の路面表示及び解説表示を行うこととした。①は21区の調査で掘削した自然堆積層の砂で大桝内と掘形の石を覆い保存した。②は22区を南に拡張し、「百々呂屋裏大桝」の掘形外に桝を設置した。③は「百々呂屋裏大桝」の推定位置に兵庫県上郡土木事務所が路面ブロックの色を変えて路面表示し、その脇に赤穂市が歩道の占有許可を得て設置・管理する事とした。実際は調査状況の写真を貼り付けた解説表示板を赤穂市教育委員会が平成16年度予算で設置した。

３．出土品整理の経過

出土品の整理は、発掘調査時の取り扱いの回答における協議に基づき実施した。兵庫県西播磨県民局長からの依頼により、平成18年度と平成19年度に実施することとなり、平成18年度は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において、平成19年度は兵庫県立考古博物館において実施した。

平成18年度

平成18年度は、出土遺物の水洗・注記を行った後、接合・補強を行い、実測や拓本・写真撮影するものを選択した。その後、遺物実測を行い、土器の復原を行った後、金属器・木製品と合せて遺物の写真撮影を行い、写真を整理した。また、金属器の保存処理を行った。遺構図はトレースが行えるように補正した。

平成19年度

平成19年度は、昨年度に実測した遺物図と遺構図と共に、レイアウト・トレースを行った。合せて、木製品の樹種同定を実施した。また、木製品の保存処理を行った。原稿執筆・編集を行った後、報告書を刊行した。

４．調査の体制

発掘調査

平成15年度

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長　平岡憲昭

主幹　苦瓜一成、総務課　課長　織田正博

主幹　輔老拓治、企画調整班　主査　甲斐昭光

調査第２班　調査専門員　山本三郎

調 査 担 当：主査　篠宮　正

出土品整理

平成18年度

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長　平岡憲昭

主幹兼総務課長　若生晃彦

主幹　池田正男

整理保存班　主任調査専門員　岡崎正雄、担当課長補佐　岡田章一、主査　菱田淳子

整 理 担 当：調査第２班　主査　篠宮　正

非常勤嘱託員　島田留里、岸野奈津子、眞子ふさ恵、西口由紀、木村淑子、小野潤子、三好綾子、奥野政子、又江立子、荒木由美子

日々雇用職員　藤池かづさ、嶺岡美見

平成19年度

兵庫県立考古博物館

館長　石野博信

副館長（総務部長兼務）　松下信一、総務課　課長　若狭健利

埋蔵文化財調査部長　若生晃彦、主幹　岡崎正雄

整理保存班　調査専門員　西口和彦、担当課長補佐　岡田章一、主査　菱田淳子・岡本一秀

整 理 担 当：調査第２班　主査　篠宮　正

非常勤嘱託員　島田留里

第３章　発掘調査の成果

第１節　調査の概要

１．概要　（第４図）

調査は道路の東側11箇所と西側７箇所の総計18箇所で行った。

延長約100ｍの東側歩道部分は桝部分で８箇所（北から南に向かって10区〔Ｒ６桝〕・11区〔Ｅ３桝〕・12区〔Ｅ４桝〕・13区〔Ｒ７桝〕・14区〔Ｔ３桝〕・15区〔Ｅ５桝〕・16区〔Ｒ８桝〕・17区〔Ｔ４桝〕）と管路部分３箇所（13北区・15-16間区・16-17間区）の合計11箇所で調査を行った。13区と13北区は実質連続した調査区になったため、13地区と呼称した。15区と15-16間区と16区と16-17間区と17区は実質連続した調査区になったため、15地区と呼称した。

延長約70ｍの西側歩道部分は桝部分で５箇所（南から北に向かって18区〔Ｒ16桝〕・19区〔Ｔ９桝〕・20区〔Ｅ10桝〕・21区〔Ｔ８桝〕・22区〔Ｅ９桝〕）と管路部分２箇所（18-19間区・23区）の合計７箇所で調査を行った。18区と18-19間区と19区は実質連続した調査区になったため、18地区と呼称した。

報告書作成においては、調査時点で本来同一の遺構面や遺構番号を別々の番号で登録したものは検討整理して、呼称を統一した。ただし地区あるいは区が異なった場合の面の呼称までは統一していない。

基本層序は、現道路面の直下に遺構面が存在する場合もあるが、道路直下は攪乱が著しい。また、上水道や下水道、雨水管などの攪乱も著しい。以下、遺構あるいは遺構面までは洪水砂や人工的に埋めた砂が堆積している。相対的に城に近い南側の調査区の方が北側の調査区より遺構面や遺物が多い。

第２節　10区の調査成果　（第５図）

１．概要

道路東側の最北端に位置する。西隅に塩ビ製の雨水管が存在した。

２．遺構

遺構面は１面存在し、溝SD1001を検出した。

SD1001　旧赤穂上水道に並行する石組みの溝である。主軸は北から41°東に振り、北東から南西に流れる溝である。幅0.4ｍ、最大深さ0.65ｍ、溝底の標高は1.35ｍである。西側の石列に使用している石材は東側より大きく、高さ0.3ｍ前後で揃えている。東側の石列は高さ0.15ｍ前後に揃えている。石材はいずれも流紋岩の割石である。

３．遺物　（１～16）

SD1001（１～４）

石組み溝からは、染付磁器・施釉陶器・瓦質土器が出土した。

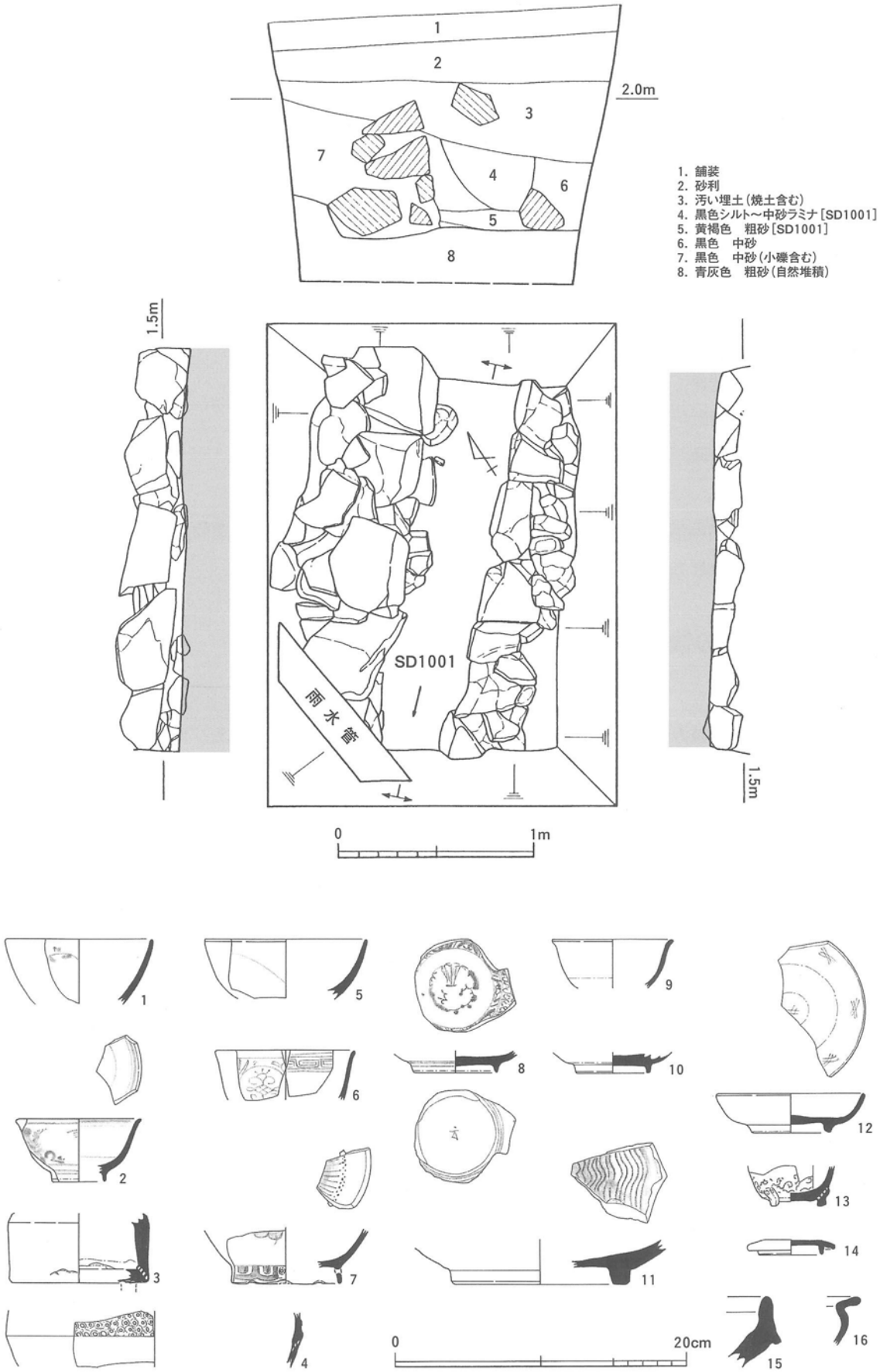
染付磁器　碗１は外面に呉須で草花文を描き、内面は無文である。18世紀後半の肥前磁器である。碗２は端反形で、内面は圏線を描き、外面は草花文を描く。19世紀前半の瀬戸・美濃の製品である。

施釉陶器　鉢３は19世紀前半の瀬戸・美濃の緑釉陶器である。

瓦質土器　釜４は外面に稜を作り、稜より上は魚々子文を型押しで施文している。

石組み下層（５～11）

石組み溝下層からは、染付磁器・施釉陶器が出土した。



第５図　10区断面・平面、出土遺物（１～16）

染付磁器　碗５はくらわんか手で、外面は呉須で線を描いている。18世紀後半の肥前磁器である。碗６は端反形で、口縁内に線描の雷文を描いている。鉢7は型打技法で作っており、輪花風の高台で、穿孔がある。19世紀前半の京焼系である。皿8は内面に松竹梅文を描いている。19世紀前半の肥前磁器である。

施釉陶器　椀９は端反形で、透明釉をかけている。19世紀前半の在地の京焼系陶器である。椀10は肥前系京焼風陶器で18世紀前半である。鉢11は内面に波状の刷毛目を施文し、見込みには砂目痕跡が残る。外面は回転ケズリで高台を削り出している。18世紀前半の肥前陶器である。

包含層（12～16）

遺構に伴わない遺物は、染付磁器・施釉陶器・無釉陶器・瓦質土器がある。

染付磁器　皿12はくらわんか手で、内面は蛇目釉ハギを行い、斜井文を描いている。外面は無文である。18世紀後半の肥前の製品である。香炉13は三足をもち、唐草文を描いている。19世紀前半の京焼系である。

施釉陶器　蓋14は天井部に透明釉をかけている。19世紀前半の京焼系陶器である。

無釉陶器　擂鉢15は擂目が残っていないが、備前焼Ⅳ期で15世紀代である。

瓦質土器　焙烙16は口縁部が外折形の瀬戸内系で、19世紀前半である。

４．小結

10区で検出した石組み溝SD1001は位置と方向から道路側溝と考えられ、出土遺物から19世紀前半以降に構築されたと考えられる。

第３節　11区の調査成果　（第６図）

１．概要

道路東側で10区の南西方向に隣接する。調査区の南部で試掘時の撹乱が存在した。南端に塩ビ製の雨水管が存在した。

２．遺構

遺構面は１面存在し、溝を２条（SD1101・SD1102）検出した。

SD1101　旧赤穂上水道に並行する素掘り溝で、主軸は北から37°東に振る。幅0.42m、深さ0.37mを測る。

SD1102　SD1101の西側に並行する溝で、幅0.55m以上、深さ0.55mを測る。

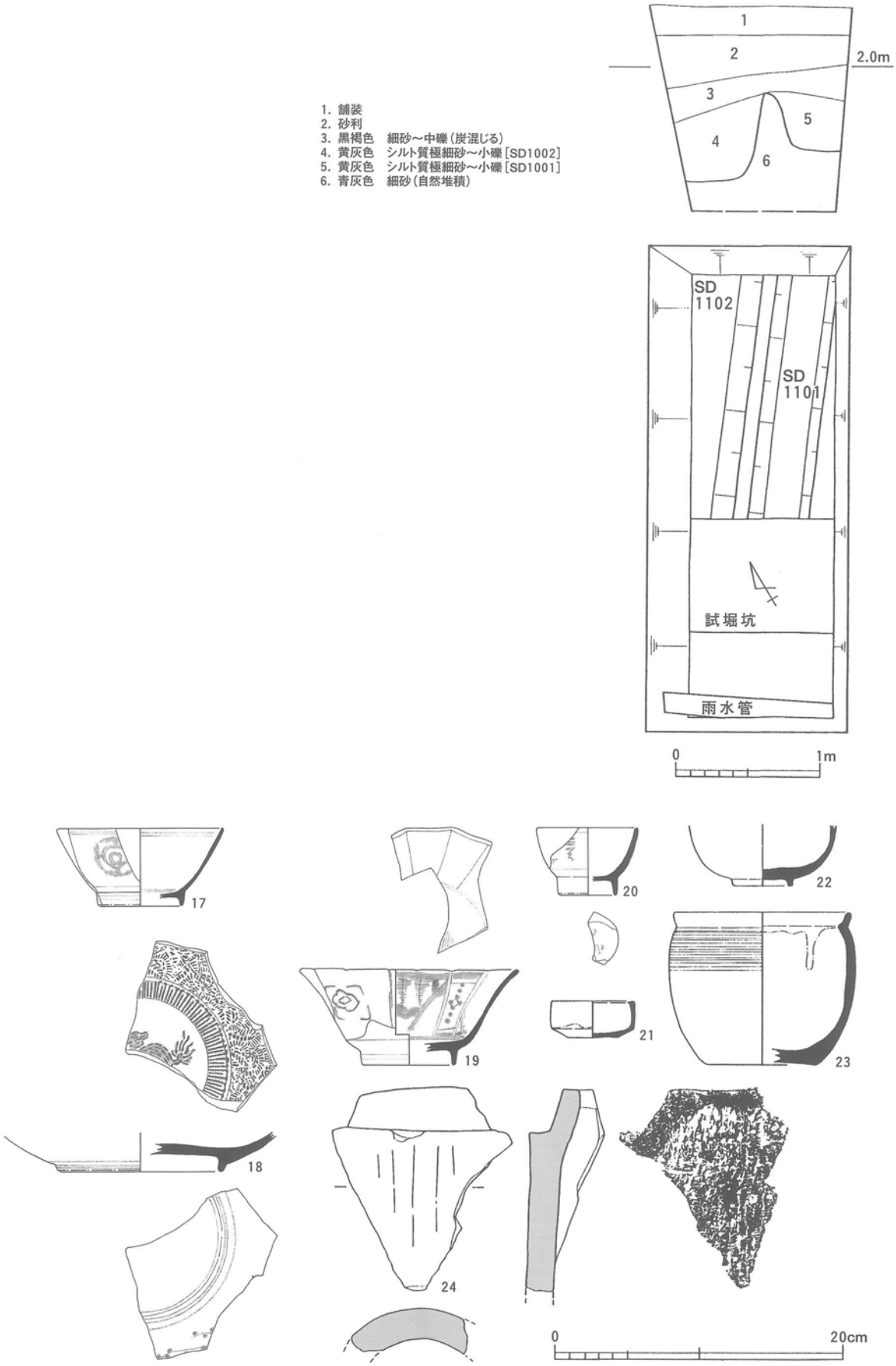
３．遺物

包含層（17～24）

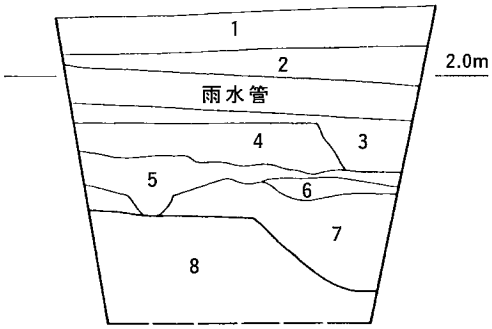
染付磁器（17～19）、陶胎染付（20）、施釉陶器（21）、無釉陶器（22・23）、瓦（24）がある。染付磁器碗17は京焼系で外面の施文はプリントによる。染付磁器皿18は内面に銅版転写による松文と蓮弁文がある。明治の製品である。鉢19は型打技法で作っており、松と梅を描いている。破損後、焼継を行っている。19世紀の肥前磁器である。小坏20は高台が高い。19世紀前半の京焼系の製品である。小鉢21は19世紀前半の京焼系の在地製品である。椀22は漆椀を模倣した19世紀前半の備前焼である。小形甕23は塗土を施している。19世紀前半の備前焼である。丸瓦24は玉縁部分の破片で、内面は布目が残る。

４．小結

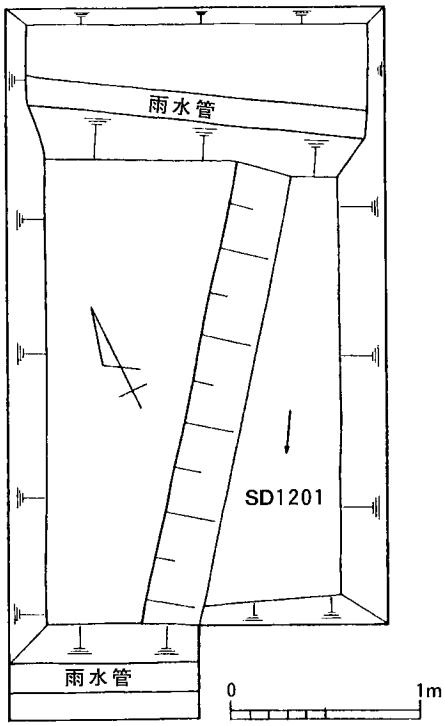
11区で検出した素掘り溝SD1101とSD1102は遺物が出土していないため、機能と時期は不明である。

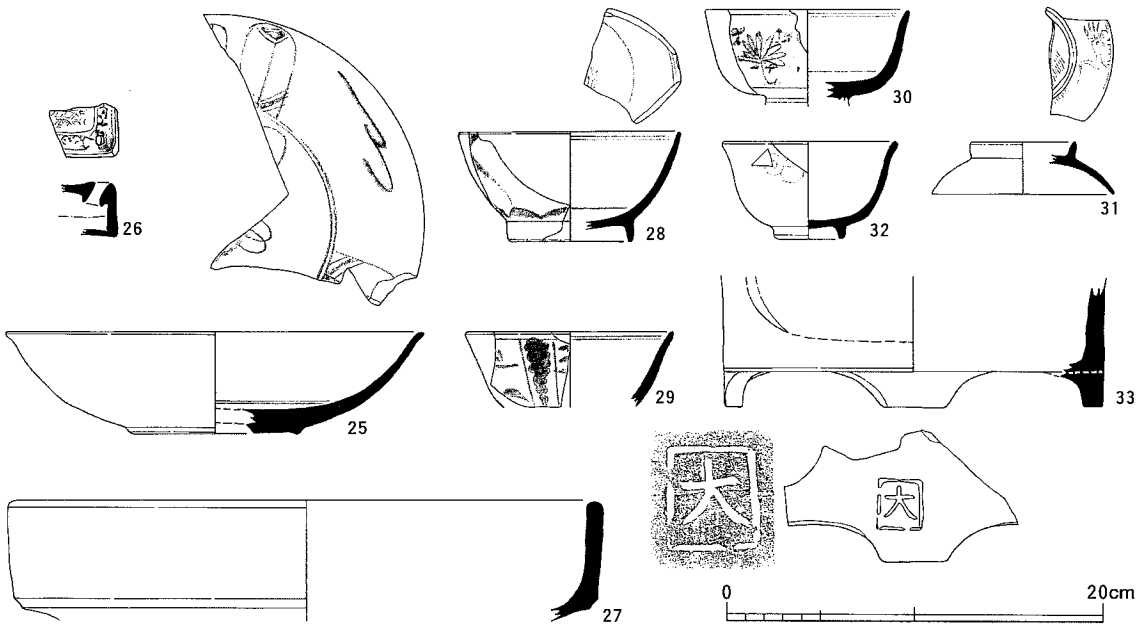


第６図　11区断面・平面、出土遺物（17～24）



1. 舗装
2. 砂利
3. 砂利
4. 褐灰色　極細砂
5. 灰黄色　中砂（漆喰・瓦多量に含む）
6. 黄褐色　シルト質極細砂（壁土か?）
7. 暗灰色　中砂～粗砂［SD1201］
8. 青灰色　細砂（自然堆積）





第７図　12区断面・平面、出土遺物（25～33）

第４節　12区の調査成果　（第７図）

１．概要

道路東側で、11区から南西方向に20mの場所である。北端と南端に塩ビ製の雨水管が存在した。

２．遺構

遺構面を１面検出し、溝SD1201を検出した。

SD1201　旧赤穂上水道に並行する素掘り溝である。主軸は北から37°東に振り、北東から南西に流れる溝である。幅0.7m以上、深さ0.4mである。

３．遺物　（25～33）

SD1201（25～27）

溝からは染付磁器（25・26）、土師器（27）が出土した。皿25は蛇目凹形高台で内面は矢羽文を描く。水滴26は方形の型作りで、角に注ぎ口を穿孔している。焙烙27は口縁部が直立する関西系の製品である。

包含層（28～33）

染付磁器（28～31）、陶胎染付（32）、施釉陶器（33）がある。

碗28は広東碗で18世紀後半から19世紀前半の肥前の製品である。碗29は外面に呉須でよろけ文を描いている。18世紀後半～19世紀前半の肥前の製品である。碗30はくらわんか手で、18世紀後半の肥前の製品である。蓋31は外面に鳥を描いている。京焼系の19世紀中頃の製品である。椀32は端反形で外面に円文を描いている。19世紀前半の肥前の製品である。焜炉33は「因」の押印がある。

４．小結

12区で検出した素掘り溝SD1201は水田に伴う水路と考えられ、出土遺物から19世紀前半以降に埋まったと考えられる。

第５節　13地区の調査成果　（第８・９図）

１．概要

13地区は13区と13北区の総称で、13区の調査の時、北側に水路の存在が想定できたため、13区の北側を拡張して調査を行い、13北区とした。13区は西端に上水道の鉄管が存在し、東側には上水道の塩ビ管が存在した。13北区は西側に上水道の鉄管が存在し、13区に接した南端ではコンクリート製のヒューム管が存在しており大きく撹乱していた。本来水路に使われていた切石が位置を動いて出土した。

２．遺構

遺構面を１面検出し、溝SD1301を検出した。

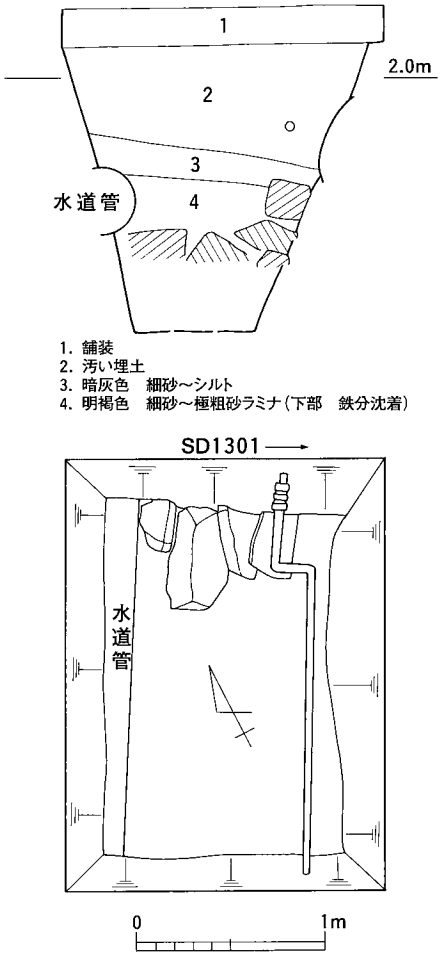
SD1301　13区の北端で検出した北から63°西に振る東西方向の石組み溝である。13区では溝の南側石列を確認したが、13北区では撹乱のため溝の北側石列を確認できなかった。13区の石列北面には流れた砂が堆積していたため、東西方向の石組み溝の一部であると考えた。

３．遺物　（34～61・M1・M2）

遺構に伴わない遺物は、染付磁器・施釉陶器・無釉陶器・土師器・土製品・金属器がある。

染付磁器

碗34は外面にコンニャク印判で桐文を施文し、内面は無文である。18世紀前半の波佐見の製品である。碗35は外面に草花文を描き、高台裏には雪もち笹文を描いている。18世紀後半の波佐見の製品である。碗



第８図　13区断面・平面

36は外面に青磁釉を施釉し、内面は呉須で界線二条とコンニャク印判で五弁蓮華文を描く。18世紀前半の肥前磁器である。小碗38は蛇目凹形高台の端反形である。外面には蘇東坡の「後赤壁賦」を記しているが、一部抜け字がある。19世紀前半の京焼系で東山焼の可能性が高い。碗39は外面に呉須で宝尽くし文と蓮弁文を描き、内面見込みは松竹梅文を描いている。19世紀前半の京焼系である。碗37は外面に赤絵でかな文字を記している。19世紀前半の京焼系である。碗40は外面に呉須で退化した山水文を描いており、内面は無文である。19世紀前半の瀬戸・美濃系の製品である。碗41は呉須で竹文を描いている。19世紀前半の瀬戸・美濃系の製品である。碗42は呉須で外面に草花文、見込みに松葉文を描いている。19世紀前半の瀬戸・美濃系の製品である。碗43は明治以降のもので、イッチン描きで松文を描いている。

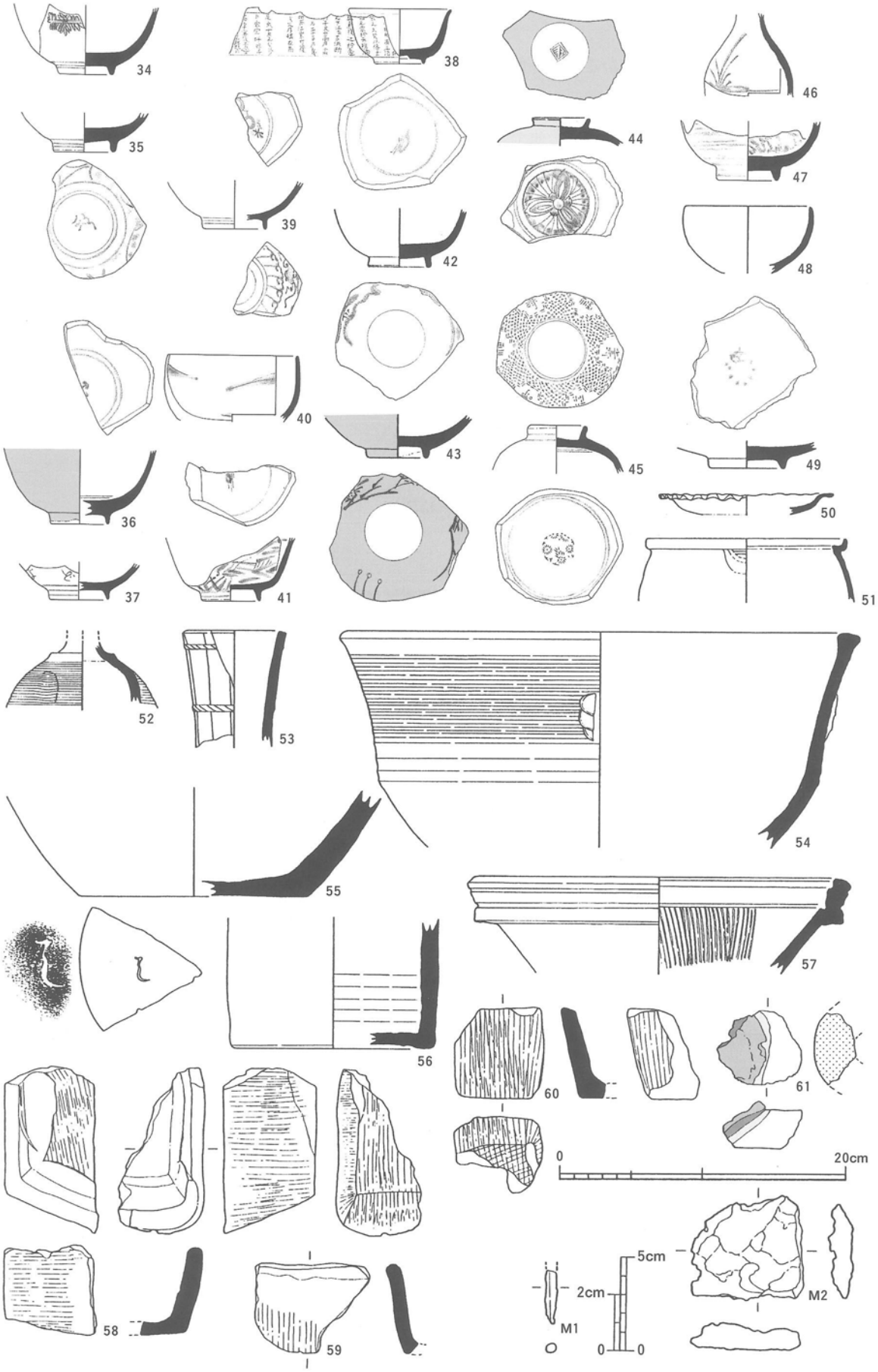
碗蓋44はつまみが比較的幅広く低い。外面は青磁釉を施釉し、呉須でつまみ内に二重枠渦福文を、内面に三方割銀杏文を描く。18世紀前半の肥前磁器である。碗蓋45は外面に青海波文の間に壽福の銅版手である。内面は見込みに松竹梅文をプリントしている。19世紀中頃以降の肥前磁器である。瓶46は呉須で外面に草花文を描いている。18世紀後半の肥前磁器である。

施釉陶器（47～51）

椀47は外面に刷毛目、内面は打刷毛目を施文している。18世紀前半の肥前の刷毛目唐津である。椀48は透明釉をかけ、貫入が入る。京焼系の在地の製品である。陶胎染付皿49は透明釉をかけており、内面は呉須で花文を描く。19世紀前半の瀬戸・美濃の製品である。皿50は灰釉のヒダ皿で、19世紀前半の瀬戸・美濃の製品である。行平鍋51は注ぎ口を作り、口縁部に蓋受けをもつ。透明釉を施釉する。19世紀前半の京焼系の在地製品である。

無釉陶器（52～57）

徳利52は体部の三箇所を凹ますぺかんこ徳利で、体部はカキ目で仕上げ、赤土部を塗る。花生53は箍と箆刻の表現で、桶を模倣している。外面は赤土部を塗る。19世紀前半の備前焼である。鉢54は体部から屈折して口縁部が立ち上がり、カキ目を施し、輪耳を貼り付けている。19世紀前半の備前焼である。甕55は内外に赤土部を塗り、外面は火襷が残る。底部に窯印を刻書している。19世紀前半の備前焼である。火入56は筒形で、備前焼である。擂鉢57は体部外面を回転ケズリする。内面は11本を単位とする擂目を付けた後、口縁のナデを行っている。18世紀後半～19世紀前半の明石の製品である。



第９図　13地区出土遺物（34～61,M1.M２）

土師器（58～60）

火舎火鉢58～60は全容がわかるものがないが、型作りである。59は鉄線切りした粘土板を作り、細かな布を当てた型に貼付け、外面を荒いハケで仕上げ成型したのち、粗い布目をつけている。58の内面の一部には外面と同じ調整痕が残っており、他で、はみ出して切り取った粘土を再利用している。全体の法量は不明である。

土製品（61）

羽口61は破片であり、先端は斜めに変色している。

金属器（M1・M2）

金属器は鉄釘M1と鉄滓M2がある。鉄釘M1は先端部分の破片である。鉄滓M2は平坦な底部をしている。

４．小結

13区北端で検出したSD1301は位置から「百々呂屋裏大桝」から東へ余水を流す石組みの排水路と考えられる。後世にヒューム管に変えられており、残りは悪い。

第６節　14区の調査成果　（第10～12図）

１．概要

14区は道路東側で、13区の南西７ｍに位置する。調査区に並行して上水道の鉄管が存在し、南側に試掘の痕跡が残る。

２．遺構

遺構面を３面検出した。それぞれの面の間には砂が堆積している。

第１面

第１面は土坑SK1401を検出した。

SK1401　調査区の中央東壁に位置する。直径25cm、深さ35cmを測る。多量の鉄滓や羽口が出土した。

第２面

第２面は土坑SK1402を検出した。

SK1402　調査区の中央南寄りの東壁に位置し、南側は試掘坑に切られていた。

第３面

第３面は溝SD1403と土坑SK1404を検出した。

SD1403　調査区の西端に位置する南北方向の素掘り溝である。主軸は北から31°東に振り、北東から南西に流れる溝である。幅0.6m以上、深さ0.3mである。

SK1404　SD1403の東側、調査区の東壁に位置し、直径40cm、深さ40cmを測る。

３．遺物　（62～82・M3～M13・W1）

SK1401（62～68・M3～M5）

染付磁器・施釉陶器・無釉陶器がある。碗62は広東碗で19世紀前半の肥前磁器である。碗63は見込みに花文を描く半球形碗で、京焼を模倣した19世紀前半の肥前磁器である。鉢64は飛鳥文を描いている。皿65は内面に櫛描文を持つ透明釉のかかった信楽の製品である。甕66は朱泥の小甕である。擂鉢67は間隔のある擂目で、内面は摩滅が著しい。甕68は大谷焼の大甕で鉄釉をかける。鉄滓Ｍ３～Ｍ５は椀形滓であり、Ｍ５は羽口が付着している。

SK1402（69～72）

染付磁器・施釉陶器・土製品がある。碗69はくらわんか手で、外面に呉須で葦文を描いている。18世紀後半の肥前の製品である。椀70・71は透明釉をかけた18世紀前半の肥前産の京焼風陶器である。羽口72は直径7.8cm、孔径2.2cmである。

SD1403（73・74）

青磁・施釉陶器がある。皿73は17世紀後半から18世紀前半の肥前の青磁である。椀74は透明釉をかけた17世紀後半から18世紀前半の京焼風の肥前陶器である。

SK1404（M6～M13）

鉄滓M6～M13は椀形滓であり、M12は羽口が付着している。

第１面より上層（75～82・W1）

碗75は広東碗で外面に草花文、内面見込みに松葉文を描いている。19世紀前半の肥前磁器である。椀76は透明釉をかけた17世紀後半から18世紀前半の京焼風の肥前陶器である。椀77は刷毛目唐津で外面は波状の刷毛目、内面は打刷毛目を施文している。18世紀前半の肥前陶器である。皿78は京焼風の陶胎染付で、19世紀中頃以降の瀬戸・美濃の製品である。鉢79は京焼風の灰釉陶器である。蓋80はつまみを三方向から押さえている。19世紀前半の京焼系の在地製品である。蓋81は菊花形のつまみを付けている。19世紀前半の京焼系の在地製品である。擂鉢82は５条１単位の揃っていない櫛で擂目をつけている。

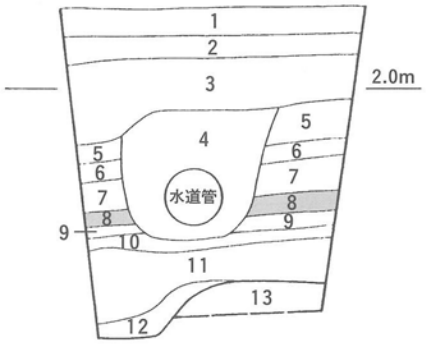
楔W1は長さ12.3cmである。

第２面より上層（M14）

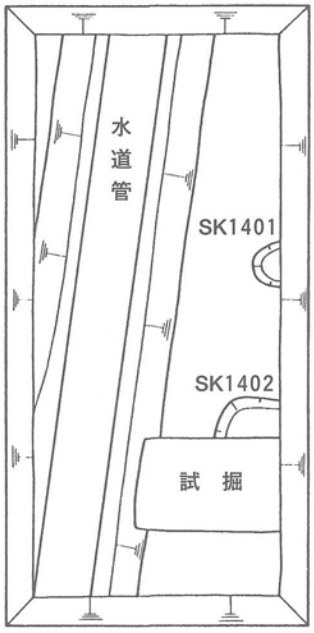
鉄滓M14は椀形滓である。

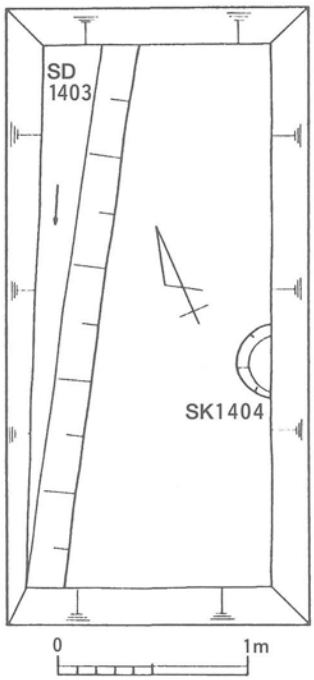
４．小結

14区で検出した第３面の素掘り溝SD1403は水田に伴う水路と考えられ、出土遺物から18世紀前半までの遺物が出土している。第２面のSK1402からは18世紀後半、第１面のSK1401からは19世紀前半の遺物が出土している。このことから、18世紀後半より前は水田であり、18世紀後半以降に宅地化されたことが判明した。

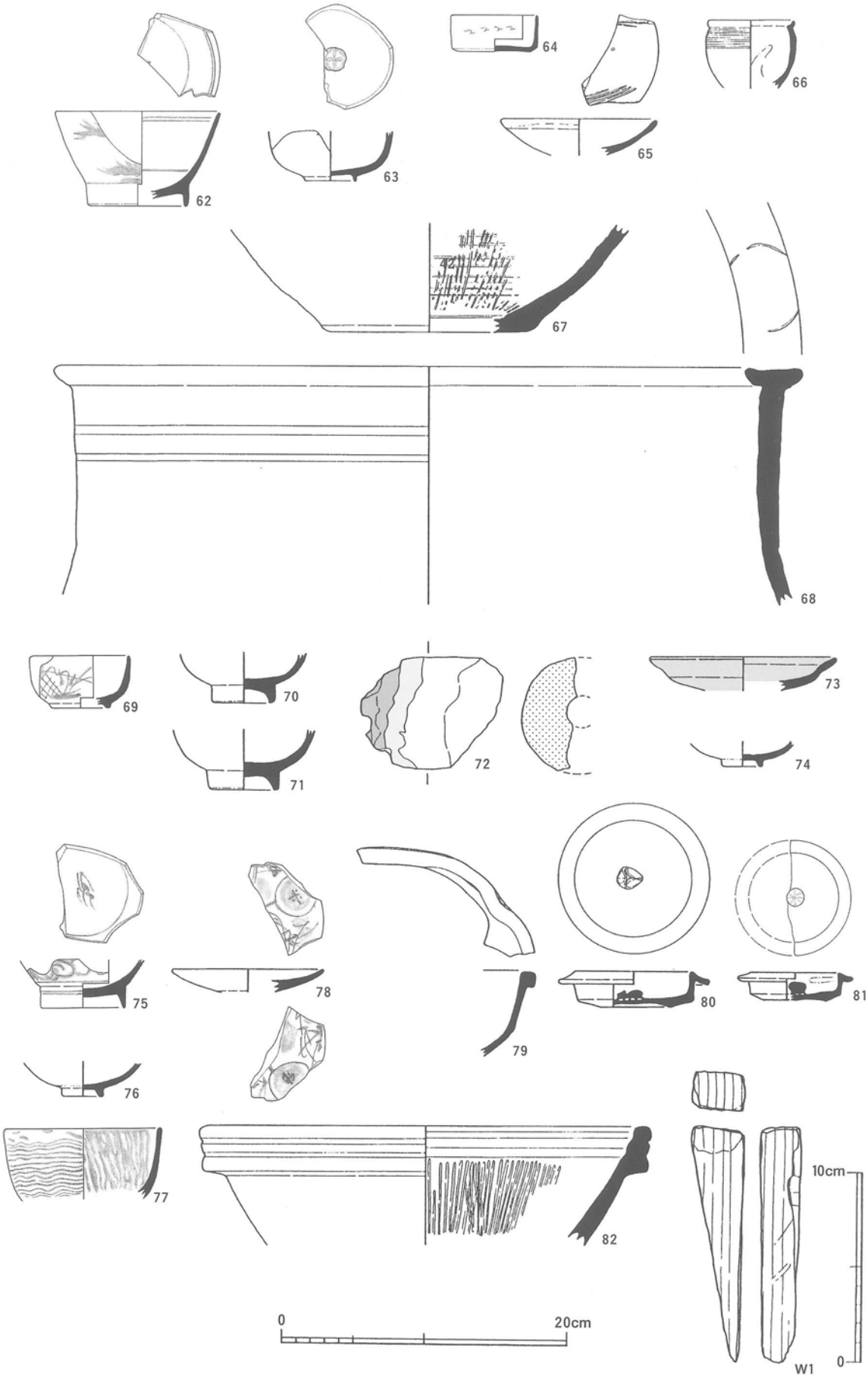


1. 舗装
2. 砂利
3. 汚い埋土
4. [上水道掘形]
5. 黄褐色　細砂～中砂（小礫混じり、汚い埋土）
6. 明黄褐色　極細砂
7. 黄褐色　極細砂（山土）
8. 灰色　シルト質極細砂［第1面］
9. にぶい黄褐色　細砂～中砂
10. 明黄褐色　細砂
11. 褐色　細砂［SD1403］
12. 黒色　細砂（シルト混）
13. 青灰色　細砂（自然堆積）［第2面］

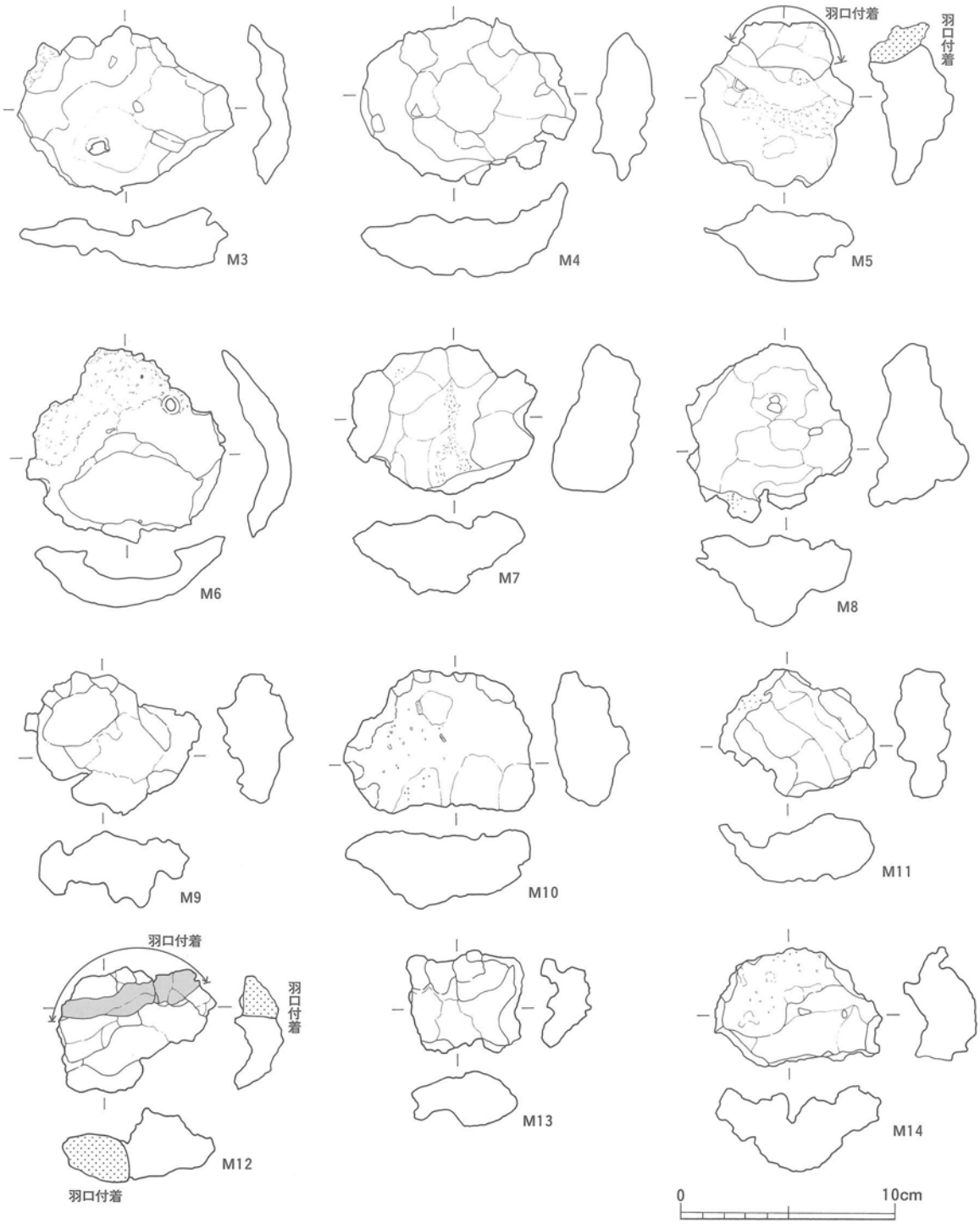




第10図　14区断面　第1面・第3面平面



第11図　14区出土遺物（62～82,Ｗ１）



第12図　14区鉄滓（Ｍ３～M14）

第７節　15地区の調査成果

１．概要

15地区は15区と15-16間区と16区と16-17間区と17区の総称で、道路東側の南端に位置する。16区と16-17間区の東端には下水道の塩ビ管が存在する。16区の北端に試掘の痕跡が残る。

２．遺構　（第13～16図）

遺構面を３面検出した。それぞれの遺構面の間には人工的に埋めた砂あるいは洪水砂の間層がある。遺構面はいずれの面も炭を含む生活面である。

第１面

第１面は上層の撹乱で明瞭に面を検出できなかった。ただし、断面の観察により、遺構面と旧上水給水路の掘削面を確認した。面は炭を含み、締まっており、15-16間区の南西隅で礎石を１箇所検出した。

SK1501　16-17間区の北端に位置し、SD1502を切る土坑である。直径0.6m以上、深さ1.0mを測る。

SD1502　15-16間区と16区と16-17間区で検出した旧上水給水路である。調査区内で長さ７m、幅約４m、深さ約1.25mの掘形の底に26本の瓦管を埋設している。瓦管は北から南に向ってA01からA26と呼称した。瓦管の間隔から、15-16間区と16区との間で未調査の瓦管が１本、16区と16-17間区との間で未調査の瓦管が２本存在する。A01からA15まで北から30度東に振り、A15とA16との間で15°屈折し、A16からA26まで北から15°東に振っている。瓦管の継方と傾斜から北から南に給水し、SK1503の継桝に接続している。埋土は第2面や第3面の炭層を含むブロック土である。

A01は玉縁部分を、A02は頭部を、A14は玉縁部側を打ち欠いている。A15は全長が他より長く、玉縁部が短く、重量も重いことから、補修したと考えられる。A16はA15側の一部が６cm程度欠損している。管内部は下半部に鉄分が沈着しており、軟質の焼成のものは布目痕跡が摩滅している。

A27・A28は補修部分の覆い用で、A27は軒丸瓦の瓦当部分をはずして丸瓦と同じ形態でA14とA15の接合部分を覆い、A28はA15とA16の接合部分とA16の欠損部分を覆っている。A28の欠損は調査時のものである。すべての継ぎ目部分の目地は漆喰で覆っており、特にA27とA28の補修部分は全体に漆喰で覆っている。

SD1503　16-17間区南西部で検出した上水給水路で、３本の瓦管を検出した。16-17間区南部は大きな撹乱坑が存在し、掘形は検出できなかった。瓦管は西から東に向ってB01からB03と呼称した。接続方向からSK1504方向に向かって延びている。

SK1504　16-17間区の南東部に位置し、ほとんど調査区外に存在している。SD1502の給水管が接続しているため、継桝の可能性が高い。上部は漆喰で覆っている。

第２面

全体に炭を含む生活面を検出した。ただし15-16間区と16区と16-17間区は第１面の撹乱が著しい。17区15区は炭面の凹凸が著しい。17区の南東隅で礎石を１箇所検出した。

SD1505　17区の南西部端で検出した溝で、調査区外に延びているため規模は不明である。

第３面

炭を含む生活面を検出した。第２面と同様に15-16間区と16区と16-17間区は撹乱が著しい。15区は西側より東側の炭面の堆積が厚い。15-16間区の西側中央部で礎石を１箇所と16-17間区の北西壁際で礎石２個、１箇所を検出した。17区の南西隅で石列と北東部でピットP1506を検出した。石列は南北方向に約80cm延

び、４個の平坦な石を並べている。

P1506　17区の北東部で検出した。直径20cm、深さ４cmである。鉄釘が出土した。

３．遺物　（83～155・W2・W3・M15～M25）

第１面より上（147～155）

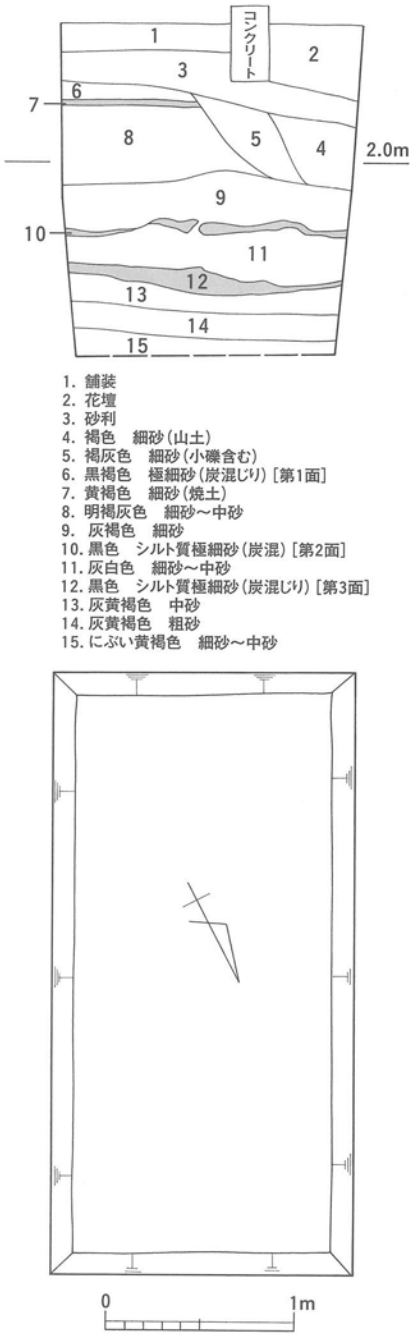
碗147は外面に網目文を描いている。17世紀後半から18世紀前半の肥前磁器である。碗148は外面に松文を描いている。18世紀後半の肥前磁器である。皿149は変形の型作りで、19世紀前半の三田青磁である。椀150は鉄釉がかかっている。碗151は粗製の白磁である。香炉152は呉須で圏線を描く。18世紀後半の肥前の陶胎染付である。鉢153は内傾する口縁形態である。19世紀前半の肥前の製品である。土師器焙烙154は内傾する口縁を持つ関西系の焙烙である。18世紀前半に位置づけられる。羽口155は先端が黒化している。

SK1501（83・84・M15）

椀83は底部に銘款「善」の押印がある。18世紀前半の肥前の京焼風陶器である。鉢84は底部で内面に自然釉がかかっている。M15は椀形滓である。

SD1502掘形（85～107・W2・W3・M16～M20）

仏飯器85は外面に蛸唐草を描いている。猪口86は鋸歯文を描く。碗87・88は外面に稲束を描く広東碗である。個体の違う同文の破片が複数存在する。皿89は蛇目釉ハギを行い、砂目跡が残る。18世紀前半の波佐見の製品である。椀90は底部に銘款「㊖」の押印がある。18世紀前半の肥前の京焼風陶器である。椀91～95は半球形椀で、個体の違う同文の破片が複数存在する。瓶底部96の内面は荒い回転ナデの痕跡が残り、中央部に自然釉の降灰が認められる。鉢97は匣鉢形で外面中央に⑪の窯印を刻印する備前焼である。擂鉢98は口縁の一部である。擂鉢99は小振りで全体に赤土部をかける。



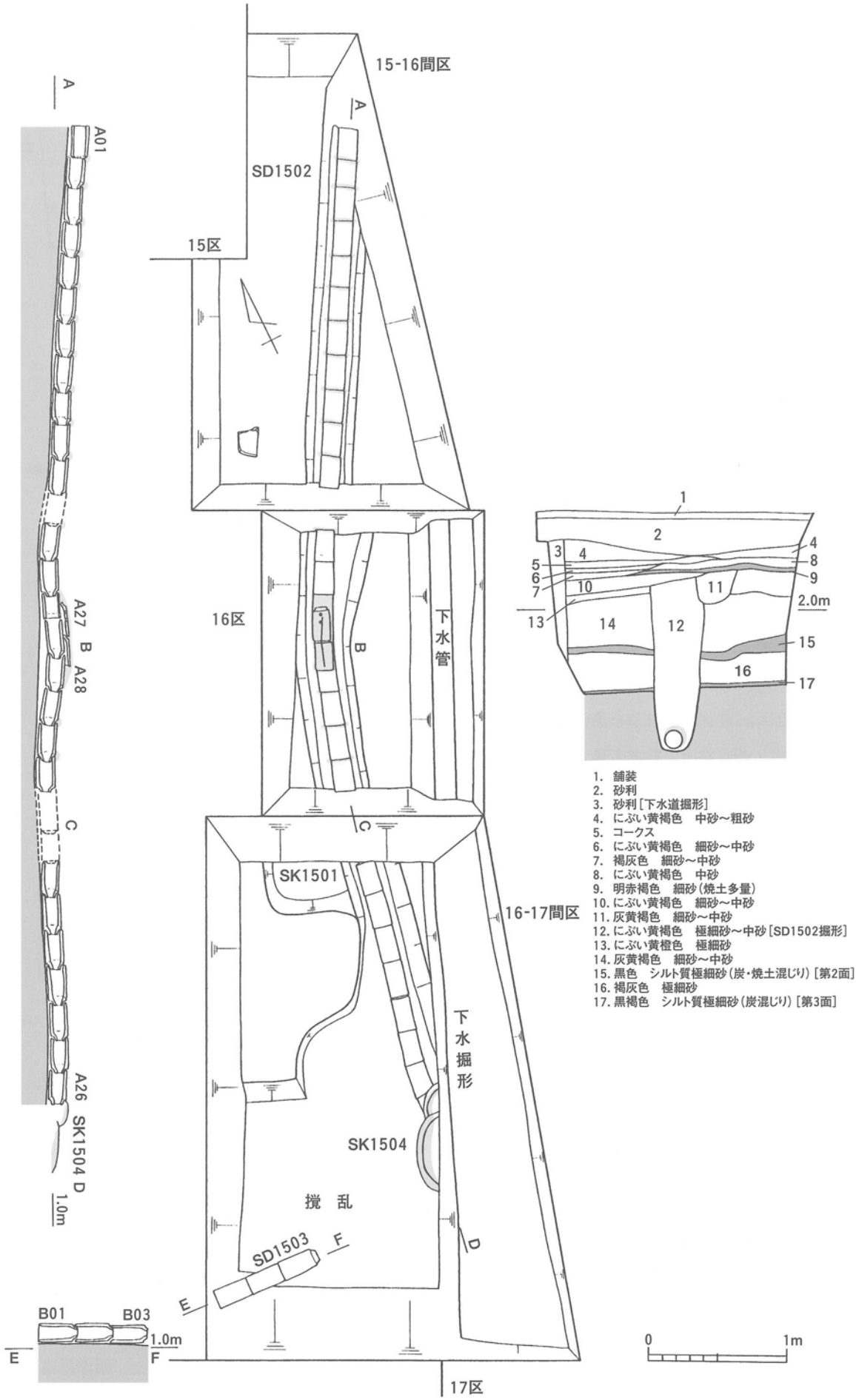
第13図　15区断面・平面

甕100は短く直立する口頸部をもち体部にカキ目を施す。焙烙101は口縁外折形の瀬戸内系の形態である。火鉢102は四隅に高さ4.6cmの脚台が付く。方火鉢103は一辺29.2cmである。軒丸瓦104は左三巴文で珠文は推定12個である。丸瓦105は玉縁部分の破片である。羽口106は直径9.5cm、孔径2.3cmで、先端は斜めに変色・付着している。羽口107は先端部分の破片である。

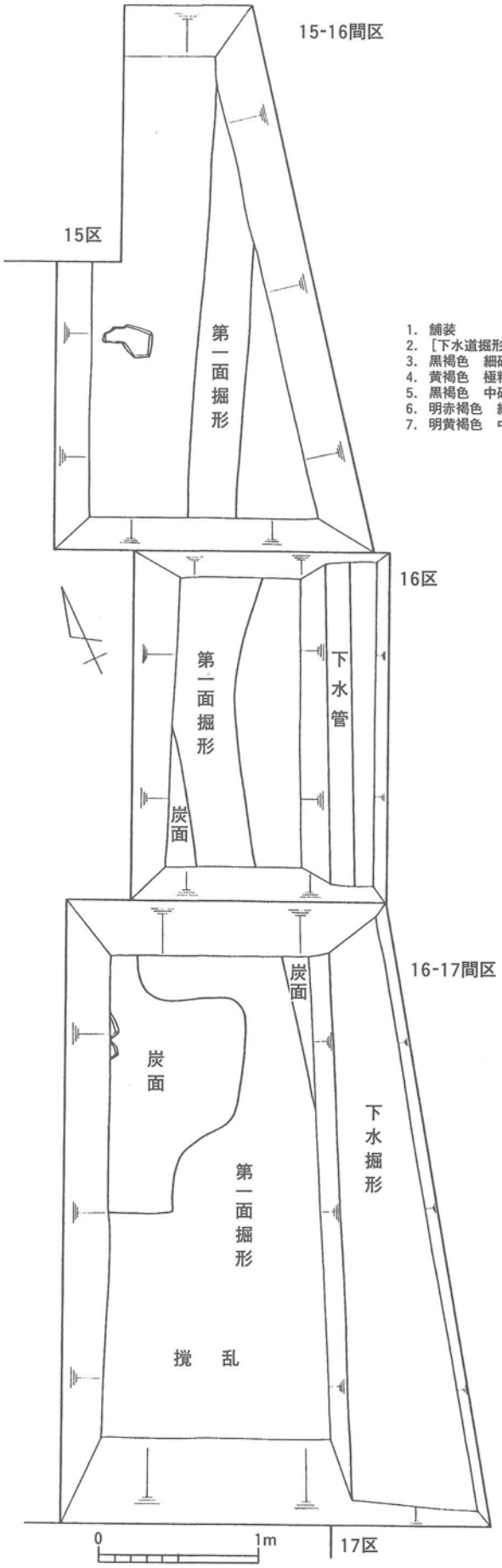
漆椀Ｗ２は内面が赤漆、外面が黒漆である。板Ｗ３は断面長方形の柾目の板である。先端が焦げている。M16は鉄釘か火箸であろう。鍵M17はＬ形をなし、先端の断面形は円形、基部の断面形は長方形である。M18は先端を欠損しているが鍵であろう。鉄滓M19・M20は椀形滓である。

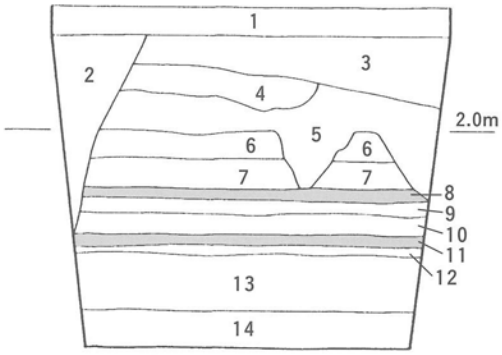
SD1502（108～133・137・138）

瓦管108～133の内、完存している23点は、長さ25.4cm～29.1cm、玉縁部径8.1cm～9.3cm、頭部径13.3cm

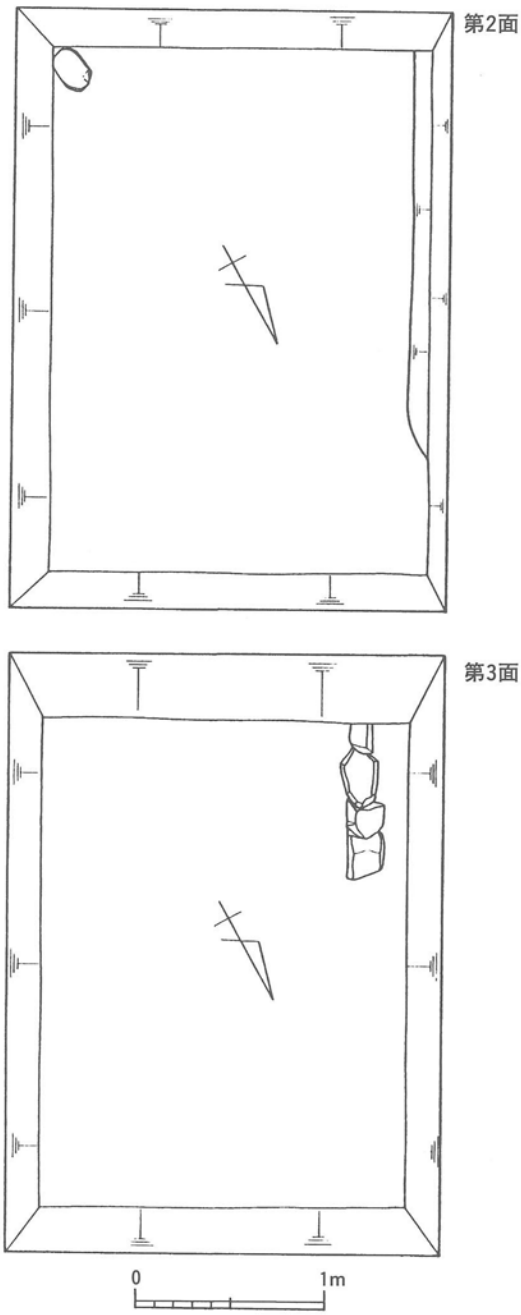


第14図　15-16間区、16区、16-17間区第1面平面



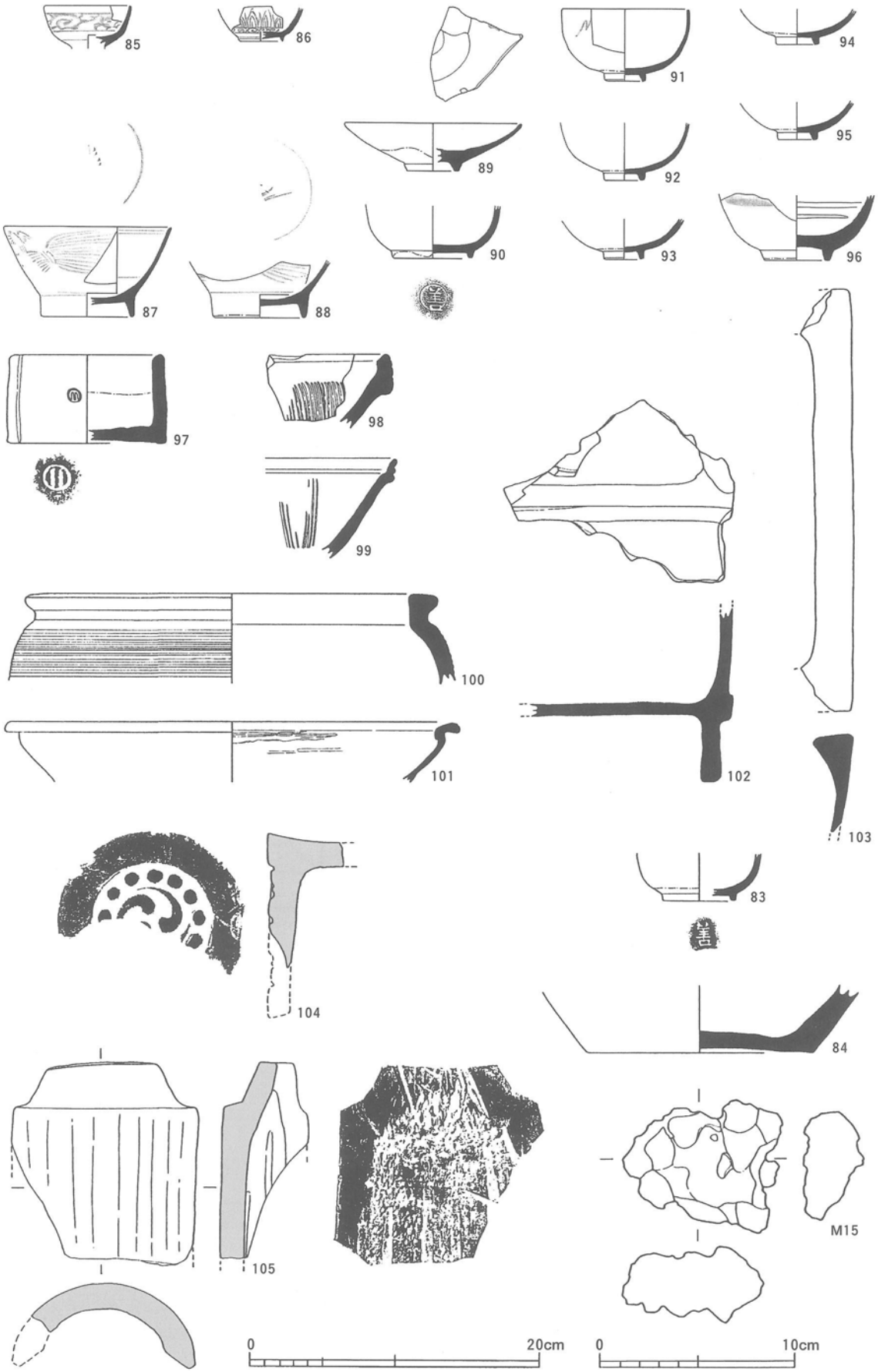


1. 舗装
2. ［下水道掘形］
3. 黒褐色　細砂（小礫混じり、汚い埋土）
4. 黄褐色　極粗砂（山土）
5. 黒褐色　中砂～細砂
6. 明赤褐色　細砂（焼土多量）
7. 明黄褐色　中砂～細砂（洪水砂）
8. 黒褐色　細砂（炭多量、焼土混じり）［第2面］
9. 灰黄褐色　細砂～中砂
10. にぶい黄褐色　シルト質極細砂
11. 黒褐色　細砂
12. 褐灰色　細砂（にぶい黄褐色　シルトブロック含む）［第3面］
13. 灰色　細砂～極細砂
14. 暗灰黄色　細砂（自然堆積）

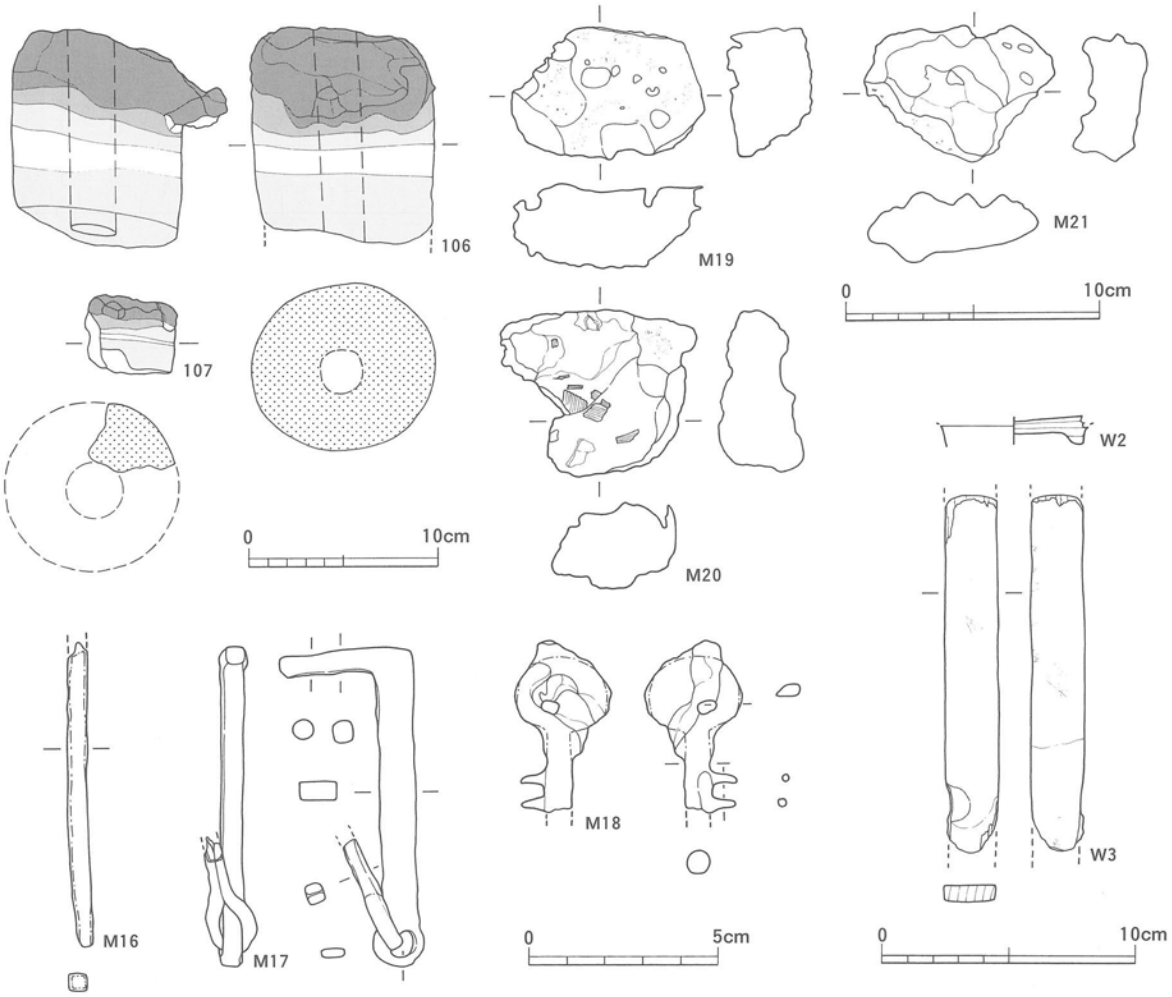


第15図　15-16間区、16区、16-17間区第３面平面

第16図　17区断面・第2面・第３面平面



第17図　15地区出土遺物（1）（83～105,M15）



第18図　15地区出土遺物（2）（106.107,M16～M21,W2.W3）

～14.5cmである。108は玉縁部分を、109は頭部を、121は玉縁部側を打ち欠いている。122は全長が他より長く、玉縁部が短く、重量も重い。ほとんどのものが内面に粘土板の重ね目や布の綴じ合わせ痕が残る。管内部は設置時の下半部に鉄分が沈着しており、軟質の焼成のものは布目痕跡が摩滅している。軒丸瓦137は玉縁式の軒丸瓦で水道管の覆いにするために、瓦当部分を打ち欠いている。釘留穴が二箇所存在する。丸瓦138は凹面に布目が残り、凸面は良く磨いている。

SD1503（134～136）

瓦管134～136は、長さ24.2cm～25.6cm、玉縁部径7.5cm～7.9cm、頭部径12.5cm～12.9cmとSD1502に使用している瓦管より小振りである。

SK1504掘形（M21）

鉄滓M21は椀形滓である。

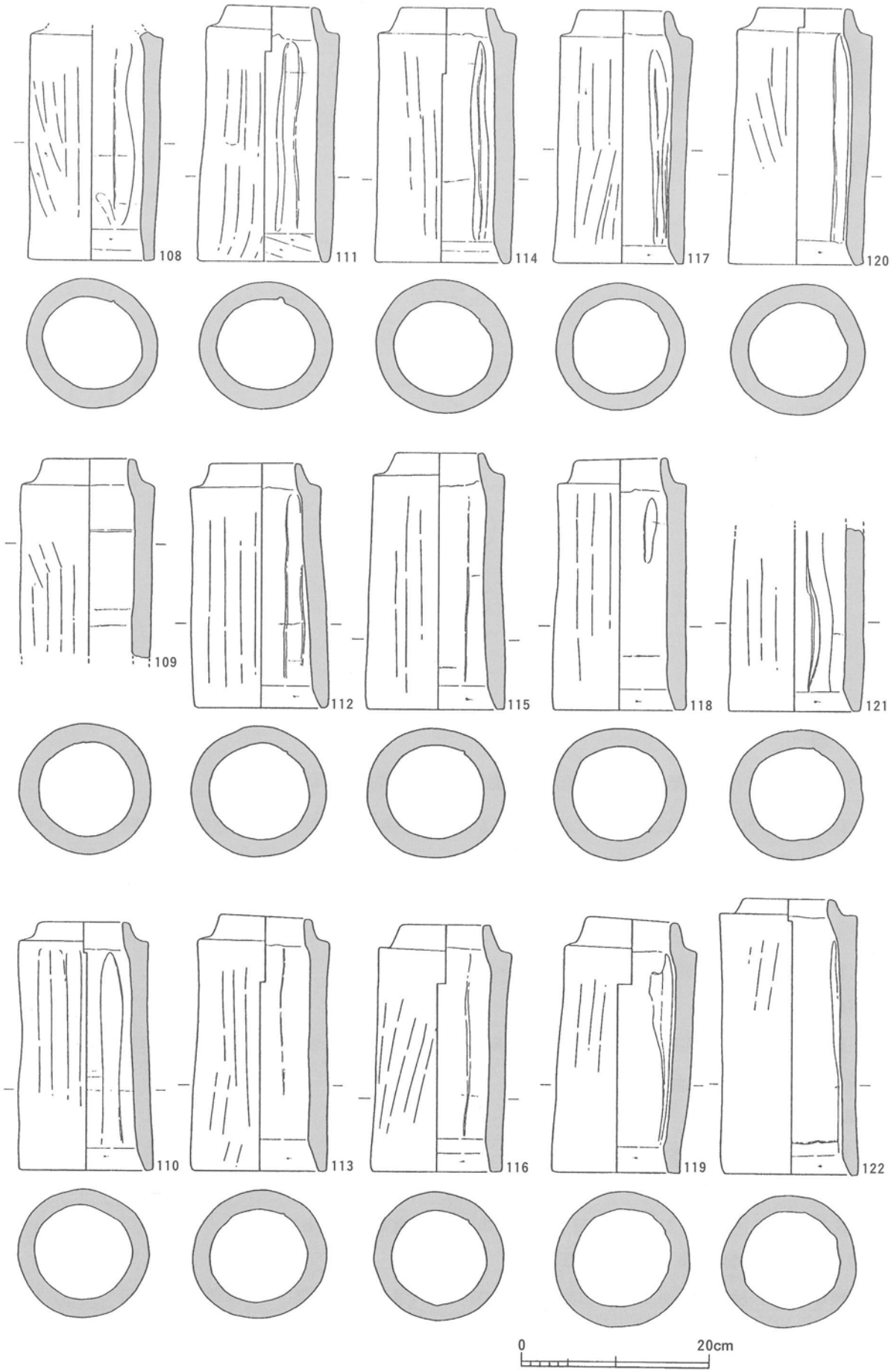
第２面より上（139）

擂鉢139は内面に６本１単位の擂目をもつ鉢で、18世紀前半の肥前陶器である。

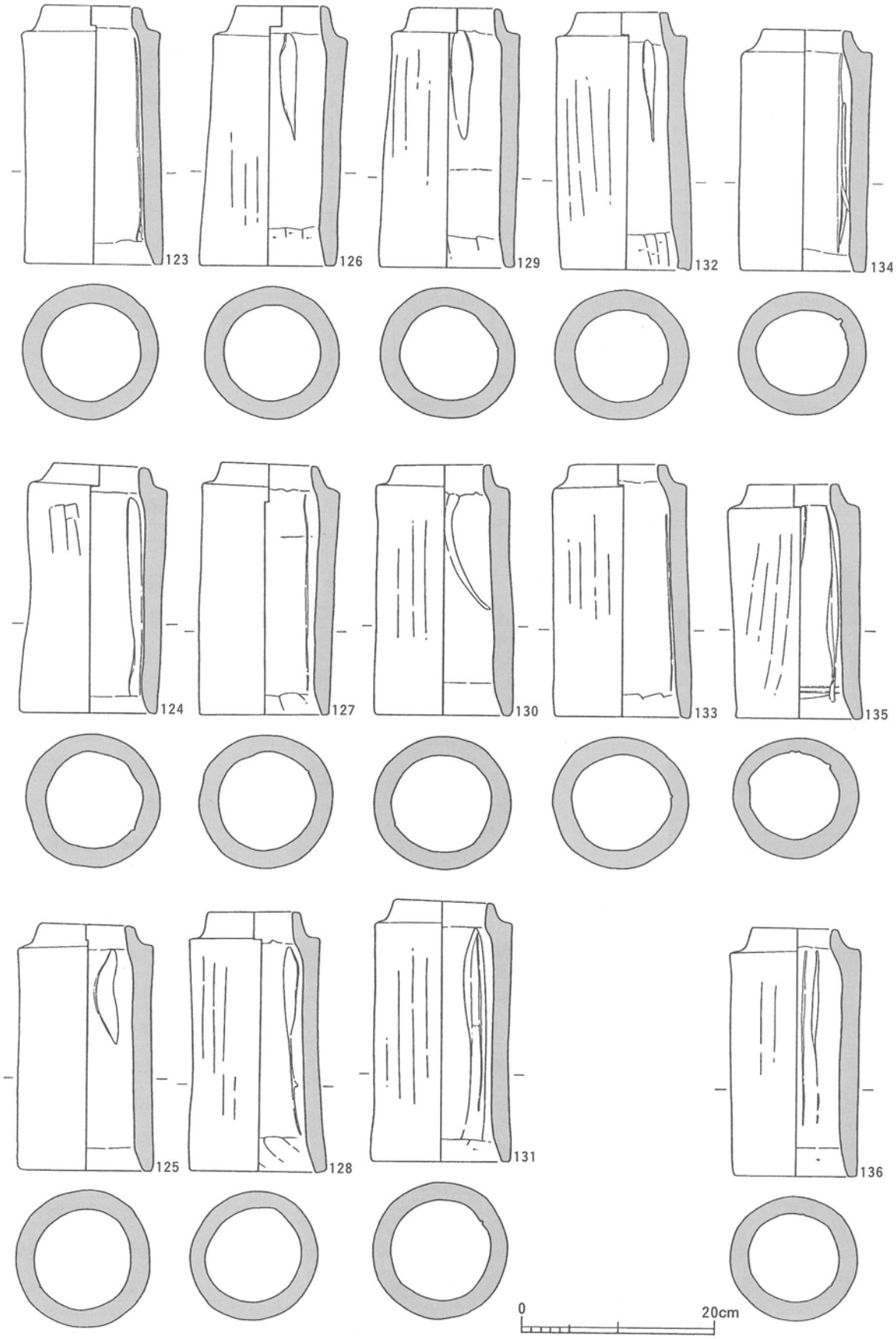
第２面（142・144・145・M22・M23）

擂鉢142は口縁部の断面三角形で18世紀前半の丹波焼である。小皿144・145は景徳鎮の青花である。鉄釘M22は断面形が扁平である。鉄釘M23は屈折して捻れている。

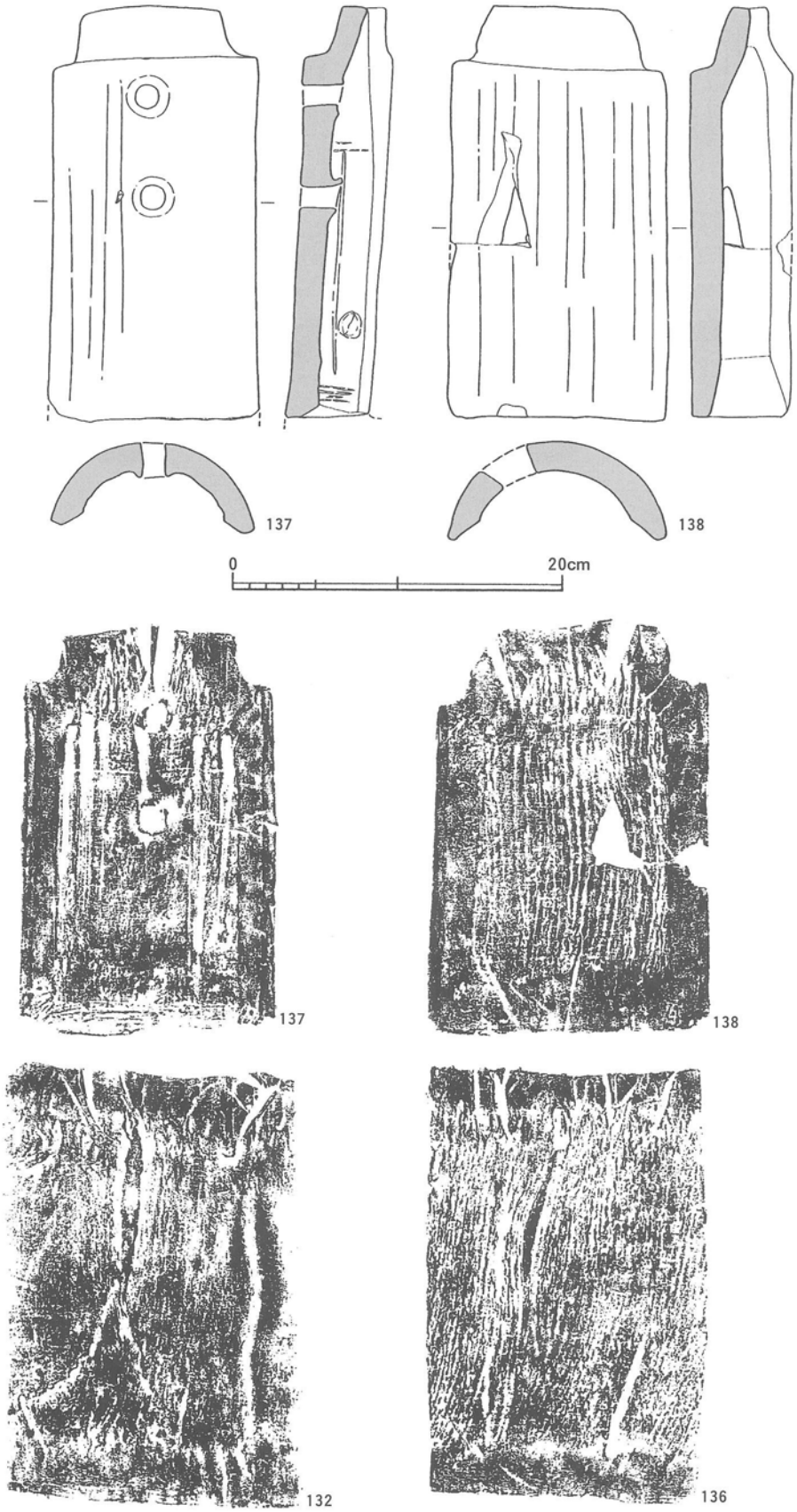
SD1505（140・141・143）



第19図　15地区出土遺物（3）瓦管（108～122）



第20図　15地区出土遺物（4）瓦管（123～136）



第21図　15地区出土遺物（5）瓦管（137,138）

鉢140は17世紀後半の陰文に白土の三島手の肥前陶器である。椀141は18世紀前半の刷毛目の肥前陶器である。羽釜143は内傾する口縁部外面に把手掛が付く。

第３面より上（M24）

鎹M24は断面が扁平で捻れている。

第３面（146）

染付小坏146は体部外面に縦ソギを行う初期伊万里である。

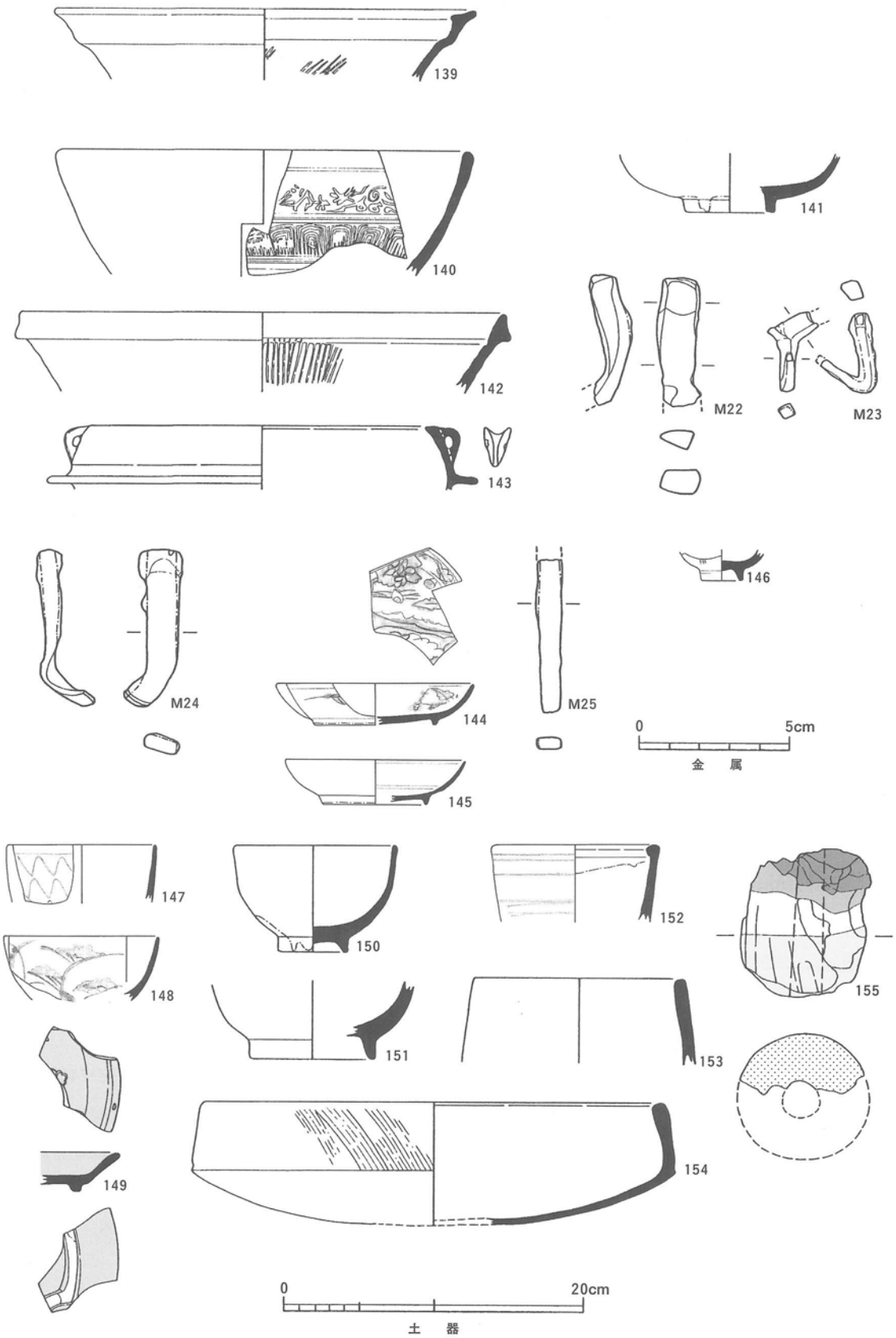
P1506（M25）

鉄釘M25は断面が長方形で両端を欠く。

４．小結

15地区は３面の生活面を検出した。第１面は19世紀前半以降、第２面は18世紀前半、第３面は17世紀中頃の下限遺物から時期が押さえられる。各遺構面の間には洪水砂や整地土が堆積している。

以上15地区は17世紀中頃以降、宅地として継続的に生活が行われたことが判明した。ただし調査範囲が狭いため、具体的な建物構成などは明らかではない。



第22図　15地区出土遺物（6）（139～155,M22～M25）

第８節　18地区の調査成果

１．概要

18地区は18区と18-19間区と19区の総称で、道路西側の南端に位置する。調査区の西端に沿って鉄製の上水道管が存在しており、18区と18-19間区の中間と19区の北端に塩ビの雨水管が存在していた。18-19間区の中央部分に試掘の痕跡が存在する。

２．遺構

遺構面を３面検出した。それぞれの遺構面の間には人工的に埋めた砂や土あるいは洪水砂の間層がある。遺構面はいずれの面も炭を含む生活面である。

第１面

石組みの溝SD1801と山土で整地した生活面を検出した。生活面は炭を多量に伴っており、18-19間区と18区で特に顕著である。18区では溝SD1801が伴っている。18-19間区では礎石様の平坦な石を検出した。

SD1801　18区の西部で検出した北から14°東に振る石組みの南北方向の溝である。小振りの石で作られており、幅0.2m、深さ0.2mである。

第２面

炭を含む生活面と南北方向の素掘り溝を検出した。18区では東側の壁に礎石様の平坦な石を検出した。

SD1802　19区と18区の上水道管の真下で検出した南北方向の石組みの溝である。19区では南北方向の石組みの西側に面を揃えており、石組みの西面には流れた砂が堆積していたため、南北方向の石組み溝の一部であると考えた。幅は不明である。

第３面

生活面と素掘り溝を検出した。18-19間区のSD1804の東側には石が点在している。礎石か礎石でないのかは不明である。

SD1803　18区で検出したほぼ南北方向の素掘り溝である。18区で溝SD1803を切られている。幅0.75m以上、深さ0.35mを測る。

SD1804　18-19間区と18区で検出したほぼ南北方向の素掘り溝である。18区で溝SD1803を切っている。幅0.95m、深さ0.5mを測る。18-19間区で多量の小型管状土錘が出土した。

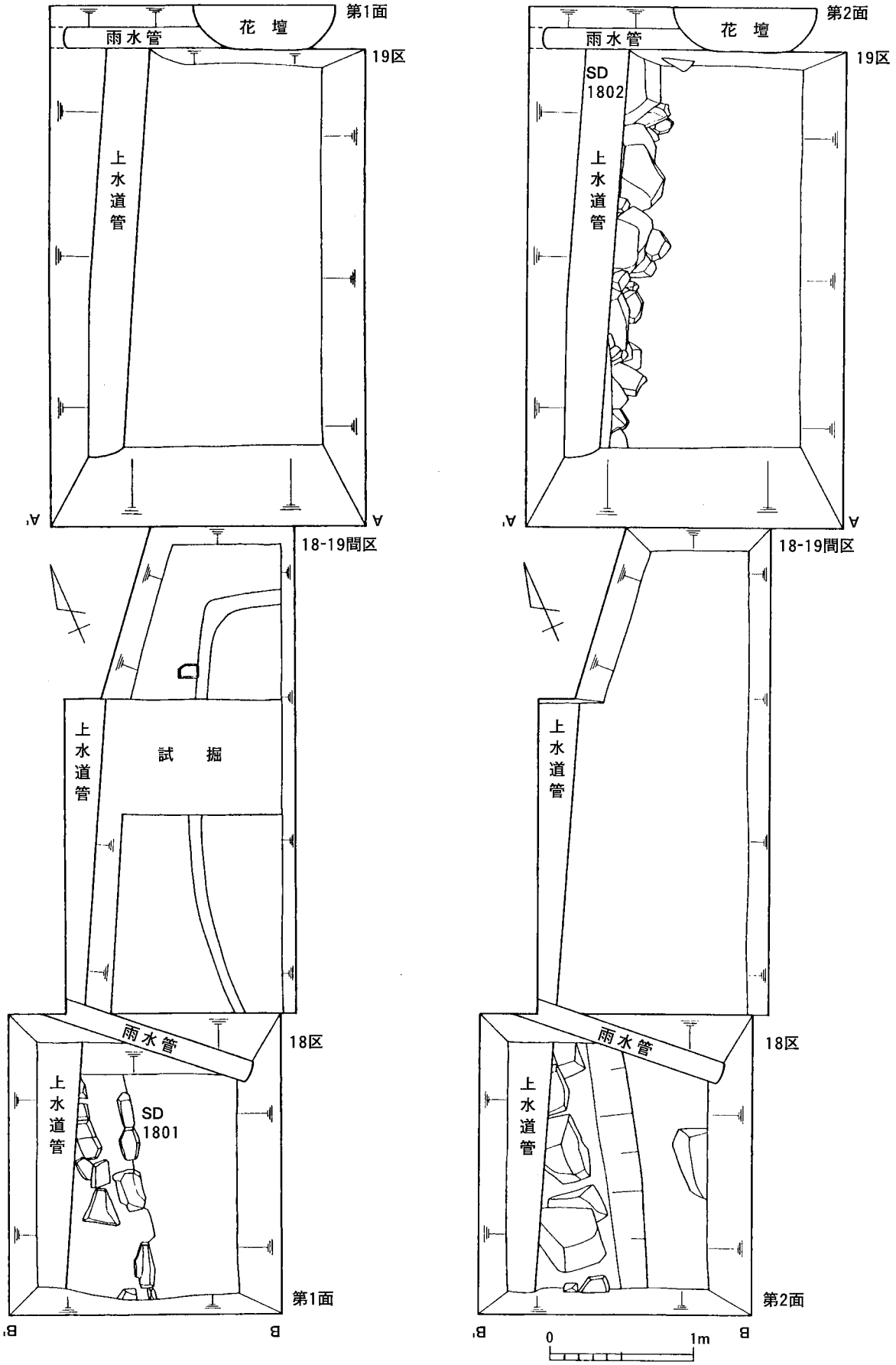
３．遺物　（156～277・Ｗ４・M26）

第１面より上（156・157・174～181）

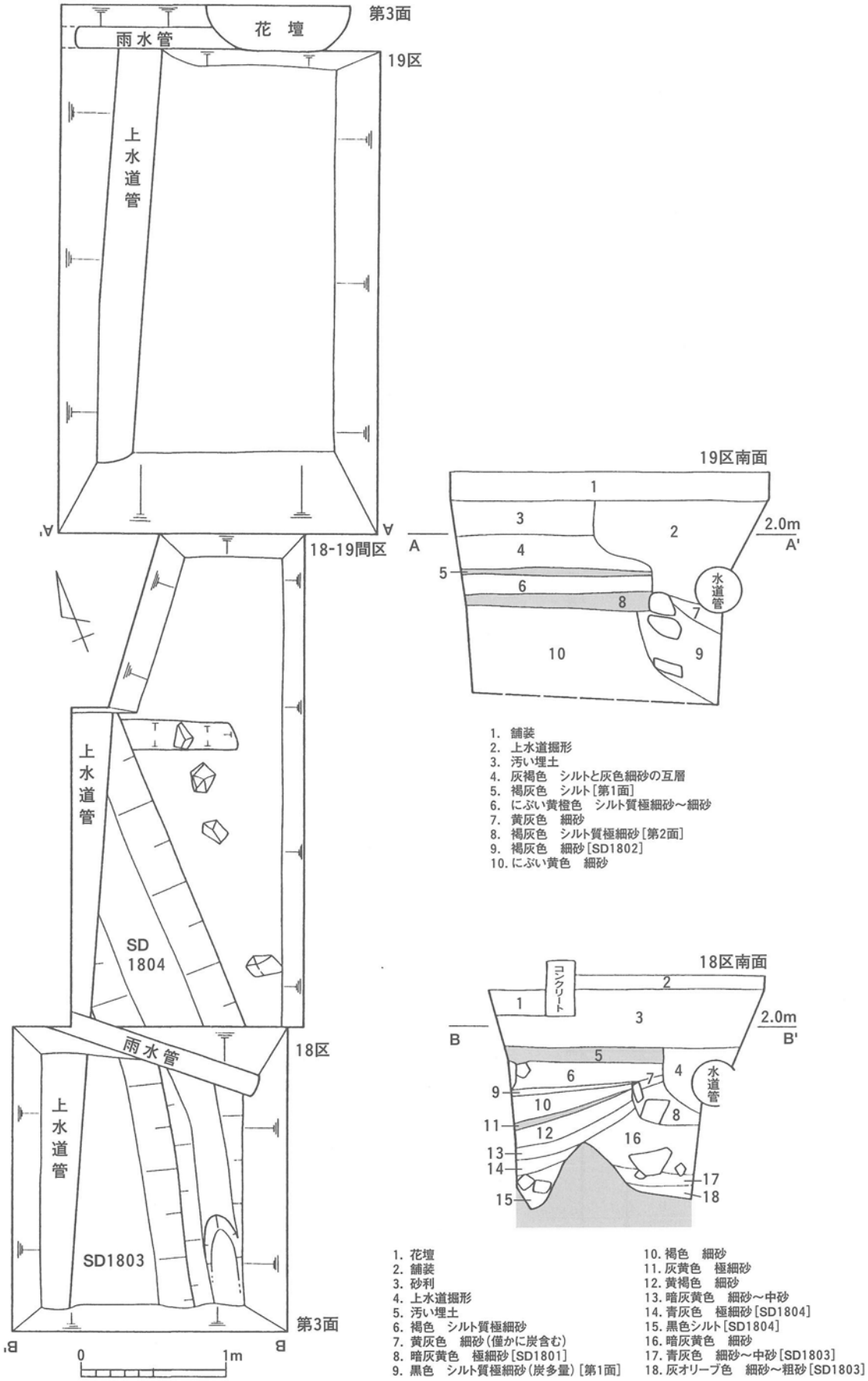
碗156は外面に印判手の文様がある肥前磁器である。椀157は京焼系の灰釉陶器である。碗174は外面に矢羽根文を描く。焼きが悪いか2次焼成を受けているため光沢がない。18世紀後半から19世紀前半の肥前磁器である。碗175は呉須で唐草文を描く。瓶176は高台を削り出す底部である。皿177・178は蛇目釉ハギを行う波佐見の白磁である。椀179は17世紀後半の肥前の京焼風陶器である。皿180は蛇目釉ハギに砂目跡が残る。盤181は赤土部を塗っており、内面に重ね焼き痕が残る。17世紀前半の備前焼である。

第１面（158～163）

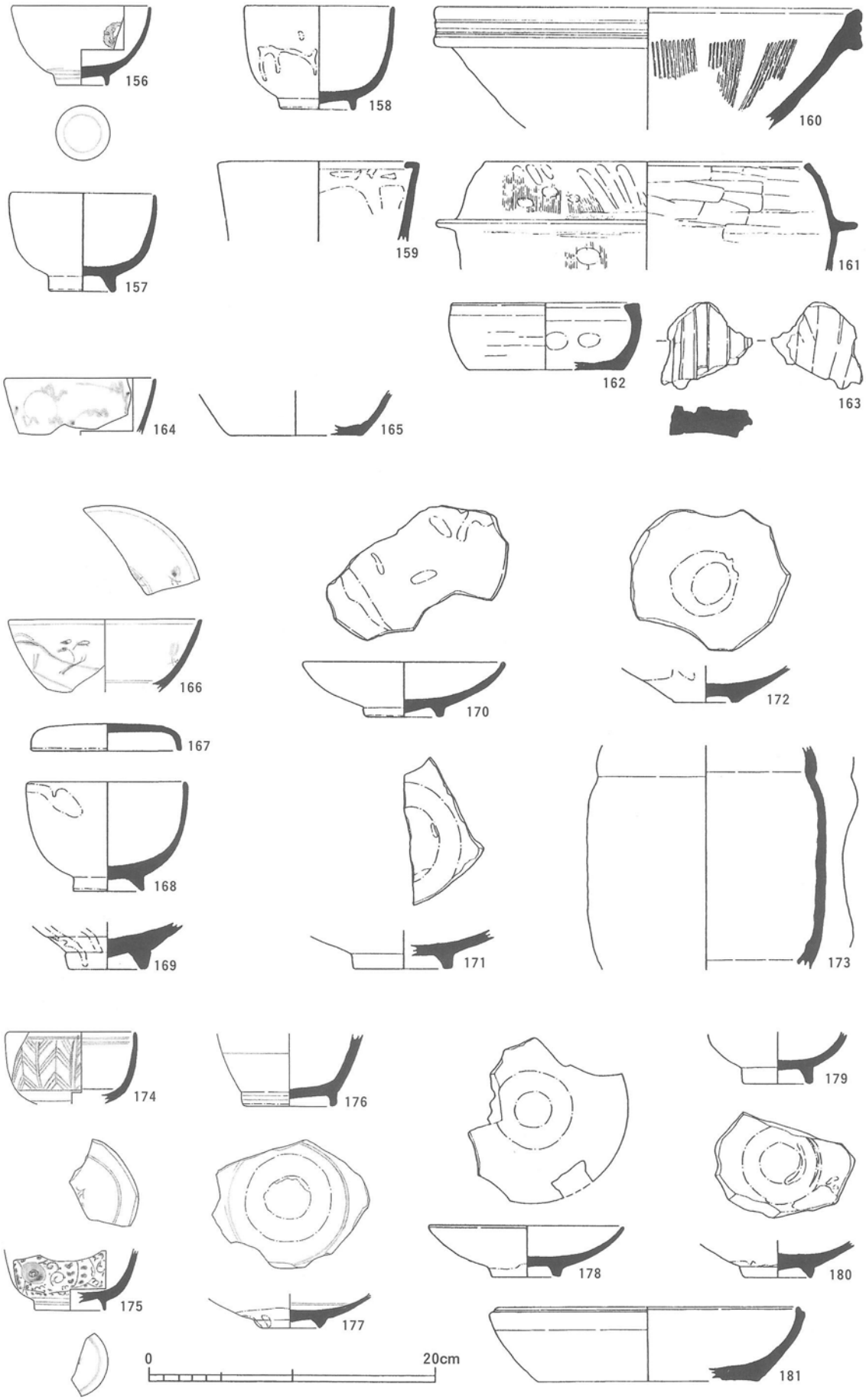
椀158は京焼系の灰釉陶器で貫入が入っている。香炉159は緑灰の釉をかけている。擂鉢160は11本単位の間隔を置いた放射状の擂目である。瓦質の羽釜161は内弯する口縁である。火入れ162は体部が内弯する。壁土163は片面に平行する木の圧痕が、反対面にはナデの痕跡が残る。



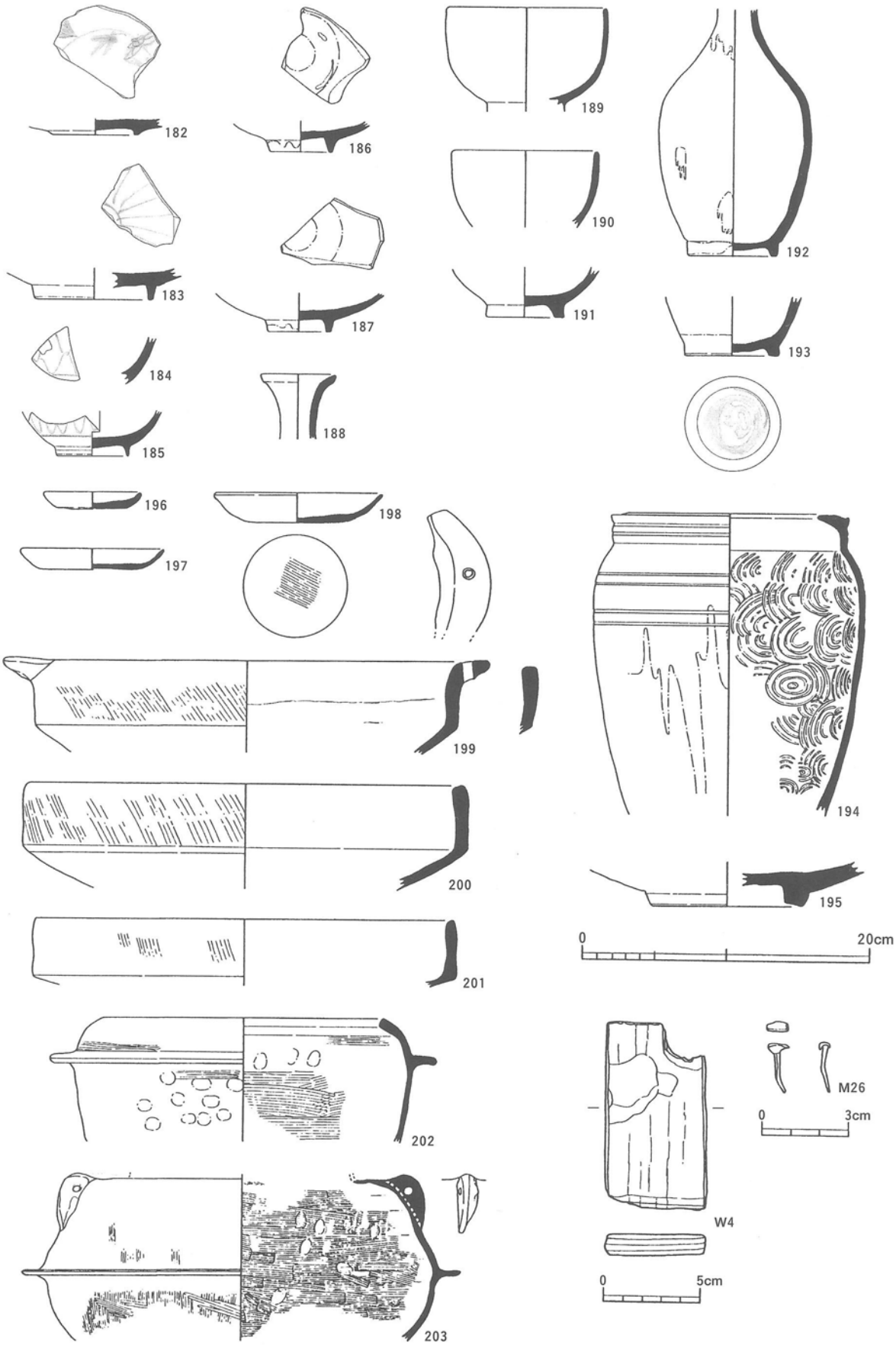
第23図　18地区第１面・第２面平面



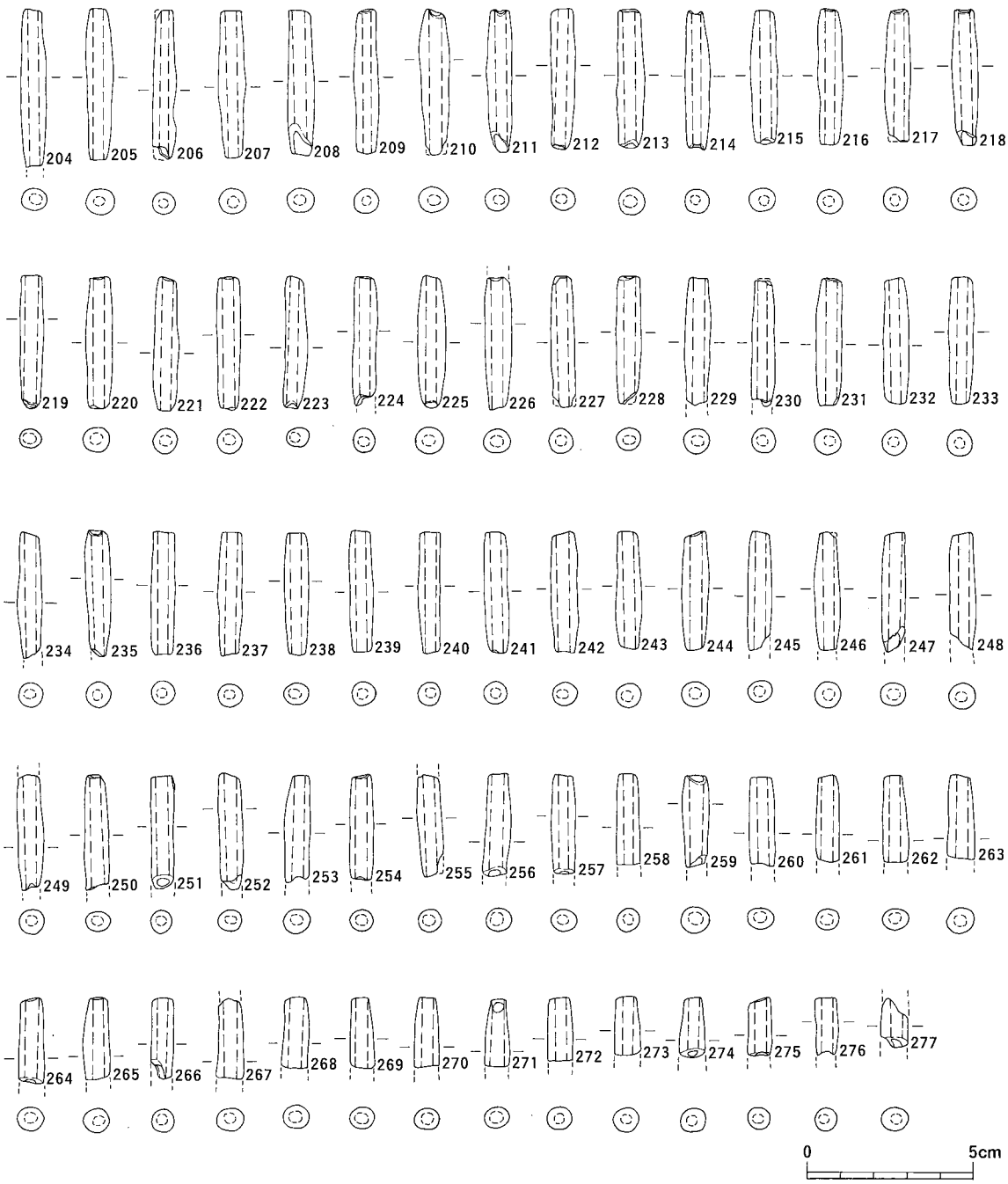
第24図　18地区第３面平面・断面



第25図　18地区出土遺物（1）（156～181）



第26図　18地区出土遺物（2）（182～203,M26,W4）



第27図　18地区出土遺物（3）土錘（204～277）

第２面より上（164・165・167）

碗164はくらわんか手で、草花文を描く。18世紀中頃から18世紀後半の肥前の製品である。壺底部165は19世紀前半の備前焼朱泥壺である。合子蓋167は18世紀後半の白磁である。

第２面（166・168～173）

碗166は外面に草花文を描く初期伊万里である。椀168は灰釉と緑釉がかかる瀬戸・美濃系の京焼風陶器である。鉢底部169は見込みに砂目が残る。皿170は見込みに砂目跡がのこる二彩である。皿171は蛇目釉ハギに砂目跡が残る肥前の緑釉陶器である。皿172は高台内部を回転ケズリし、高台を作り出し端部に糸切痕が残る。備前の水差173は胡麻釉がかかる。

SD1804（182～277・W4・M26）

皿182は見込みに草花文を描く初期伊万里である。皿183は見込みに菊花文を描く初期伊万里である。

碗184・185は外面に呉須で網目を描く。17世紀後半の肥前磁器である。皿186・187は蛇目釉ハギをする白磁である。徳利188は口縁で灰釉を施釉している。椀189～191は透明釉をかけ、貫入が入る肥前系京焼風陶器である。徳利192は朝鮮唐津の模倣で、18世紀後半の製品である。徳利193は底部で、高台内に釉を刷毛塗している。17世紀前半の唐津焼である。甕194は17世紀前半の唐津の飯洞甕窯の製品である。大皿195は見込みに胎土目が残る。土師器皿は小（196）、中（197）、大（198）がある。底部は回転糸切りで、198は板目痕が残る。焙烙199は口縁外面を部分的に拡張させ縦方向の把手孔をあける。焙烙200・201は直立する口縁の関西系のものである。羽釜202は大きく内弯する口縁部をもつ。釜203は肩部に把手孔をあけた突起が付く。内面は横刷毛調整で粘土紐の痕跡が残る。土錘204～277は74点一括出土したもので、すべて同形で同じ胎土の管状土錘である。

板Ｗ４は板目の木取りで、両端は折れている。鉄釘M26は青銅製の細い釘である。

４．小結

18地区は３面の生活面を検出した。一部混入と考えられる遺物を除いて、第１面は19世紀前半まで、第２面は18世紀後半、第３面は18世紀前半の下限遺物から時期が押さえられる。各遺構面の間には洪水層や整地土が堆積している。

以上18地区は第３面の18世紀前半以前は溝が存在していた。第２面の18世紀後半以降、宅地として継続的に生活が行われたことが判明した。

第９節　20区の調査成果

１．概要

20区は19区の北1.5mに隣接している。

２．遺構

調査区のほとんどが旧水道管もしくは旧電話管の埋設のため攪乱を受けており、南端の一部で堆積状況を確認したのみである。細かい層状の水平堆積をしており、道路面の様相を示している可能性が高い。

３．遺物　（278・279）

擂鉢278は口縁部の破片である。軒平瓦279は中心飾りに三葉を据えて内が下、外が上に巻く唐草文を配する。

４．小結

20区は、細かい層状の水平堆積を確認した。遺物も非常に少なく、調査区は道路の中心部分の可能性が高い。

第10節　21区の調査成果

１．概要

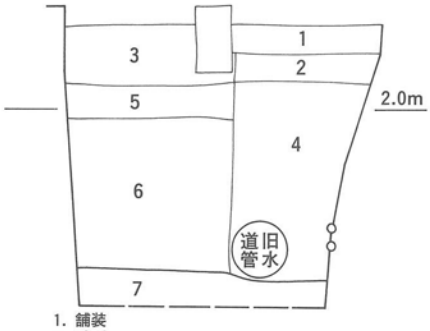
21区は20区の北28mの道路部分に位置する。

２．遺構

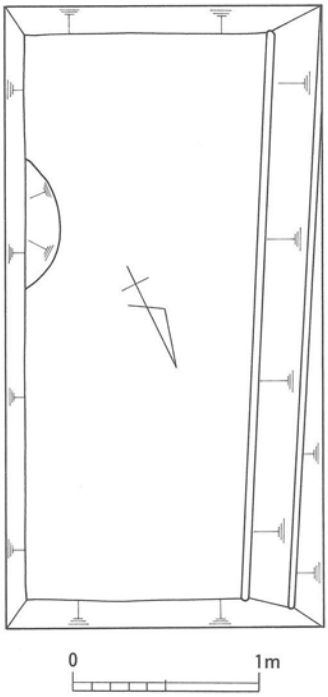
道路面から1.4m掘り下げたが、砂が続き遺構面は存在しなかった。

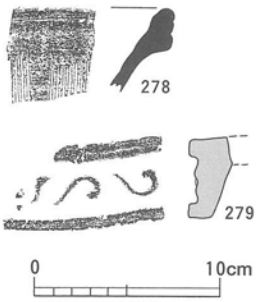
３．遺物

遺物は出土しなかった。

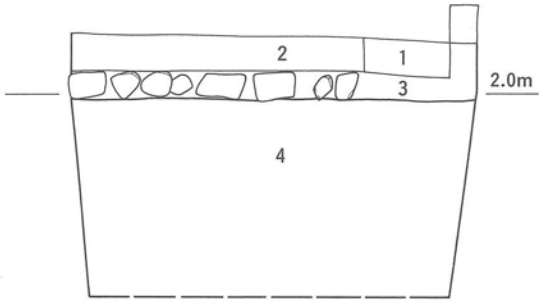


1. 舗装
2. 砂利
3. 花壇
4. 黄褐色　細砂～中砂（中礫含む）［水道掘形］
5. 暗灰黄色　シルト質極細砂
6. 黄褐色　細砂と灰黄色シルトの互層
7. 青灰色　細砂～極細砂（貝含む・自然堆積）

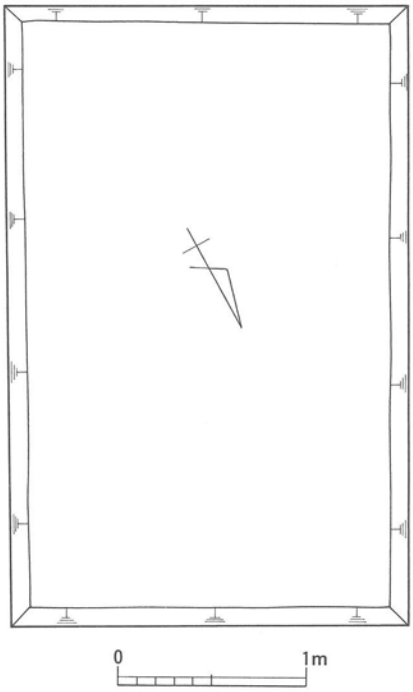




第28図　20区断面・平面、出土遺物（278,279）



1. コンクリート
2. 舗装
3. 大礫・汚い埋土
4. 明黄褐色　中砂（自然堆積?）



第29図　21区断面・平面

4．小結

21区は、遺構・遺物共に検出できなかったため、22区との位置関係も考慮して「百々呂屋裏大桝」周辺の未利用地であったと考えられる。

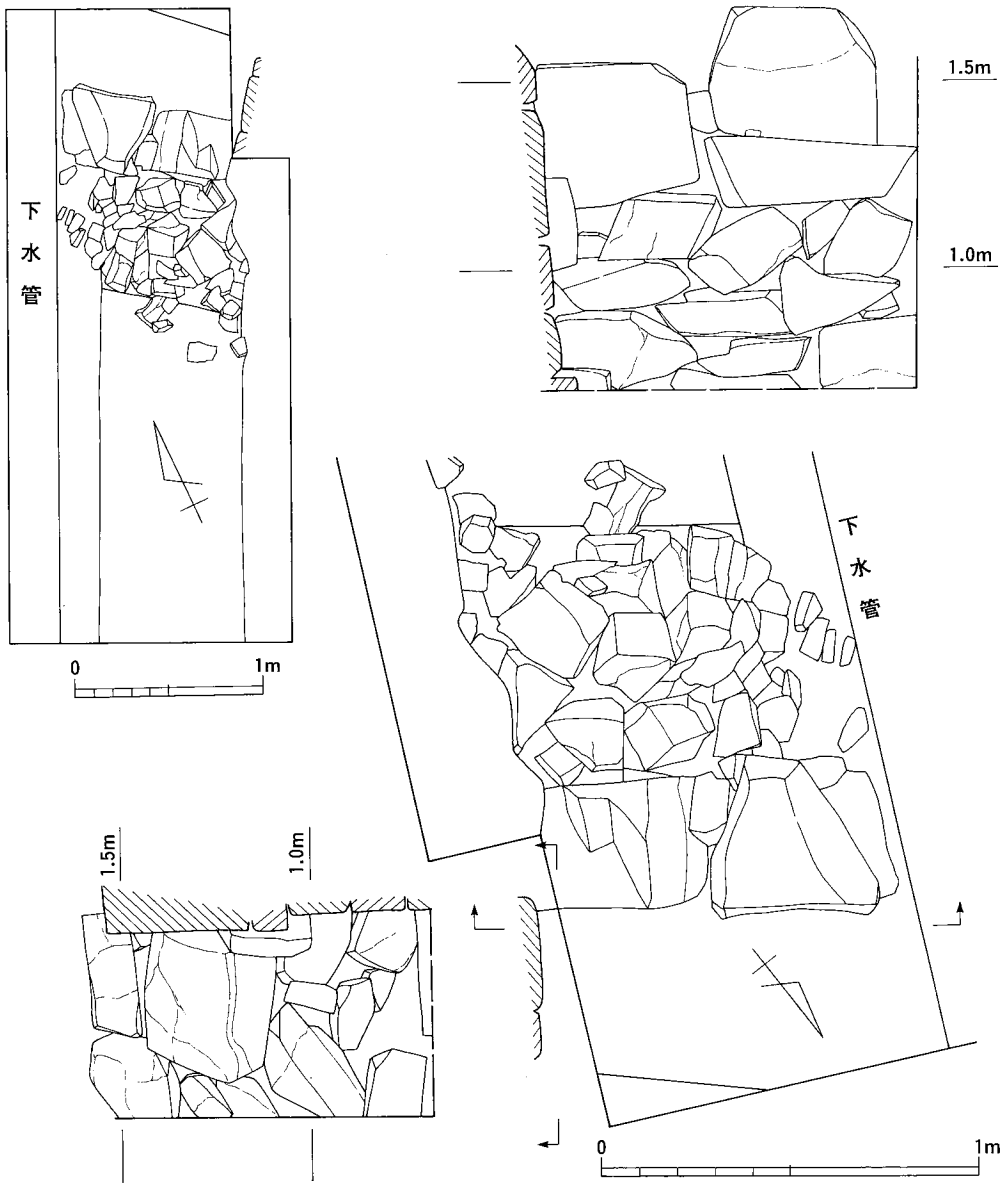
第11節　22地区の調査成果

１．概要

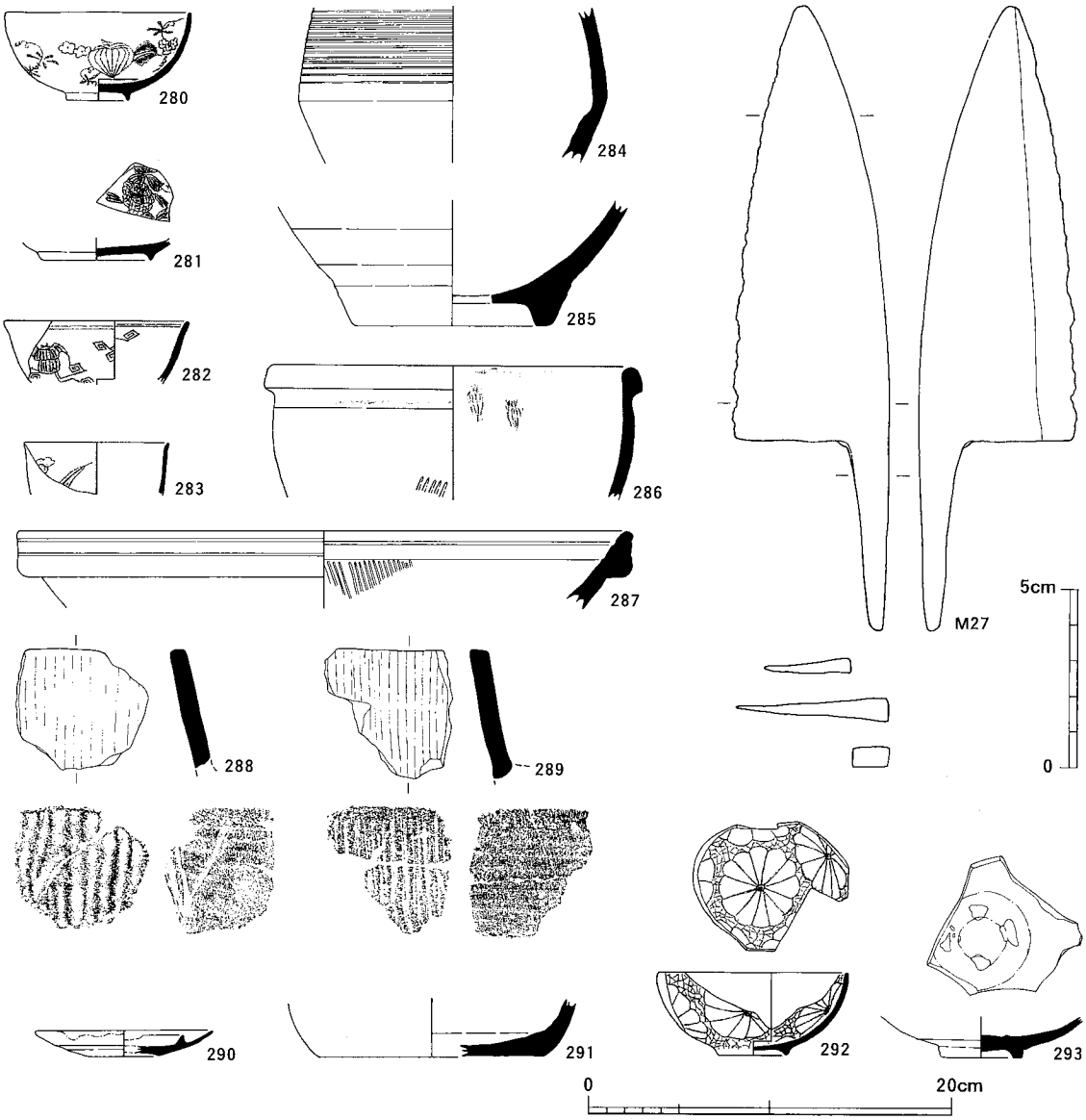
22地区は22区と22南拡張区の総称で、21区の北側に隣接し、歩道部分に位置している。22区は北東隅に塩ビの雨水管が存在し、西側には塩ビの下水道管が存在していた。22区からは重要な遺構が見つかったため、保存することになり、南側に拡張し、22南拡張区として調査を行った。

２．遺構

22区北端で南東部に隅をもつ石組みの遺構SK2201を検出した。北側と西側に続いているが調査区外のため、規模は不明である。また、範囲が狭く湧水が激しかったため、底を確認していない。南面と東面の隅は90°に作っており、南面幅1.0m以上、東面幅0.55m以上、深さ1.0m以上である。標高1.1mより上面のみ花崗岩の大型の切石を使用しており、それ以下は流紋岩の切石である。SK2201の掘形は南側に幅1.0mを測る。桝内の上層からは石が出土し、下層は砂礫が堆積しており、意識的に埋めた様相を呈している。下層からは陶磁器の他に包丁が出土した。22南拡張区からは遺構・遺物共に出土しなかった。



第30図　22区百々呂屋裏大枡平面・断面



第31図　22区出土遺物（280～293,M27）

3．遺物

SK2201（280～289・M27）

SK2201からは染付磁器（280～283）、陶器（284～287）、土師器（288・289）、鉄器（M27）が出土した。碗280は半球形で河骨文と小花文を描く。皿281は見込に文様を描く。碗282は端反形で蝙蝠文と角渦文を描く。碗283は体部が直線的に立ち上っている。徳利284は体部が屈曲し上半にカキ目を施す。18世紀後半から19世紀前半の備前焼である。壺285は高台のある底部で18世紀前半の肥前系陶器である。鍋286は19世紀前半の京焼系の在地製品である。擂鉢287は19世紀前半の明石の製品である。土師器火舎火鉢288・289は方形で、粘土板を型に押さえて荒い成形をしている。

庖丁M27は刃渡り12.2cmの片刃の出刃庖丁である。

包含層（290～293）

灯明皿290は19世紀前半から中頃の信楽の製品である。291は丹波焼の壺か徳利で内面に赤土部を塗っている。碗292は内外面とも氷列文の地文に菊花文を描いている。18世紀後半から19世紀前半の肥前の製品

である。皿293は見込み部に蛇目釉ハギを行い、四箇所の砂目跡が付着している。18世紀前半の肥前の緑釉唐津である。

４．小結

この石組みの遺構SK2201は『赤穂城下水筋絵図』との比較により赤穂上水道の「百々呂屋裏大桝」の一部であることが判明した。下層の遺物の下限の時期は19世紀前半である。なお、「百々呂屋裏大桝」は旧赤穂上水道の重要施設であるため、共同溝の桝の設置位置を南にずらし、「百々呂屋裏大桝」の遺構は砂で覆い埋め戻し保存を図った。

第12節　23区の調査成果

１．概要

23区は21区の北側、22区の東側に隣接し、道路部分に位置している。南から中央部にかけては、道路に並行しており、北側は南北方向に屈折している。

２．遺構

北端で旧赤穂上水道の新しい導水管２本とこれに重複する石組みの溝SD2301を検出した。中央部では、東西方向の石組みの溝SD2302を検出した。南部では石列SS2303を検出した。保存のため上面で調査を中止したため、下層の調査は行っていない。

SD2301　北端で検出した北から63°東に振る石組み溝で、北東から南西に流れている。幅は推定1.4mであり、深さは不明である。溝に面した部分は大型の切石で石組しており、南側は割石で幅0.4mの部分に裏込めを行っている。北側は調査区外のため不明である。溝の中央部分には赤穂上水道の新しい陶製の導水管が２本埋められている。管の長さは西側のものが51cm、東側のものは69cmで、直径は西側のものが33cm、東側のものは42cmで、接合部分はモルタルで塞がれていた。

SD2302　中央部で検出した石組みの溝で、北から南に流れている。幅は推定0.9mあり、深さは不明である。大型の切石で石を組んでおり、溝の東側部分はSD2301の裏込めに続いている。溝の西側部分はSS2303に続いている。また、直交する木材が杭で固定されており、漆喰で覆われている。

SS2303　南端で検出した石列で、南面は北から43°東に振っている。東端はSD2302と接している。使用している石は中程度の流紋岩の割石である。北端では調査区に直交する陶製の管を検出した。遺物は陶磁器の他に羽口や鉄滓が出土している。

３．遺物　（294～333・Ｗ５・Ｗ６・M28）

南端（294～302）

南端からは染付磁器・陶胎染付・施釉陶器・土製品が出土した。

碗294は鉄釉をかけたもので、現代に近い製品である。小坏295は外面に藍色の呉須で草花文を描いている。明治前半の製品である。蓋296は呉須で内外の口縁部に雷文を描き、外面は四方襷文に山水文と句を描いている。19世紀前半以降の京焼風染付磁器である。蓋297は赤絵で草花文を描き、内面見込みに寿文を描いている。碗298はくらわんか手で外面は呉須で草花文を描いている。18世紀後半の肥前の製品である。椀299はくらわんか手の陶胎染付で、外面に草文を描いている。18世紀後半の肥前の製品である。椀300は半球形で外面に鉄絵の笹葉文を描いている。京焼系陶器で19世紀前半の信楽の製品である。向付301は鉄絵で施文する。17世紀初頭の志野焼である。

羽口302は直径6.4cm、孔径1.9cmを図る。先端は発砲し、黒色化している。

中央（303・304）

中央からは染付磁器・施釉陶器が出土した。皿303は呉須で唐草文を描いている。18世紀後半の波佐見の製品である。弥七焜炉蓋304は中央に舌状のつまみがある。

北（305～311・W５・W６）

北からは染付磁器・施釉陶器が出土した。

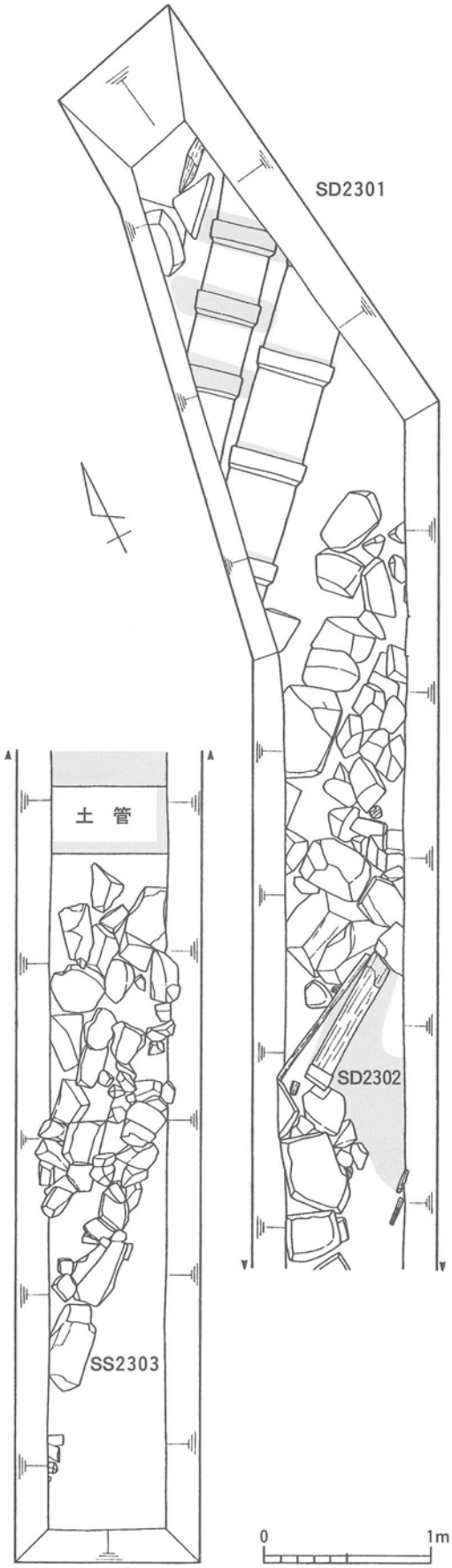
碗305は外面に呉須で山水楼閣文を描いている。19世紀前半～中頃の肥前系染付磁器である。碗306は内外面に草花文を描いている。19世紀前半の清朝青花写しの京焼系染付磁器で、東山焼である。皿307は蛇目凹形高台で、内面は酸化コバルトの型紙刷である。底部に「□田」の墨書がある。碗蓋308は内外とも赤絵で網目文を描いている。明治30年代以降の製品である。碗蓋309は外面に朝顔をプリントし、竹垣を鉄絵で描いている。つまみ内面には「魅箋園製」銘がある。近代の京焼である。土瓶蓋310は上面に白濁釉を施釉後、緑釉をタンパン状に施釉し、鉄絵で草花文と圏線と描く。19世紀前半の在地の製品である。土瓶蓋311は灰釉をかけている。19世紀前半の在地の製品である。

栓Ｗ５は円錐台形で、側面に密栓時の水平の圧痕と上部にツメ痕が残る。柄Ｗ６は直径2.2cm、長さ14cm以上で目釘穴が残る。

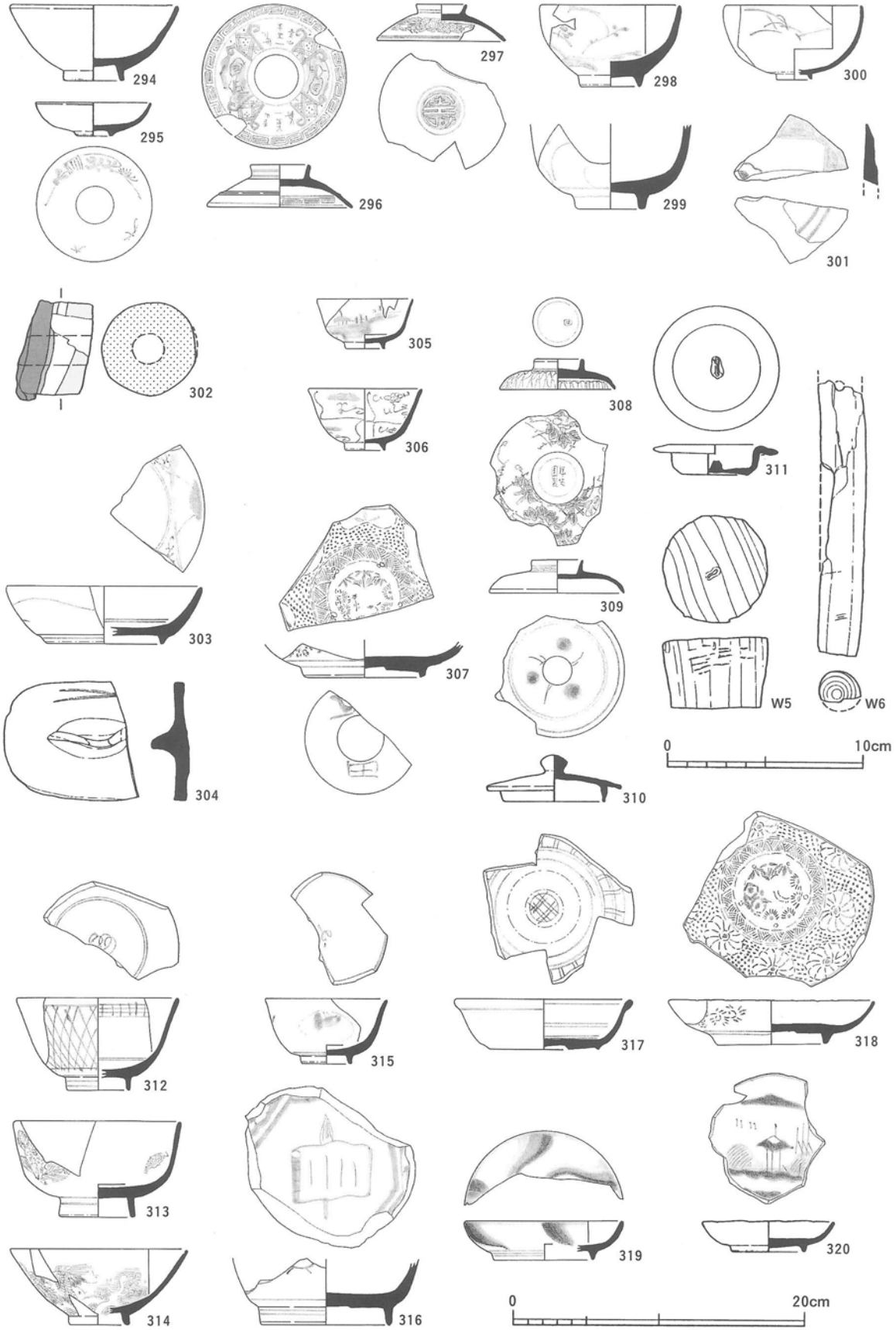
北端（312～332・M28）

北端からは染付磁器・施釉陶器・無釉陶器・瓦・土師器が出土した。

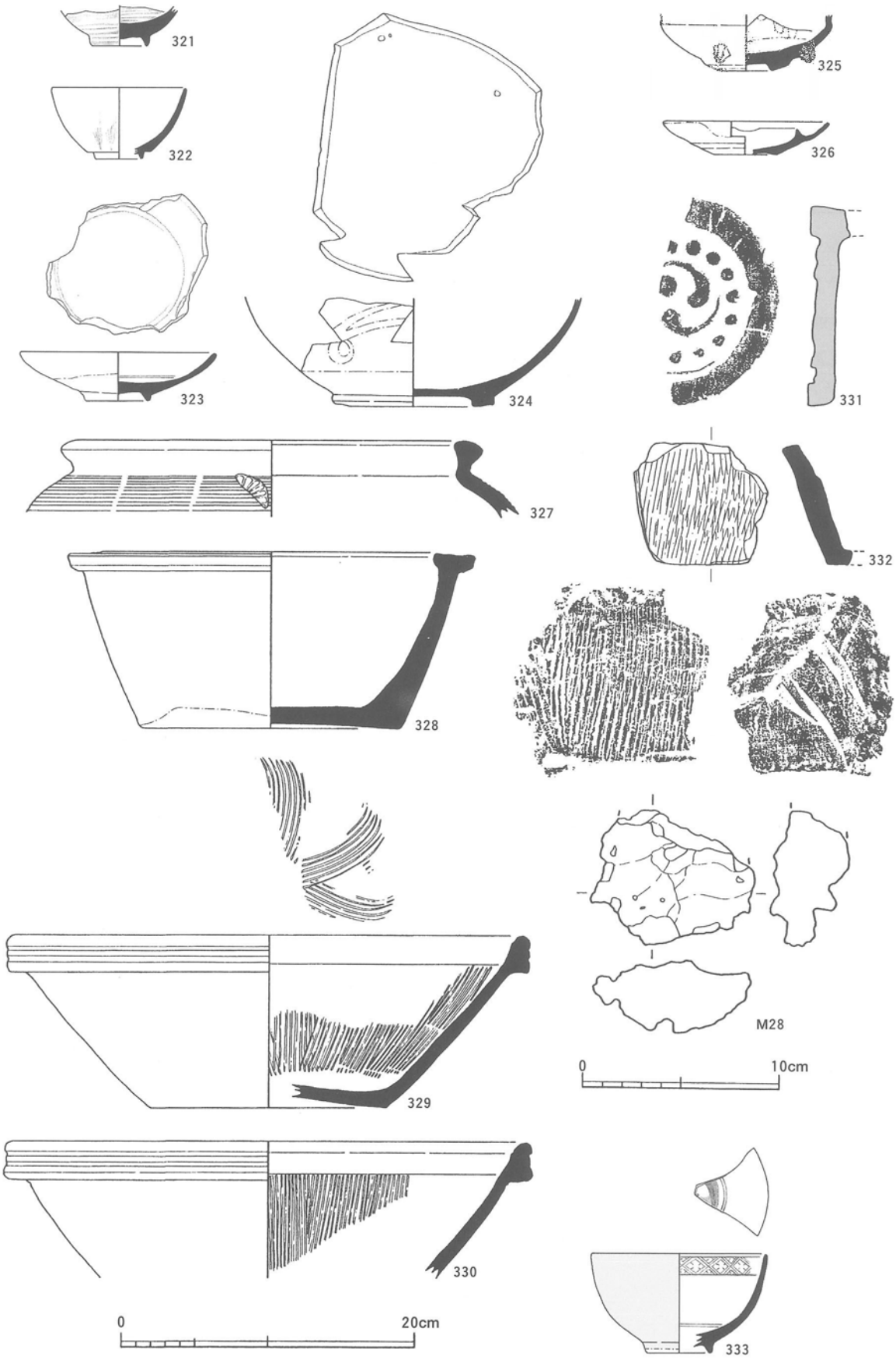
碗312は外面に網目文が退化した斜格子文を描き、内面は格子文を描き、見込みには宝文を描いている。19世紀前半の肥前の染付磁器である。碗313は外面に桐文をプリントしている。明治時代以降の製品である。碗314は外面に鶴文と波文をプリントしている。明治時代以降の製品である。碗315は端反形で外面に呉須で蝙蝠文と太い界線を描いている。見込みには草花文を描いている。19世紀前半の瀬戸の染付磁器である。鉢316は蛇目凹形高台で、体部は型打技法で六角形に作っている。見込みに呉須で巻子と筆を描いている。



第32図　23区平面



第33図　23区出土遺物（1）（294～320,W5.W6）



第34図　23区出土遺物（2）（321～333,M28）

高台内面にはノミ痕とチャツの痕跡が残る。19世紀前半の肥前の製品である。皿317は蛇目凹形高台で、内面に格子文を描いている。皿318は蛇目凹形高台で、酸化コバルトの型紙刷である。見込みにピン痕が５点ある。皿319は内面に呉須で捻文を描いている。近代の製品である。輪花皿320は内面に山水楼閣文を描いている。肥前系磁器で19世紀中頃の出石焼である。椀321は18世紀前半の刷毛目椀である。椀322は小杉椀で外面に鉄絵の若松を描き、透明釉をかけている。皿323は18世紀後半の肥前の陶胎染付である。鉢324は灰釉をかけ、白泥で文様を描いている。19世紀前半の京焼系陶器である。香炉325は19世紀前半の灰釉陶器である。灯明皿326は19世紀前半の信楽の製品である。壺327は肩部にカキ目を施した後、菊花文を貼付け、全面に赤土部を塗った幕末から明治の丹波の製品である。鉢328は鉄釉を刷毛塗りしている。幕末から明治の製品である。擂鉢329・330は19世紀前半の堺・明石の製品である。

軒丸瓦331は三巴で珠文は推定15個である。土師器火舎火鉢332は方形で、粘土板を型に押さえて荒い成形をしている。鉄滓M28は椀形滓で、一部欠けている。

４．小結

北端で検出した石組みの溝SD2301は位置関係と規模から旧赤穂上水道の導水路の一部と考えられる。北端で検出した旧赤穂上水道の２本の新しい導水管は昭和56年に旧赤穂上水道を敷設替した時の管である。

中央部で検出した東西方向の石組みの溝SD2302は「百々呂屋裏大桝」から東へ余水を流す排水路の一部と考えられ13区に続いている。

南部で検出した石列SS2303は22区で検出したSK2201「百々呂屋裏大桝」の東側の裏込石と考えられる。

石列SS2303の北端で検出した陶製の管はSD2302が埋められた後、直接「百々呂屋裏大桝」から排水するための管と考えられる。

なお、検出した遺構は旧赤穂上水道に関するものであるため、検出面以下は掘削せず、記録をとって埋め戻し保存した。

第４章　自然科学的調査の成果

第１節　兵庫県赤穂城下町跡における樹種同定

株式会社古環境研究所

１．はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

２．試料

試料は、赤穂城下町跡より出土した楔、漆椀、板、孔のある板、栓、柄の木材６点である。

３．方法

カミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

４．結果

第１表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

スギ　***Cryptomeria japonica*** **D.Don**　スギ科　第35図１

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、１分野に２個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは、本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径２mに達する。材は軽軟であるが強靭で、広く用いられる。

第１表　赤穂城下町跡における樹種同定結果

報告No.	実測No.	器種	地区	区	遺構	結果（学名／和名）	
W1	W-2	楔	14	14	１面より上	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
W2	W-7	漆椀	15	16	ＳＤ1502	*Aesculus turbinata* Blume	トチノキ
W3	W-6	板	15	16	ＳＤ1502	*Thujopsis dolabrata* Sieb. et Zucc.	アスナロ
W4	W-12	孔のある板	18	18-19間	ＳＤ1804	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
W5	W-10	栓	23	21北	北端	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
W6	W-11	柄	23	22北	北	Cupressaceae	ヒノキ科

アスナロ　***Thujopsis dolabrata*** Sieb. et Zucc.　ヒノキ科　第35図２

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が存在する。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、スギ型からややヒノキ型を示し、１分野に２～４個存在する。

接線断面：放射組織は単列で、樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりアスナロに同定される。アスナロは、本州、四国、九州に分布し、関東北部や木曽に比較的多い。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径１mに達する。材は、耐朽性、保存性ともに高く、建築など広く用いられる。特殊用途には漆器木地があり、輪島塗り（石川県）はそれである。

ヒノキ科　Cupressaceae

横断面、放射断面、接線断面共にヒノキ科の特徴を示し、分野壁孔の型及び１分野に存在する個数が不明瞭なものはヒノキ科とした。

トチノキ　***Aesculus turbinata*** Blume　トチノキ科　第35図３

横断面：小型の角張った道管が、単独ないし放射方向に２個複合して密に散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。放射組織と道管との壁孔は、小型で密に分布する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、層階状に規則正しく配列する。

以上の形質よりトチノキに同定される。トチノキは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径60cmに達する。材は軟らかく耐朽性、保存性がなく、容器などに用いられる。

５．所見

赤穂城下町跡の木材は、スギ３点、アスナロ１点、ヒノキ科１点、トチノキ１点であった。スギは楔、孔のある板、栓に使用されている。スギは加工工作が容易な上、大きな材がとれる良材である。アスナロは板に、ヒノキ科は柄に使用されている。アスナロないしヒノキ科の材も大きな材がとれる良材である。スギ、アスナロ、ヒノキ科は温帯に広く分布する常緑高木である。トチノキは漆椀に使用されている。切削、加工は容易で柔らかい材で、木地に好まれる。温帯に分布する落葉高木である。いずれの樹種も温帯に分布する樹種であり、遺跡周辺からか流通によってもたらされたと考えられる。

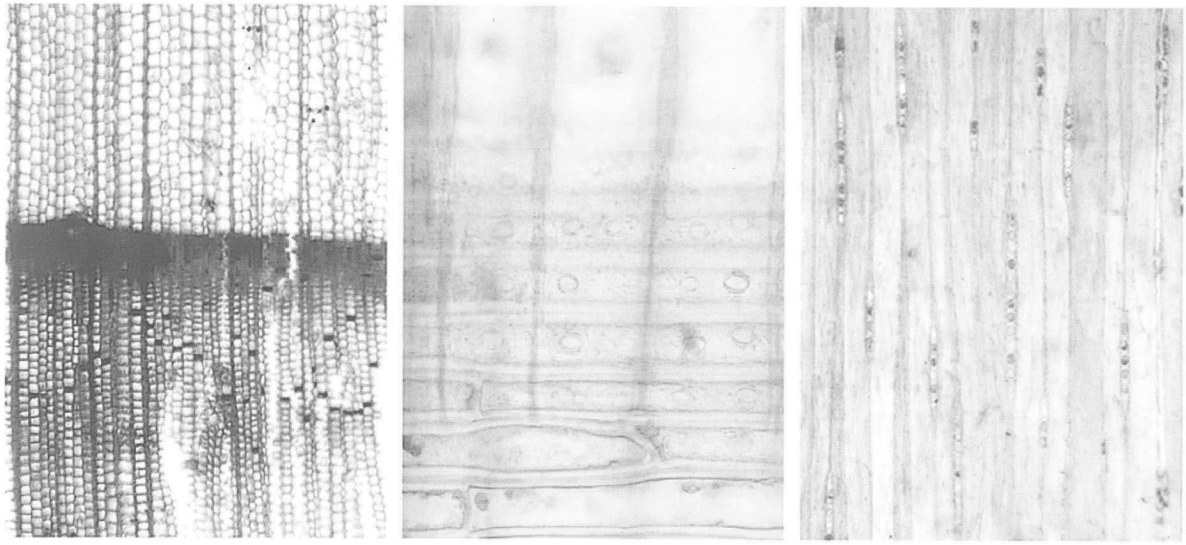
参考文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p. 20-48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p. 49-100.

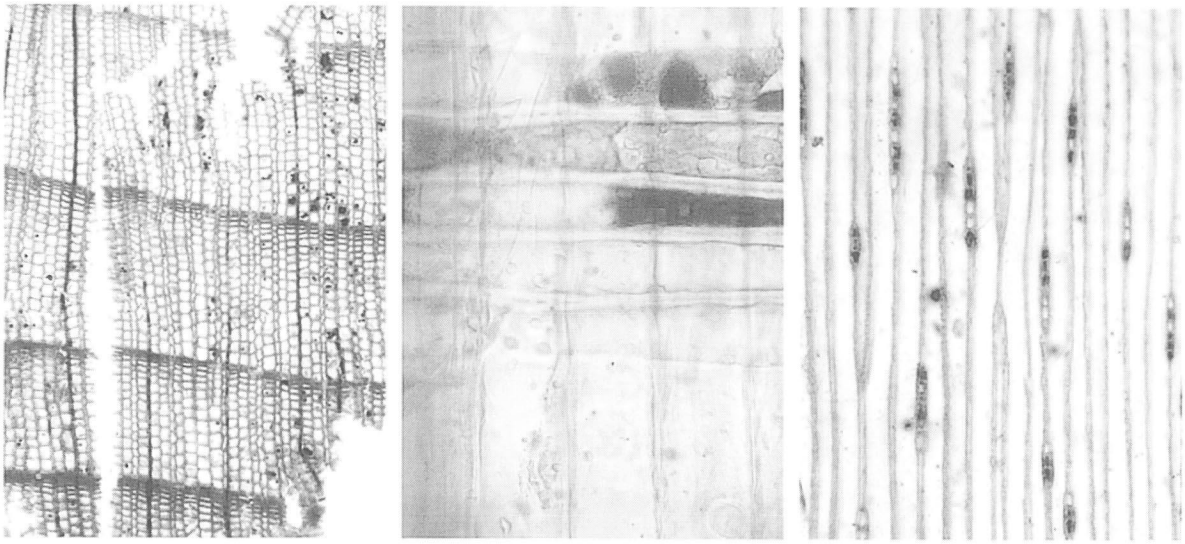
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p. 296

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第１号，植生史研究会，p. 242



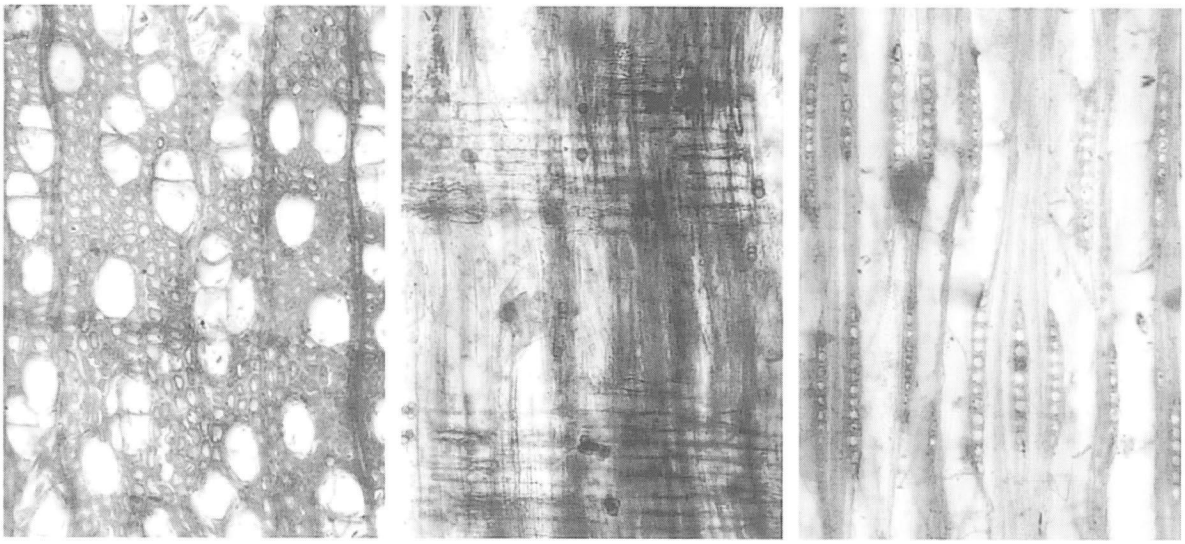
横断面 ―――― ：0.5mm　放射断面―――― ：0.05mm　接線断面―――― ：0.2mm

1．W4　孔のある板　スギ



横断面 ―――― ：0.5mm　放射断面―――― ：0.05mm　接線断面―――― ：0.2mm

2．W3　板　アスナロ



横断面 ―――― ：0.5mm　放射断面―――― ：0.2mm　接線断面―――― ：0.2mm

3．W2　漆椀　トチノキ

第35図　木材組織顕微鏡写真

第５章　まとめ

今回の赤穂城下町跡の調査は赤穂城下町の東北端の部分的な発掘調査であった。調査は市街地の中の限定的で小規模な範囲であったが、度重なる洪水と整地による複数の遺構面が良好に存在していることが判明した。ここでは、調査地点における平面的な位置づけと時代的な位置づけを行い、遺構の変遷を考えるとともに、現存している絵図との比較を行い、城下町の拡張について考えてみる。

また、赤穂上水道における重要施設である百々呂屋裏大桝と赤穂上水道についても考えてみたい。

第１節　遺構の変遷と赤穂城下町（第36図）

１．遺構の変遷

10区で検出した石組み溝SD1001は位置と方向から道路側溝と考えられ、出土遺物から19世紀前半以降に構築されたと考えられる。11区で検出した素掘り溝SD1101とSD1102は遺物が出土していないため、機能と時期は不明である。12区で検出した素掘り溝SD1201は水田に伴う水路であると考えられ、出土遺物から19世紀前半以降に埋まったものと考えられる。

13区北端で検出したSD1301は検出位置から「百々呂屋裏大桝」から東へ余水を流す石組みの排水路と考えられる。後世にヒューム管に変えられており、残りは悪い。

14区で検出した第３面の素掘り溝SD1403は水田に伴う水路と考えられ、出土遺物は18世紀前半までの遺物が出土している。第２面のSK1402からは18世紀後半、第1面のSK1401からは19世紀前半の遺物が出土している。このことから、18世紀前半以前は水田であり、18世紀後半以降に宅地化されたことが判明した。

15地区では３面の生活面を検出した。第１面は19世紀前半以降、第２面は18世紀前半、第３面は17世紀中頃の下限遺物から時期が押さえられる。各遺構面の間には洪水砂や整地土が堆積している。以上15地区は、17世紀中頃以降、宅地として継続的に生活が行われていたことが判明した。ただし調査範囲が狭いため、具体的な建物構成などは明らかではない。

18地区では３面の生活面を検出した。一部混入と考えられる遺物を除いて、第１面は19世紀前半まで、第２面は18世紀後半、第３面は18世紀前半の下限遺物から時期が押さえられる。各遺構面の間には洪水層や整地土が堆積している。以上18地区は、第３面の18世紀前半以前は溝が存在していた。第２面の18世紀後半以降、宅地として継続的に生活が行われていたことが判明した。

15地区・18地区では生活面と生活面の間に厚い砂が堆積していた。この砂は洪水による堆積も考えられるが、川砂を埋め立てることにより、城下町を拡張し、町屋を形成したことが調査から読みとれた。

20区では、細かい層状の水平堆積を確認した。遺物は非常に少なく、調査区は道路の中心部分の可能性が高い。21区は、遺構・遺物ともに検出できなかったため、22区との位置関係も考慮して「百々呂屋裏大桝」周辺の未利用地であったと考えた。

22区と23区では赤穂上水道に関係する「百々呂屋裏大桝」や導水路、排水路を検出した。詳細は第２節で検討する。

２．城下町の拡張

以上、今回検出した遺構の詳細を見てきたが、残された絵図と比較しながら、城下町の形成と変遷を検

討してみたい。

池田時代（1600～1645）の絵図には調査地点周辺は「姫路海道」・「水道」・「田」と記載があり、「船置所」（浅野時代の「御船入」）西側の浅野時代の田町付近は「田」の記載がある。

浅野時代（1645～1701）は赤穂城および城下町に関する絵図がいくつか存在している。調査地点周辺は東惣門から西に向かって橋本町筋を置き、町屋を配置している。池田氏時代の「姫路海道」との交点で食い違いを作っており、姫路街道は外構の中村から付け替えている。北半分は「田」の記載がある。慶安年間（1648～1655）に城下町の東北隅にあたる橋本町の北東に東性寺を置き、長直の三回忌の延寶三年（1675）に常清寺と改名している。

永井時代（1702～1706）は寶永元年（1704）の詳細な「赤穂城下町絵図」が残っており、後で詳細を検討する。森時代（1706～1868）の調査地点周辺は、前時代と変わらず南半分が「町屋」で、北半分が「田」である。

以上、調査地点周辺の橋本町は池田時代には「田」であり、浅野時代に城と城下町の整備が行われたときに初めて町屋として形成された。橋本町は城下町の東北隅にあたり東惣門が置かれた城下町の要であるとともに、赤穂旧上水道の城下町への取り入れ口として重要な地点である。

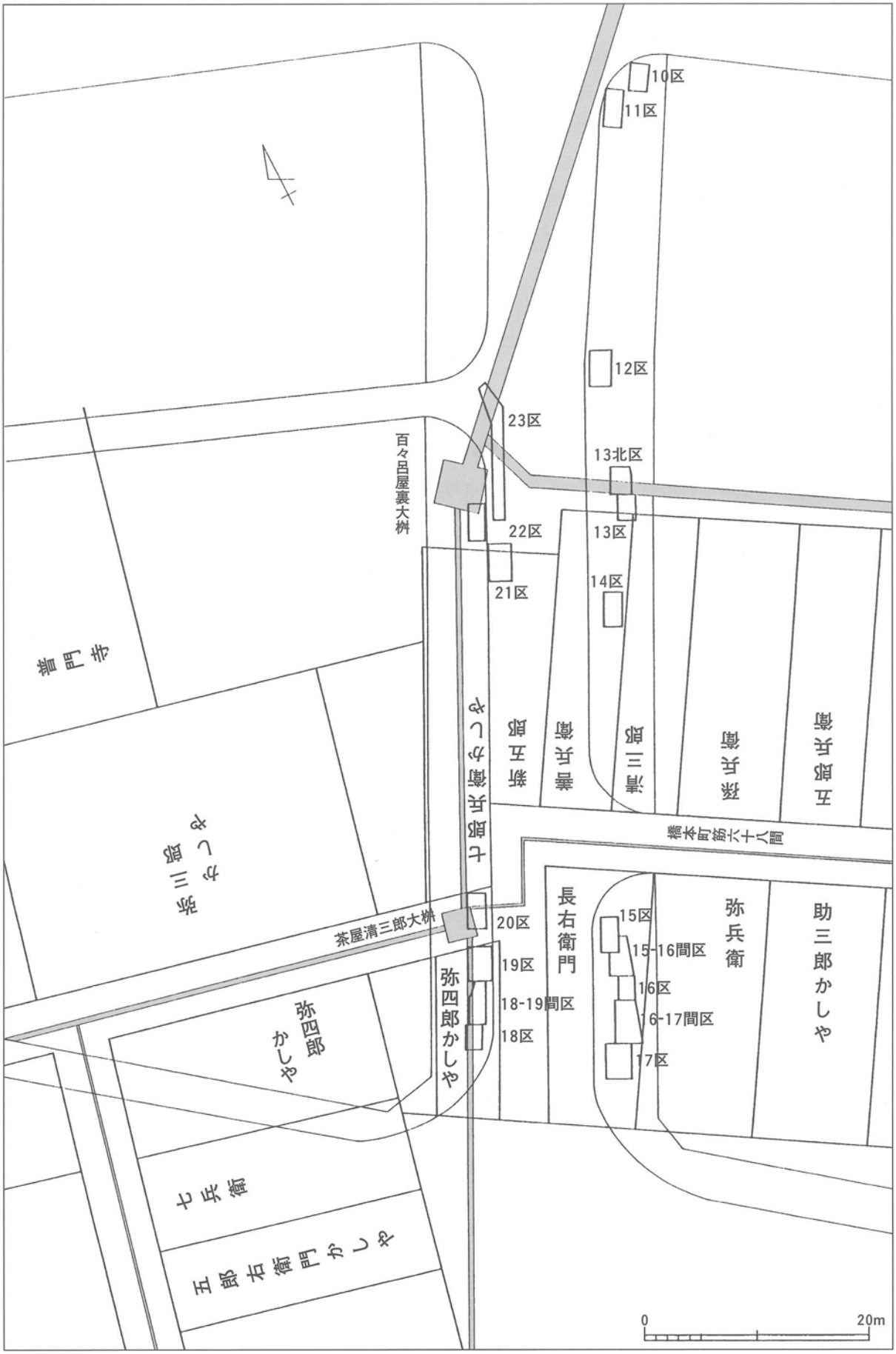
３．橋本町周辺の宅地の復原

それでは各調査地点の具体的な様相を絵図と比較し検討してみる。城下町絵図の内、町人屋敷の宅地割りが記載されているものは永井時代の寶永元年（1704）の『赤穂城下町絵図』だけである。したがって、この『赤穂城下町絵図』との比較を行い、調査地の特定をしたい。『赤穂城下町絵図』は比較的、詳細に描かれているが、街路の方向や角度など、細部が異なっている点も存在する。今回調査した橋本町周辺はどうであろうか。

江戸時代の城下町の街路と現代の街路の照合をするために有効な図面は『赤穂市史三巻』で復原した「明治前期加里屋町割図」と「加里屋の商店街（昭和初年頃）」（北畠恵子・魚本美智子『赤穂の民俗　その七－加里屋・上仮屋編－』）である。この三図を比較すると、橋本町の街路の道幅や宅地割もほとんど変わっていないことが分かり、同じ宅地が継続していることが分かる。また、これと現在の住宅地図を重ねても、ほぼ同じ様相を示している事が分かる。このことから、寶永元年（1704）の『赤穂城下町絵図』は橋本町の街路の食い違いが正確に記載されていないことが分かり、補正が必要である。第36図の「橋本町周辺の宅地・上水道と調査位置」の宅地割りは寶永元年（1704）の『赤穂城下町絵図』を「加里屋の商店街（昭和初年頃）」を元に補正したものである。

この図から読み取ると14区は寶永元年には「善兵衛」の宅地であり、明治初年は「平田夫治郎持」の宅地であることが分かる。15地区は寶永元年には「長右衛門」の宅地であり、明治初年は「黒田治平」の宅地であることが分かる。18地区は寶永元年には「弥四郎かしや」の宅地であり、明治初年は「平田彦平」の宅地であることが分かる。20区は南北方向の道路であり、茶屋清三郎大桝であることが分かる。22区は百々呂屋裏大桝、23区は赤穂上水道の水路と余水を流す水路、13地区は百々呂屋裏大桝から余水を流す水路であることが分かる。

10区・11区・12区は宅地ではなく、空白地になっている。空白地は比較的近い時代と考えられる絵図から読み取ると「田」であることから、水田であったことが考えられ、12区の溝は水田に伴う水路であると考えられる。10区の石組溝は百々呂屋裏大桝北東の水路と平行しており、水路に平行する道路の側溝であると考えられる。



第36図　橋本町周辺の宅地・上水道と調査位置

第２節　赤穂上水道と百々呂屋裏大桝（第37図）

赤穂城下町跡の今回の発掘調査において、赤穂上水道の重要施設である百々呂屋裏大桝の一部を検出した。ここでは検出した遺構から百々呂屋裏大桝および周辺の復原を行うこととする。また、赤穂城下の絵図に記載された百々呂屋裏大桝周辺の時代的変遷を考えてみたい。

１．検出した旧赤穂上水道関連遺構

今回の調査において、赤穂上水道関連の遺構は22区・23区・13地区・15地区で検出した。

22区では百々呂屋裏大桝を検出し、23区では百々呂屋裏大桝裏込と百々呂屋裏大桝へ通じる石組溝とその中に埋置されている旧上水道管、百々呂屋裏大桝から熊見川に余水を流すための石組溝を検出した。13地区では百々呂屋裏大桝から熊見川に余水を流すための石組溝を検出した。15地区では宅地内で、橋本町筋からの瓦管による給水管と桝の一部を検出した。瓦管は太さ３寸で、長さ８寸から９寸がある。

２．百々呂屋裏大桝の復原

22区で検出した百々呂屋裏大桝は、石桝であり南東隅の一部を調査したのみである。下部は流紋岩の割石で最上部が花崗岩の切石で構築していた。現在の道路面に埋め込まれている切石は花崗岩製で長さ1.8ｍ、幅0.27ｍを測る。切石は大桝の縁石であったと考えられており、このことから内面構造は上から花崗岩の縁石、花崗岩の切石、流紋岩の割石の三重構造であったと考えられる。『水道間数改め』では深さの記載は欠けているが、平面は二間四方と記載されており、一辺3.69ｍ（1間＝6尺１寸）に復原できる。さらに幅約1.0ｍの流紋岩の裏込石の存在は強固な構造を示すものである。百々呂屋裏大桝までの導水路や百々呂屋裏大桝から熊見川に流す余水路も上部は花崗岩の切石で作っており、同時期に作られたあるいは、改築されたことが分かる。

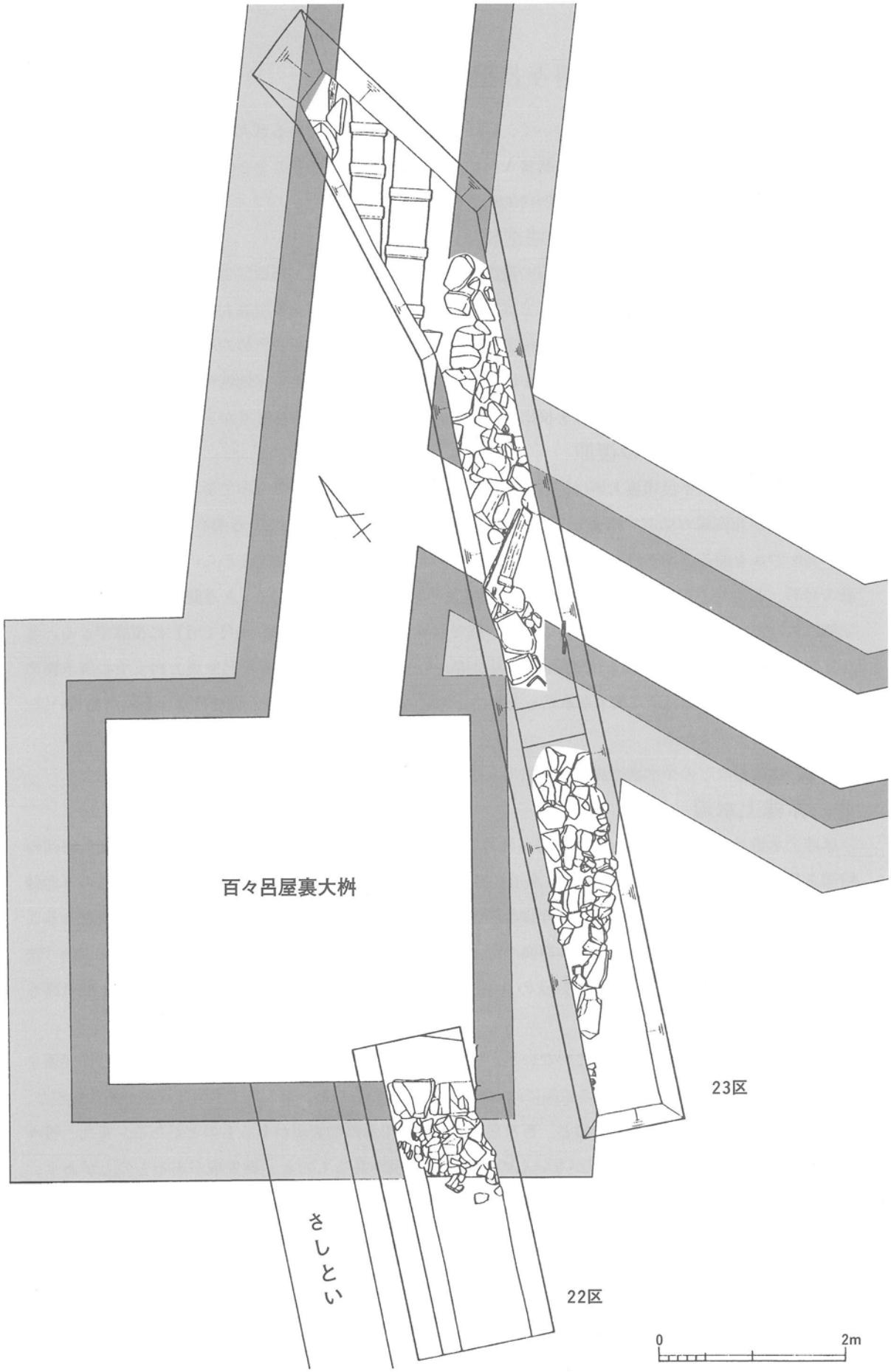
なお、木炭層などの浄水濾過施設は検出出来なかったため、浄水濾過状況の詳細は不明である。

３．赤穂上水道

赤穂上水道は慶長19年（1614）に工事が始められ、元和2年（1616）に通水した。松平右京太夫時代の絵図を見ると、「姫路街道」に沿って「水道」の文字は見えるが、具体的な記載はない。森時代の『赤穂城下水筋絵図』では百々呂屋裏大桝の詳細な形態や導水路・配水路・給水路・余水路の敷設状況を知ることができる。また、百々呂屋裏大桝の南側の配水路には「二一間さしとい」と記載があり、寺町迄樋寸法一尺二寸四方（36.36cm）（『水道間数改め』）と一致している。茶屋清三郎前大桝から南下する配水路も「差樋」とされている。

浅野時代の詳細な文献は存在していないが、絵図の記載から百々呂屋裏大桝周辺の配水路構造の変遷を読み取ることができる。浅野時代の絵図には水道の表現がないものと、舟入まで水路の表現があるものと、橋本町筋まで水路の表現があるものと、百々呂屋裏大桝まで水路の表現があるものとがある。また、百々呂屋裏大桝部分の表現は桝の表現がないものと、水門表現があるものと、桝表現があるものとがあり、「大水戸」と記載があるものもある。

これらの記載や表現から詳細な年代は不明であるが、給水路から舟入までの段階、橋本町筋までの段階、百々呂屋裏大桝までの段階という様に町屋の拡張に合わせて順次暗渠化が行われたため、多様化した表現になっていることが考えられる。寶永元年（1704）の『赤穂城下町絵図』に記された橋本町筋北側の「七郎兵衛かしや」宅地と南側の18地区の「弥四郎かしや」宅地は、宅地の形態と宅地中央に暗渠化された上水道が復原できることから上水道の暗渠化によって作られた宅地であることが判明した。



第37図　百々呂屋裏大桝の復原

第３節　総括

今回の（街）赤穂駅前大石神社線 電線共同溝整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、調査面積が非常に狭く、調査箇所が点的であったにもかかわらず、二点の大きな調査成果を上げることができた。一つは城下町の形成にかかわることであり、もう一つは旧赤穂上水道と百々呂屋裏大桝の検出である。

前者は発掘調査の成果が絵図に描かれている城下町形成と対応していたことが分かった点である。これは今回の調査区の南端である15地区・18地区の遺構形成が浅野氏以後の17世紀中頃に始まっていたことや、また北側に位置する14区は森氏以後の18世紀前半に始まっており、遺構面の数と一致している点から説明できる。また10区・11区・12区は長らく水田地域であった。以上、段階的に赤穂城下町の町屋が整備され、拡張していく様相が実証されたといえる。

後者は断片的な記録しか残っていなかった赤穂上水道の重要施設である百々呂屋裏大桝の位置確定と構造が把握できたことである。これもまた江戸時代後期の『赤穂城下水筋絵図』に描かれた百々呂屋裏大桝と対応していたことが分かった点である。

なお、百々呂屋裏大桝は設計変更により保存され、さらに百々呂屋裏大桝の平面的位置を路面標示し説明板が設置されたことは、赤穂上水道を理解し、後世に伝えていく礎となった。

第38図　百々呂屋裏大桝の説明板

参考文献

広山堯道編『播州赤穂の城と町』雄山閣　1982年

赤穂市『赤穂旧上水道保存計画書』　1981年

赤穂市『赤穂市史』第二巻　1983年

赤穂市『赤穂市史』第三巻　1985年

赤穂市『赤穂市史』第五巻　1982年

赤穂市教育委員会『赤穂城下町跡』　2006年

赤穂市教育委員会『赤穂城下町跡Ⅱ』　2007年

赤穂市立歴史博物館『城下町と水道』　1997年

赤穂市立歴史博物館『赤穂城絵図展』　2000年

北畠恵子・魚本美智子「加里屋の商店街（昭和初年頃）」『赤穂の民俗　その七－加里屋・上仮屋編－』1988年

第２表　赤穂城下町跡　土器類一覧（１）

報告No.	実測No.	種別	器種	手法等	産地等	時期	地区	区	遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	重量(g)	残存			図版No.	挿図No.	備考
														口縁部	底部	その他			
1	261	染付磁器	碗		肥前	18世紀後半	10	10	SD1001	9.9	4.5+			1/8			30	5	
2	262	染付磁器	碗	端反形	瀬戸・美濃	19世紀前半	10	10	SD1001	8.4	4.4	3.7		1/8	若干		30	5	
3	253	施釉陶器	鉢		瀬戸・美濃	19世紀前半	10	10	SD1001		4.8+	9.6			1/5		31	5	
4	265	瓦質土器	釜			19世紀前半	10	10	SD1001		3.9+	20.4				体部1/10	31	5	
5	258	染付磁器	碗	くらわんか	肥前	18世紀後半	10	10	SD1001石組下層	11.0	4.2+			1/12			30	5	
6	250	染付磁器	碗	端反形	肥前	19世紀前半	10	10	SD1001石組下層	9.4	3.5+			1/9			30	5	
7	251	染付磁器	鉢	京焼系		19世紀前半	10	10	SD1001石組下層		3.8+	7.5			1/6		30	5	
8	256	染付磁器	皿		肥前	19世紀前半	10	10	SD1001石組下層		1.5+	5.8			2/3		30	5	
9	257	施釉陶器	椀	京焼系		19世紀前半	10	10	SD1001石組下層	8.2	3.4+			1/4			31	5	
10	259	施釉陶器	椀	京焼風	肥前	18世紀前半	10	10	SD1001石組下層		1.5+	5.1			1/10		31	5	
11	252	施釉陶器	鉢	刷毛目鉢	肥前	18世紀前半	10	10	SD1001石組下層		3.1+	12.3			1/8		31	5	
12	260	染付磁器	皿	くらわんか	肥前	18世紀後半	10	10	包含層	10.0	2.7	5.5		1/3	1/2		30	5	
13	254	染付磁器	香炉	京焼系		19世紀前半	10	10	包含層		2.8+	3.9			2/3		31	5	
14	263	施釉陶器	蓋	京焼系		19世紀前半	10	10	包含層	4.4	1.10			1/2			31	5	
15	255	無釉陶器	擂鉢		備前	15世紀代	10	10	包含層		4.8+			若干			31	5	
16	264	瓦質土器	焙烙		瀬戸内系	19世紀前半	10	10	包含層		3.4+			若干			31	5	
17	267	染付磁器	碗	京焼系		近代	11	11	包含層	11.5	5.3	5.9		1/9	1/3		32	6	
18	266	染付磁器	皿		不明	明治	11	11	包含層		2.8+	11.5			1/3		32	6	
19	328	染付磁器	鉢	型打	肥前	19世紀	11	11試掘	包含層	14.9	6.6	6.5		1/6	1/12		51	6	
20	324	陶胎染付	小坏	京焼系		19世紀前半	11	11試掘	包含層	6.8	4.7	4.1		1/4	1/4		51	6	
21	325	施釉陶器	小鉢	京焼系	在地	19世紀前半	11	11試掘	包含層	5.6	2.6	3.5		3/4	完存		31	6	
22	326	無釉陶器	椀		備前	19世紀前半	11	11試掘	包含層		4.3+	4.1			1/2強		51	6	
23	327	無釉陶器	小形甕		備前	19世紀前半	11	11試掘	包含層	11.9	10.6	7.6		1/5	1/2弱		31	6	
25	275	染付磁器	皿		肥前	18世紀後半	12	12	SD1201	22.0	5.4	9.0		1/4強	1/8		30	7	
26	274	染付磁器	水滴	京焼系		18世紀後半～19世紀前半	12	12	SD1201		3.0					1/4程度	30	7	
27	276	土師器	焙烙		関西系	18世紀後半	12	12	SD1201	30.4	6.4+			若干		体部1/8	31	7	
28	272	染付磁器	碗	広東碗	肥前	18世紀後半～19世紀前半	12	12	包含層	11.7	5.9	6.6		若干	1/6		30	7	
29	271	染付磁器	碗		肥前	18世紀後半～19世紀前半	12	12	包含層	11.0	4.0+			1/10			30	7	
30	273	染付磁器	碗	くらわんか	肥前	18世紀後半	12	12	包含層	10.7	5.1+			1/6		体部1/3	30	7	
31	270	染付磁器	蓋	京焼系		19世紀中	12	12	包含層	9.6	2.8			1/5		つまみ1/4	30	7	
32	269	陶胎染付	椀	端反形	肥前	19世紀前半	12	12	包含層	9.0	5.2	3.8		1/6	完存		30	7	
33	268	施釉陶器	弥七焜炉		東山	19世紀中	12	12	包含層		7.0+	20.0			1/4弱	脚1ヶ所	31	7	
34	282	染付磁器	碗		波佐見	18世紀前半	13	13北			4.8+	3.9			完存		32	9	
35	289	染付磁器	碗		波佐見	18世紀後半	13	13北			2.8+	4.4			完存		32	9	
36	295	染付青磁	碗		肥前	18世紀前半	13	13			5.2+	4.1			1/3		32	9	
37	277	染付磁器	碗	京焼系		19世紀前半	13	13北			2.6+	4.2			1/4		32	9	
38	281	染付磁器	小碗	端反形	京焼系東山？	19世紀前半	13	13北		7.2	3.8	3.6		若干	3/4	体部2/3	35	9	「後赤壁賦」
39	278	染付磁器	碗	京焼系		19世紀前半	13	13北			3.4+	4.5			1/4		32	9	
40	293	染付磁器	碗		瀬戸・美濃	19世紀前半	13	13北		8.9	4.6+			2/5			32	9	
41	294	染付磁器	碗		瀬戸・美濃	19世紀前半	13	13			4.5+	4.1			1/2		32	9	
42	279	染付磁器	碗		瀬戸・美濃	19世紀前半	13	13北			4.1+	4.4			完存		32	9	
43	287	磁器	碗			明治以降	13	13北			3.0+	4.3			完存		32	9	
44	290	染付青磁	碗蓋		肥前	18世紀前半	13	13北			1.9+	4.1			ほぼ完存		32	9	
45	280	染付磁器	碗蓋		肥前	19世紀中以降	13	13北			3.3+	4.2			完存		32	9	
46	296	染付磁器	瓶	油壺	肥前	18世紀後半	13	13北			5.8+					体部1/2	33	9	
47	288	施釉陶器	椀		肥前	18世紀前半	13	13北			4.1+	4.3			完存		33	9	
48	292	施釉陶器	椀	京焼系	在地	19世紀前半	13	13北		8.6	4.7+			1/3			33	9	
49	286	陶胎染付	皿		瀬戸・美濃	19世紀前半	13	13北			1.9+	5.3			完存		33	9	
50	284	施釉陶器	皿	ヒダ皿	瀬戸・美濃	19世紀前半	13	13北		12.1	1.5+						33	9	
51	291	施釉陶器	行平鍋	京焼系		19世紀前半	13	13北		13.7	4.5+			1/4弱			33	9	
52	302	無釉陶器	べかんこ徳利		備前	19世紀前半	13	13北			4.7+					体部1/2	33	9	
53	297	無釉陶器	花生		備前	19世紀前半	13	13北		6.4	8.3+			1/8		頸部1/4	33	9	
54	300	無釉陶器	鉢		備前	19世紀前半	13	13北		34.6	15.4+			1/10			33	9	
55	301	無釉陶器	甕		備前	19世紀前半	13	13北			7.6+	16.1			1/6		33	9	窯印
56	299	無釉陶器	火入		備前		13	13北			9.2+	14.2			1/4弱		33	9	
57	298	無釉陶器	擂鉢		明石	18世紀後半～19世紀前半	13	13北		25.0	6.8+			1/12			33	9	
58	330	土師器	火舎火鉢	型作り			13	13北			6.6						34	9	
59	331	土師器	火舎火鉢	型作り			13	13北			6.4						34	9	
60	332	土師器	火舎火鉢	型作り			13	13北			6.5						34	9	

第２表　赤穂城下町跡　土器類一覧（２）

報告No.	実測No.	種別	器種	手法等	産地等	時期	地区	区	遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	重量(g)	残存			図版No.	挿図No.	備考
														口縁部	底部	その他			
62	317	染付磁器	碗	広東碗	肥前	19世紀前半	14	14	SK1401	11.4	6.6	7.0		1/9	1/4		36	11	
63	318	染付磁器	碗	半球形碗	肥前	19世紀前半	14	14	SK1401		3.5+	3.6			1/2		36	11	
64	303	染付磁器	鉢		肥前	19世紀前半	14	14	SK1401	5.8	2.6	6.0		1/3強	1/2		35	11	
65	319	施釉陶器	皿		信楽	19世紀前半	14	14	SK1401	10.6	2.5+			1/6			36	11	
66	304	無釉陶器	小甕		備前	19世紀前半	14	14	SK1401	5.8	4.6+			1/4			35	11	
67	316	無釉陶器	擂鉢		備前	Ｖ期	14	14	SK1401		7.5+	15.1			1/6		35	11	
68	321	施釉陶器	大甕		大谷	19世紀前半	14	14	SK1401	(51.3)	16.7+			1/12			35	11	
69	305	染付磁器	碗	くらわんか	肥前	18世紀後半	14	14	SK1402	6.7	3.7	4.1		1/5	1/4		36	11	
70	306	施釉陶器	椀	京焼風	肥前	18世紀前半	14	14	SK1402		3.5+	4.4			完存		36	11	
71	307	施釉陶器	椀	京焼風	肥前	18世紀前半	14	14	SK1402		4.3+	4.8			完存		36	11	
73	320	青磁	皿		肥前	17世紀後半～18世紀前半	14	14	SD1403	12.8	2.4+			1/3			36	11	
74	123	施釉陶器	椀	京焼風	肥前	17世紀後半～18世紀前半	14	14	SD1403		1.8+	2.9			完存		36	11	
75	311	染付磁器	碗	広東碗	肥前	19世紀前半	14	14	第1面より上層		3.3	5.9			1/2強		36	11	
76	122	施釉陶器	椀	京焼風	肥前	17世紀後半～18世紀前半	14	14	第1面より上層		2.5+	2.9			完存		36	11	
77	310	施釉陶器	椀	刷毛目椀	肥前	18世紀前半	14	14	第1面より上層	10.7	5.0+			1/4			36	11	
78	312	陶胎染付	化粧皿	京焼風	瀬戸・美濃	19世紀中～明治	14	14	第1面より上層	10.4	1.6+			若干			36	11	
79	313	施釉陶器	鉢	京焼風			14	14	第1面より上層		5.9+			一部			36	11	
80	308	施釉陶器	蓋	京焼系	在地	19世紀前半	14	14	第1面より上層	10.6	2.5	5.0				完存	35	11	
81	309	施釉陶器	蓋	京焼系	在地	19世紀前半	14	14	第1面より上層	8.1	1.9	4.4		1/2	1/2		36	11	
82	314	無釉陶器	擂鉢		備前	19世紀前半	14	14	第1面より上層	30.4	8.4+			1/5			35	11	
83	160	施釉陶器	椀	京焼風	肥前	18世紀前半	15	16-17間	SK1501		3.3+	5.0			1/3		37	17	底部「善」刻印
84	145	無釉陶器	鉢				15	16-17間	SK1501		4.7+	15.7			1/6		38	17	
85	152	染付磁器	仏飯器		肥前	18世紀後半	15	16-17間	SD1502掘形	5.8	3.0+			1/3			37	17	
86	139	染付磁器	猪口			19世紀前半より後	15	15-16間	SD1502掘形		2.3+	3.0			1/3		37	17	
87	120	染付磁器	碗	広東碗	肥前	19世紀前半	15	16	SD1502掘形	11.3	6.2	6.4		1/4	1/2		35	17	
88	121	染付磁器	碗	広東碗	肥前	19世紀前半	15	16	SD1502掘形		4.0+	6.4			1/2		37	17	
89	156	染付磁器	皿	蛇目釉ハギ	波佐見	18世紀前半	15	16-17間	SD1502掘形	(11.9)	3.3	3.6		若干	1/2弱		37	17	
90	161	施釉陶器	椀	京焼風	肥前	18世紀前半	15	16-17間	SD1502掘形		3.6+	5.5			1/2強		37	17	底部「善」刻印
91	128	施釉陶器	椀	半球形椀		19世紀前半より後	15	15-16間・16	SD1502掘形	8.45	5.0	2.9		1/5	完存		38	17	
92	124	施釉陶器	椀	京焼系			15	16	SD1502掘形		4.0+	2.8			完存		38	17	
93	126	施釉陶器	椀	半球形椀		19世紀前半より後	15	16	SD1502掘形		2.7+	2.8			完存		38	17	
94	125	施釉陶器	椀	半球形椀		19世紀前半より後	15	16	SD1502掘形		2.5+	3.0			完存		38	17	
95	127	施釉陶器	椀	半球形椀	肥前	19世紀前半～後半	15	16・16-17間	SD1502掘形		2.6+	2.7			3/4		37	17	
96	155	染付磁器	瓶類		肥前		15	16-17間	SD1502掘形		4.5+	4.6			2/3		37	17	
97	129	無釉陶器	鉢		備前		15	16	SD1502掘形	9.8	6.2	10.9		1/4	1/4		35	17	窯印
98	149	無釉陶器	擂鉢(片口)			18世紀後半	15	16-17間	SD1502掘形		5.2+			一部			38	17	
99	131	施釉陶器	擂鉢			19世紀前半より後半	15	16	SD1502掘形		6.9+			若干			38	17	
100	130	施釉陶器	甕				15	16	SD1502掘形	(25.0)	6.3+			1/12			38	17	
101	132	瓦質土器	焙烙		瀬戸内系	19世紀代	15	16	SD1502掘形	30.2	4.2+			1/9			31	17	
102	148	瓦質土器	火鉢				15	16-17間	SD1502掘形		12.6						51	17	
103	336	瓦質土器	火鉢				15	16	SD1502掘形								51	17	
139	143	無釉陶器	擂鉢		肥前	18世紀前半	15	15	第2面より上層	27.7	4.7+			1/6			38	22	
140	151	施釉陶器	鉢	三島手	肥前	17世紀後半	15	17	SD1505	(27.0)	8.4+			1/12			38	22	
141	159	施釉陶器	椀		肥前	18世紀前半	15	17	SD1505		4.0+	6.0			1/7		37	22	
142	147	無釉陶器	擂鉢	Ｄ類	丹波	18世紀前半	15	17	第2面	(32.0)	5.3+			1/18			38	22	
143	150	瓦質土器	羽釜			18世紀前半	15	17	SD1505	(22.7)	4.3+			1/24			31	22	
144	140	染付磁器	小皿		景徳鎮	17世紀前半	15	15-16間	第2面	(13.0)	2.8	8.2		1/12	1/3		37	22	
145	141	染付磁器	小皿		景徳鎮	17世紀前半	15	15・15-16間	第2面	(11.9)	3.0	7.0		1/12	1/7		37	22	
146	153	染付磁器	小坏	初期伊万里	肥前	17世紀前半	15	17	第3面		2.1+	2.9			完存		37	22	
147	138	染付磁器	中碗		肥前	17世紀後半～18世紀前半	15	15	第1面より上層	9.8	3.9+			1/7			37	22	
148	119	染付磁器	碗	くらわんか	肥前	18世紀後半	15	15-16間	第1面より上層	10.1	4.3+			1/2			37	22	
149	154	青磁	変形皿		三田	19世紀前半	15	16-17間	第1面より上層		2.6						37	22	
150	142	施釉陶器	椀			19世紀	15	15	第1面より上層	10.6	7.2	4.7		1/6	完存		38	22	
151	157	白磁	碗				15	17	第1面より上層		5.3+	(8.4)			1/12		37	22	
152	158	陶胎染付	香炉		肥前	18世紀後半	15	17	第1面より上層	10.6	5.2+			1/6			37	22	
153	146	無釉陶器	鉢		備前	19世紀前半	15	17	第1面より上層	13.9	5.7+			1/8			38	22	
154	144	土師器	焙烙			18世紀前半	15	15	第1面より上層	30.3	8.2	32.2		1/9	若干		35	22	
156	184	染付磁器	碗		肥前	19世紀前半	18	18-19間	第1面より上層	9.6	5.5	3.7		1/4	一部欠		42	25	
157	196	施釉陶器	椀	京焼系		19世紀前半	18	18-19間	第1面より上層	9.9	6.8	4.6		1/9	3/4		43	25	

第２表　赤穂城下町跡　土器類一覧（３）

報告No.	実測No.	種別	器種	手法等	産地等	時期	地区	区	遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	重量(g)	残存			図版No.	挿図No.	備考
														口縁部	底部	その他			
158	179	施釉陶器	椀	京焼系		18世紀後半～19世紀前半	18	1・18-19間	第1面	10.2	7.1	5.3		1/5	3/4		51	25	
159	164	施釉陶器	香炉		肥前	18世紀後半まで	18	18・19	第1面	12.4	5.5+			1/4			41	25	
160	195	無釉陶器	擂鉢		備前	Ⅴ期	18	18-19間	第1面	29.1	8.3+			1/4弱			47	25	
161	192	瓦質土器	羽釜				18	18-19間	第1面	22.3	7.5+			1/4弱			43	25	
162	191	瓦質土器	火入れ				18	18-19間	第1面	12.7	4.6	10.7		1/3強	1/7		43	25	
163	165	土師質	壁土			18世紀後半	18	18	第1面		6.0+						52	25	
164	163	染付磁器	碗	くらわんか	肥前	18世紀中～後半	18	18	第2面より上層	10.4	3.9+			1/4			41	25	
165	168	無釉陶器	壺		備前	19世紀前半	18	18	第2面より上層		3.1+	9.5			1/4		47	25	
166	162	染付磁器	碗	初期伊万里	肥前	17世紀前半	18	18	第2面炭層	13.2	5.1+			1/4			41	25	
167	173	白磁	合子蓋			18世紀後半	18	18	第2面より上層	10.3	1.9					完存	42	25	
168	178	施釉陶器	椀	京焼風	瀬戸・美濃	１８世紀前半	18	18-19間	第2面炭層	(10.8)	7.6	5.0		1/9	ほぼ完存		43	25	
169	170	施釉陶器	鉢		唐津	17世紀前半	18	18	第2面炭層		3.2+	5.6			完存		4	25	
170	172	施釉陶器・二彩	皿	砂目	肥前	18世紀前半	18	18	第2面炭層	13.8	3.9	5.5		1/6	2/3		4	25	
171	169	施釉陶器	皿	蛇目釉ハギ	肥前	18世紀前半	18	18	第2面炭層		2.7+	6.9			1/4		4	25	
172	171	施釉陶器	皿		肥前	18世紀前半	18	18	第2面炭層		2.6+	4.5			完存		4	25	
173	194	無釉陶器	水差		備前	１７世紀前半	18	18-19間	第2面炭層		15.2+					体部1/4	42	25	
174	201	染付磁器	碗		肥前	18世紀後半～19世紀前半	18	19	第1面より上層	8.9	5.0+			1/7			42	25	
175	202	染付磁器	碗		瀬戸・美濃	19世紀前半	18	19	第1面より上層		4.4+	5.0			1/6		42	25	
176	322	染付陶器	瓶（徳利）	くらわんか	肥前	18世紀後半	18	18-19間試掘	第1面より上層		5.0+	6.5			1/2弱		51	25	
177	177	白磁	皿	蛇目釉ハギ	波佐見	１８世紀前半	18	18-19間	第1面より上層		2.4+	4.1			ほぼ完存		42	25	
178	200	白磁	皿	蛇目釉ハギ	波佐見	１８世紀前半	18	18-19間	第1面より上層	13.4	3.6	4.8		1/3弱	ほぼ完存		47	25	
179	167	施釉陶器	椀	京焼風	肥前	17世紀後半	18	18	第1面より上層		3.7+	4.9			完存		42	25	
180	166	施釉陶器	皿	蛇目釉ハギ	肥前唐津	17世紀後～18世紀前	18	18	第1面より上層		2.6+	4.9			完存		4	25	
181	208	無釉陶器	盤		備前	17世紀前半	18	19	第1面より上層	20.8	5.1	15.2		1/7	1/4弱		47	25	
182	186	染付磁器	皿	初期伊万里	肥前	17世紀前半	18	18-19間	SD1804		1.1+	5.9			1/3強		41	26	
183	185	染付磁器	皿	初期伊万里	肥前	17世紀前半	18	18-19間	SD1804		2.3+	8.3			1/4弱		41	26	
184	189	染付磁器	碗		肥前	17世紀後半	18	18-19間	SD1804		3.8+					体部一部	41	26	
185	199	染付磁器	碗		肥前	17世紀後半	18	18-19間	SD1804		3.2+	5.0			1/4弱		41	26	
186	188	白磁	皿	蛇目釉ハギ	波佐見	18世紀前半	18	18-19間	SD1804		2.1+	4.4			1/3		41	26	
187	187	白磁	皿	蛇目釉ハギ	波佐見	18世紀前半	18	18-19間	SD1804		2.8+	4.4			1/3		41	26	
188	198	施釉磁器	徳利		肥前	18世紀前まで	18	18-19間	SD1804	5.1	4.5+			若干			41	26	
189	197	施釉陶器	椀	京焼風	肥前	17世紀後半～18世紀前半	18	18-19間	SD1804	10.8	7.1+			1/5			42	26	
190	182	施釉陶器	椀	京焼風	肥前	17世紀後半～18世紀前半	18	18-19間	SD1804	9.9	5.3+			1/4弱			42	26	
191	183	施釉陶器	椀	京焼風	肥前	17世紀後半～18世紀前半	18	18-19間	SD1804		3.6+	5.4			完存		42	26	
192	180	施釉陶器・二彩	徳利			18世紀後半	18	18-19間	SD1804		17.0+	6.3			完存		42	26	
193	203	施釉陶器	徳利		唐津	17世紀前半	18	18-19間	SD1804		4.2+	6.6			完存		42	26	
194	175	施釉陶器	甕	飯洞甕	唐津	17世紀前半	18	18	SD1804	14.2	21.2+			1/3			3	26	
195	204	施釉陶器	大皿		肥前唐津	18世紀前半	18	18-19間	SD1804		3.2+	10.6			1/4		42	26	
196	190	土師器	小皿			18世紀前半	18	18-19間	SD1804	6.6	1.2	4.9				ほぼ完存	43	26	
197	174	土師器	小皿			18世紀前半	18	18	SD1804	9.7	1.5	7.2				完存	43	26	
198	205	土師器	皿			17世紀前半	18	18-19間	SD1804	11.4	2.1	6.9		1/2	完存		43	26	
199	206	土師器	焙烙			17世紀前半	18	18-19間	SD1804	33.2	6.5	29.3		1/4弱	1/7		43	26	
200	181	土師器	焙烙			17世紀前半	18	18-19間	SD1804	30.0	7.4+			1/4	1/3		43	26	
201	207	土師器	焙烙			18世紀前半	18	18-19間	SD1804	28.6	4.6	29.2		1/6	1/6		43	26	
202	193	瓦質土器	羽釜			17世紀前半	18	18-19間	SD1804	19.4	8.7+			1/7	溝		43	26	
203	176	瓦質土器	釜			17世紀前半	18	18・18-19間	SD1804		11.7+					体部1/7	43	26	
278	209	無釉陶器	擂鉢		備前		20	20	包含層		4.5+			一部			47	28	
280	113	染付磁器	碗	半球形	肥前	18世紀後半～19世紀前半	22	22	SK2201	10.0	5.0	3.50		1/3	完存		3	31	
281	108	染付磁器	皿		肥前	18世紀後半～19世紀前半	22	22	SK2201		1.2+	6.1			1/7		45	31	
282	109	染付磁器	碗	端反形		19世紀代	22	22	SK2201	10.0	3.5+			1/12			45	31	
283	110	染付磁器	碗	京焼系		19世紀前半	22	22	SK2201	7.8	3.0+			1/6			45	31	
284	117	無釉陶器	徳利		備前	18世紀後半～19世紀前半	22	22	SK2201		8.7+					体部1/4	46	31	
285	116	施釉陶器	壺		肥前	18世紀前半	22	22	SK2201		7.1+	11.2			1/4		46	31	
286	114	施釉陶器	鍋	京焼系	在地	19世紀前半	22	22	SK2201	19.5	7.4+			1/9			46	31	
287	115	無釉陶器	擂鉢		明石	19世紀前半	22	22	SK2201	33.4	4.3+			1/24			46	31	
288	334	土師器	火舎火鉢	型作り			22	22	SK2201		6.7						47	31	
289	333	土師器	火舎火鉢	型作り			22	22	SK2201		7.3						47	31	
290	111	施釉陶器	灯明皿		信楽	19世紀前半～中頃	22	22	包含層	9.6	1.4	3.8		1/2弱	1/2		45	31	
291	112	無釉陶器	壺か徳利		丹波		22	22拡	包含層		3.2+	12.4			1/6		46	31	

第２表　赤穂城下町跡　土器類一覧（４）

報告No.	実測No.	種別	器種	手法等	産地等	時期	地区	区	遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	重量(g)	残存			図版No.	挿図No.	備考
														口縁部	底部	その他			
292	107	染付磁器	碗		肥前	18世紀後半～19世紀前半	22	22拡	包含層	(10.3)	4.7	3.9		若干	完存		45	31	
293	106	施釉陶器	皿	蛇目釉ハギ	肥前	18世紀前半	22	22南拡	包含層		2.3+	4.5			完存		45	31	
294	232	染付磁器	碗			大正～昭和	23	21北	南端	11.1	5.1	4.1		1/4	一部欠		48	33	
295	229	染付磁器	小坏			明治前半	23	21北	南端	7.7	2.4	2.5					48	33	
296	227	染付磁器	蓋	京焼風		19世紀前半以降	23	21北	南端	9.2	2.9					ほぼ完存	48	33	
297	226	染付磁器	蓋				23	21北	南端	8.6	2.5			1/2			49	33	
298	224	染付磁器	碗	くらわんか	肥前	18世紀後半	23	21北	南端	9.5	5.6	4.2		1/4	1/3		50	33	
299	223	胎陶染付	椀	くらわんか	肥前	18世紀後半	23	21北	南端		5.8+	4.8			2/3		50	33	
300	222	施釉陶器	椀	京焼系	信楽	19世紀前半	23	21北	南端	9.2	5.1	2.5		1/6	1/2		50	33	
301	230	施釉陶器	向付皿		志野	17世紀初頭	23	21北	南端								3	33	
303	231	染付磁器	皿		波佐見	18世紀後半	23	21北	中央	13.2	3.9	8.1		1/4弱	1/4弱		50	33	
304	228	施釉陶器	焜炉の蓋	弥七焜炉	東山		23	21北	中央								50	33	
305	211	染付磁器	碗		肥前	19世紀前半～中頃	23	21北	北	6.5	3.4	2.7		1/12	3/4		49	33	
306	212	染付磁器	碗	京焼系	東山	19世紀前半	23	21北	北	7.6	4.2	2.8		1/5	1/2		49	33	
307	217	染付磁器	皿		肥前	明治	23	21北	北		2.5+	8.4			1/2強		49	33	
308	215	染付磁器	碗蓋			明治30年以降	23	21北	北	7.8	2.1			2/3			49	33	
309	214	染付磁器	碗蓋		京焼	近代	23	21北	北	9.1	2.3			1/4弱			48	33	
310	216	施釉陶器	土瓶蓋		在地	19世紀前半	23	21北	北	6.7	3.2			2/3			48	33	
311	213	施釉陶器	土瓶蓋		在地	19世紀前半	23	21北	北	8.6	2.0	4.4				ほぼ完存	48	33	
312	234	染付磁器	碗		肥前	19世紀前半	23	21北	北端	11.0	6.3	4.4		1/9	1/2		49	33	
313	219	染付磁器	碗			明治時代以降	23	21北	北端	11.2	6.5	5.3		1/4弱	完存		48	33	
314	238	染付磁器	碗			明治時代以降	23	21北	北端	12.1	5.2	4.3		1/3	若干		49	33	
315	233	染付磁器	碗	端反形	瀬戸	19世紀前半	23	21北	北端	8.3	4.6	3.5		1/4	完存		48	33	
316	235	染付磁器	六角鉢	型打	肥前	19世紀前半	23	21北	北端		4.6+	9.1			完存		49	33	
317	243	染付磁器	深皿		肥前	19世紀前半	23	21北	北端	11.9	3.5	7.6		若干	4/5		49	33	
318	218	染付磁器	皿		肥前	明治	23	21北	北端	13.9	3.0	7.6		1/4	完存		48	33	
319	246	染付磁器	皿			近代	23	21北	北端	10.8	2.7	6.9		1/2弱	1/4		49	33	
320	244	染付磁器	輪花皿	肥前系	出石	19世紀中頃	23	21北	北端	8.9	2.1	5.0		1/6	完存		49	33	
321	242	施釉陶器	椀	刷毛目椀	肥前	18世紀前半	23	21北	北端		2.8+	3.9			3/4		50	34	
322	220	施釉陶器	椀	京焼系	信楽	19世紀前半	23	21北	北端	9.0	4.9	3.3		1/12	1/4		50	34	
323	237	胎陶染付	皿		肥前	18世紀後半	23	21北	北端	13.2	3.3	4.4		若干	完存		50	34	
324	248	施釉陶器	鉢	京焼系		19世紀前半	23	21北	北端		7.4+	11.0			完存		50	34	
325	236	施釉陶器	香炉			19世紀前半	23	21北	北端		3.9+	3.2			1/2		50	34	
326	221	施釉陶器	灯明皿		信楽	19世紀前半	23	21北	北端	11.0	2.2	4.4		1/7	3/4		48	34	
327	240	無釉陶器	壺		丹波	幕末～明治	23	21北	北端	26.4	5.3+			1/10			50	34	
328	247	無釉陶器	鉢		明石？	幕末～明治	23	21北	北端	22.5	12.2	17.7		1/4	完存		48	34	
329	249	無釉陶器	擂鉢		堺・明石	19世紀前半	23	21北	北端	34.4	11.9	16.2			1/3		50	34	
330	239	無釉陶器	擂鉢		堺・明石	19世紀前半	23	21北	北端	34.8	9.5+			1/10			50	34	
332	335	土師器	火舎火鉢	型作り			23	21北	北端		8.4						47	34	
333	323	青磁	碗		肥前	18世紀前半	23	2		11.8	6.8	4.5		1/6	1/12		51	34	大桝付近試掘

第３表　赤穂城下町跡　土製品一覧（１）

報告No.	実測No.	種別	器種	地区	区	遺構	腹径(cm)	長(cm)	巾(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存			図版No.	挿図No.	備考
												口縁部	底部	その他			
61	283	土製品	羽口	13	13北			5.9	5.3	2.9					52	9	
72	315	土製品	羽口	14	14	SK1402		9.9	7.8	3.9					52	11	
106	133	土製品	羽口	15	16	SD1502掘形		11.6	9.6	8.9					52	18	
107	134	土製品	羽口	15	16	SD1502掘形		4.2	4.5	3.6					52	18	
155	135	土製品	羽口	15	15	第1面より上		10.0	8.2	4.2					52	22	
204	55	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		4.8	0.8	0.7	2.3+			一部欠	44	27	
205	34	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		4.6	0.9	0.8	2.4			完存	44	27	
206	63	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		4.5	0.7	0.7	2.1+				44	27	
207	33	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		4.5	0.8	0.8	2.5			完存	44	27	
208	56	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		4.4	0.8	0.8	2.1+			一部欠	44	27	
209	38	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		4.3	0.8	0.8	2.2			完存	44	27	
210	69	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		4.4	0.9	0.8	2.4+				44	27	
211	54	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		4.3	0.7	0.7	1.9+			一部欠	44	27	
212	42	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		4.3	0.8	0.7	1.9			完存	44	27	
213	53	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		4.2	0.8	0.8	2.5			ほぼ完存	44	27	

第３表　赤穂城下町跡　土製品一覧（２）

報告No.	実測No.	種別	器種	地区	区	遺構	腹径(cm)	長(cm)	巾(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存			図版No.	挿図No.	備考
												口縁部	底部	その他			
214	58	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		4.1	0.7	0.8	2.3+			一部欠	44	27	
215	57	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		4.1	0.8	0.7	2.3			ほぼ完存	44	27	
216	41	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		4.1	0.8	0.8	2.2			完存	44	27	
217	67	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		4.0	0.8	0.8	2.0+			一部欠	44	27	
218	60	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		4.1	0.8	0.7	1.9+			一部欠	44	27	
219	48	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		4.0	0.7	0.6	1.6			ほぼ完存	44	27	
220	35	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.9	0.8	0.8	2.5			完存	44	27	
221	49	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		4.0	0.8	0.8	2.2			ほぼ完存	44	27	
222	50	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		4.0	0.8	0.8	1.9			ほぼ完存	44	27	
223	52	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		4.0	0.7	0.6	1.6			ほぼ完存	44	27	
224	62	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.9+	0.7	0.8	1.9+			一部欠	44	27	
225	32	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		4.0	0.9	0.8	2.3			完存	44	27	
226	79	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		4.0+	0.8	0.8	2.3+			一部欠	44	27	
227	68	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.9	0.7	0.8	1.9+			一部欠	44	27	
228	66	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.9	0.8	0.7	1.9+			一部欠	44	27	
229	70	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.9+	0.8	0.8	1.9+			一部欠	44	27	
230	65	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.8+	0.7	0.7	1.6+			一部欠	44	27	
231	51	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.8	0.8	0.8	2.3			ほぼ完存	44	27	
232	36	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.8	0.8	0.8	2.4			完存	44	27	
233	39	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.8	0.8	0.9	2.3			完存	44	27	
234	78	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.8+	0.7	0.7	1.7+			一部欠	44	27	
235	61	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.8	0.7	0.8	1.8+			一部欠	44	27	
236	37	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.7	0.8	0.8	1.9			完存	44	27	
237	59	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.7	0.8	0.7	1.9			ほぼ完存	44	27	
238	43	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.7	0.8	0.8	1.8			完存	44	27	
239	40	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.6	0.8	0.8	1.7			完存	44	27	
240	44	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.7	0.7	0.7	1.5			完存	44	27	
241	47	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.7	0.7	0.7	1.7			完存	44	27	
242	71	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.6	0.8	0.7	1.9			ほぼ完存	44	27	
243	46	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.6	0.8	0.8	1.9			完存	44	27	
244	45	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.6	0.9	0.8	2.2			完存	44	27	
245	64	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.6+	0.7	0.7	1.5+			一部欠	44	27	
246	73	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.6+	0.8	0.8	2.0+			一部欠	44	27	
247	76	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.6+	0.7	0.7	1.5+			一部欠	44	27	
248	72	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.6+	0.8	0.8	1.9+			一部欠	44	27	
249	74	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.5+	0.8	0.8	1.7+			一部欠	44	27	
250	75	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.5+	0.8	0.7	1.4+			一部欠	44	27	
251	77	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.4+	0.7	0.7	1.5+			一部欠	44	27	
252	81	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.5+	0.7	0.7	1.6+			一部欠	44	27	
253	84	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.3+	0.8	0.8	1.7+			一部欠	44	27	
254	85	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.2+	0.7	0.7	1.6+			一部欠	44	27	
255	93	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.1+	0.7	0.7	1.4+			一部欠	44	27	
256	80	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		4.1+	0.8	0.7	1.7+			一部欠	44	27	
257	82	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		4.1+	0.8	0.7	1.5+			一部欠	44	27	
258	83	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.8+	0.7	0.7	1.4+			一部欠	44	27	
259	95	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		2.8+	0.9	0.8	1.6+			一部欠	44	27	
260	87	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		2.8+	0.8	0.7	1.3+			一部欠	44	27	
261	86	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.7+	0.7	0.7	1.2+			一部欠	44	27	
262	90	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		2.6+	0.8	0.7	1.2+			一部欠	44	27	
263	92	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		2.6+	0.8	0.8	1.6+			一部欠	44	27	
264	91	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		2.6+	0.8	0.7	1.3+			一部欠	44	27	
265	100	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		2.5+	0.8	0.8	1.5+			一部欠	44	27	
266	94	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		2.5+	0.7	0.7	1.0+			一部欠	44	27	
267	88	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.4+	0.8	0.7	1.4+			一部欠	44	27	
268	97	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		2.2+	0.8	0.7	1.1+			一部欠	44	27	
269	96	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		2.7+	0.7	0.7	1.1+			一部欠	44	27	
270	89	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		3.1+	0.8	0.7	1.0+			一部欠	44	27	
271	105	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		2.1+	0.8	0.7	0.9+			一部欠	44	27	
272	98	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		1.9+	0.8	0.7	1.0+			一部欠	44	27	
273	102	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		1.8+	0.8	0.7	1.1+			一部欠	44	27	
274	99	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		1.8+	0.8	0.7	0.8+			一部欠	44	27	
275	101	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		1.7+	0.7	0.7	0.8+			一部欠	44	27	
276	103	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		1.7+	0.7	0.7	0.8+			一部欠	44	27	
277	104	土製品	管状土錘	18	18-19間	SD1804		1.5+	0.8	0.7	0.7+			一部欠	44	27	
302	225	土製品	羽口	23	21北	南端		5.2	6.4					一部欠	52	33	

第４表　赤穂城下町跡　瓦類一覧

報告No.	実測No.	種別	器種	文様等	地区	区	遺構	腹径(cm)	長(cm)	巾(cm)	厚(cm)	内径(cm)	外径(cm)	重量(g)	残存			図版No.	挿図No.	備考
															口縁部	底部	その他			
24	329	瓦	丸瓦		11	11試掘	包含層		14.3	12.4	2.1							51	6	11試掘
104	137	瓦	軒丸瓦	三巴文	15	16	SD1502掘形		5.2+	直径9.4+	復原径12.8							51	17	
105	136	瓦	丸瓦		15	16	SD1502掘形		14.1+	12.7	1.8							51	17	
137	12	瓦製品	瓦管(軒丸瓦)		15	16	SD1502		25.0	12.4	1.7			1,000				40	21	A27
138	13	瓦製品	瓦管(丸瓦)		15	16	SD1502		25.0	12.7	1.9			1,060			ほぼ完存	40	21	A28
279	210	瓦	軒平瓦	唐草文	20	20	包含層		2.3									51	28	
331	245	瓦	軒丸瓦	三巴文	23	23	北端		2.7	瓦当径13.6	瓦当厚1.8						瓦当1/2	51	34	

第５表　赤穂城下町跡　瓦管一覧

報告No.	実測No.	種別	器種	地区	区	遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	内径(cm)	外径(cm)	重量(g)	残存			図版No.	挿図No.	備考
													口縁部	底部	その他			
108	1	瓦製品	瓦管	15	15-16間	SD1502		24.1+	13.3	10.5～9.5	13.8～13.7	2,480	欠	2/3		-	19	A01
109	2	瓦製品	瓦管	15	15-16間	SD1502	8.4	21.1+		10.0	13.9	2,350	一部欠	欠		-	19	A02
110	3	瓦製品	瓦管	15	15-16間	SD1502	8.4	26.2	14.1	10.0～10.3	13.5～13.8	2,760			ほぼ完存	-	19	A03
111	4	瓦製品	瓦管	15	15-16間	SD1502	8.9	26.6	13.9	9.6～10.4	13.4～14.1	2,860	若干欠	2/3		-	19	A04
112	5	瓦製品	瓦管	15	15-16間	SD1502	9.2	25.7	14.0	10.2～10.5	13.9～14.2	2,840	12/13	2/3		-	19	A05
113	6	瓦製品	瓦管	15	15-16間	SD1502	9.2	26.8	14.2	9.9～10.2	13.6～14.2	2,870			ほぼ完存	-	19	A06
114	7	瓦製品	瓦管	15	15-16間	SD1502	9.4	26.6	14.2	9.9	14.0～14.5	3,310			ほぼ完存	39	19	A07
115	8	瓦製品	瓦管	15	15-16間	SD1502	8.9	27.1+	14.5	10.0～10.3	13.7～14.4	3,000	1/3	8/9		39	19	A08
116	9	瓦製品	瓦管	15	15-16間	SD1502	8.2	26.0	13.7	10.0	13.6	2,880	一部欠	2/3		39	19	A09
117	10	瓦製品	瓦管	15	15-16間	SD1502	8.7	26.4	13.6	10.1	13.5	2,600			ほぼ完存	39	19	A10
118	11	瓦製品	瓦管	15	15-16間	SD1502	8.9	26.4	13.9	9.9～10.0	13.8～14.0	2,900			ほぼ完存	39	19	A11
119	24	瓦製品	瓦管	15	16	SD1502	8.5	26.9	13.5	10.1～10.8	14.2～14.6	3,280			ほぼ完存	-	19	A12
120	25	瓦製品	瓦管	15	16	SD1502	8.5	26.8	14.2	10.1～10.5	13.8～14.2	3,040	3/4	ほぼ完存		-	19	A13
121	26	瓦製品	瓦管	15	16	SD1502		19.4+	13.7	9.8～10.0	13.6～13.9	2,050	欠	3/4	上部約1/3欠	-	19	A14
122	27	瓦製品	瓦管	15	16	SD1502	8.6	29.1	14.2	10.1～10.4	13.8～14.1	3,440	3/4	2/3		-	19	A15
123	28	瓦製品	瓦管	15	16	SD1502	8.8	26.4	14.1	9.9～10.1	13.7～14.0	2,650+	6/6	1/4		-	20	A16
124	29	瓦製品	瓦管	15	16	SD1502	8.8	25.6	14.0	9.9～10.2	13.6～13.8	2,860+	6/7	1/2		40	20	A17
125	30	瓦製品	瓦管	15	16	SD1502	8.7	25.4	13.7	9.9～10.4	13.7～14.2	2,720			ほぼ完存	-	20	A18
126	31	瓦製品	瓦管	15	16	SD1502	8.2	26.4	13.9	9.8～10.0	13.5～13.7	2,900			ほぼ完存	40	20	A19
127	14	瓦製品	瓦管	15	16-17間	SD1502	8.8	25.8	13.3	10.1～10.2	13.6～13.8	2,800			ほぼ完存	-	20	A20
128	15	瓦製品	瓦管	15	16-17間	SD1502	9.0	26.7	14.1	9.7～10.0	13.1～13.7	2,600			ほぼ完存	-	20	A21
129	16	瓦製品	瓦管	15	16-17間	SD1502	8.1	26.3	13.8	9.5～10.0	13.3～13.7	2,760	ほぼ完存	7/8		-	20	A22
130	17	瓦製品	瓦管	15	16-17間	SD1502	9.3	25.8	14.0	9.9～10.2	13.7～13.9	2,660			ほぼ完存	-	20	A23
131	18	瓦製品	瓦管	15	16-17間	SD1502	9.2	26.8	14.2	10.2～10.4	13.8～14.1	2,940			ほぼ完存	-	20	A24
132	19	瓦製品	瓦管	15	16-17間	SD1502	8.1	26.1	13.3	9.4～9.6	13.2～13.7	2,960			ほぼ完存	-	20	A25
133	20	瓦製品	瓦管	15	16-17間	SD1502	8.6	26.0	14.0	9.8～10.2	13.5～13.9	2,420+	1/4	1/4		-	20	A26
134	23	瓦製品	瓦管	15	16-17間	SD1503	7.7	24.7	12.7	8.8～ 9.4	12.5～13.1	2,740			ほぼ完存	-	20	B01
135	22	瓦製品	瓦管	15	16-17間	SD1503	7.9	24.2	12.9	9.0～ 9.2	12.4～12.9	2,580			ほぼ完存	-	20	B02
136	21	瓦製品	瓦管	15	16-17間	SD1503	7.5	25.6	12.5	9.1～ 9.3	12.7～13.0	2,640			ほぼ完存	-	20	B03

第６表　赤穂城下町跡　金属器一覧

報告No.	実測No.	種別	器種	地区	区	遺　構	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	残存	重量（g）	分析	図版No.	挿図No.	備考
M1	T-82	鉄器	釘	13	13北		1.9+	0.5	0.3				53	9	
M2	T-11	鉄器	鉄滓	13	13北		5.6	5.8	1.3～1.5		55		53	9	
M3	T-16	鉄器	鉄滓	14	14	SK1401	7.7	10.0	2.0～2.7		130		54	12	
M4	T-17	鉄器	鉄滓	14	14	SK1401	7.7	10.0	2.8～4.3		165		54	12	
M5	T-18	鉄器	鉄滓羽口付着	14	14	SK1401	7.7	6.9	3.5～3.9		185		54	12	
M6	T-33	鉄器	鉄滓椀形	14	14	SK1404	9.0	9.2	8.6～8.7		160		54	12	
M7	T-39	鉄器	鉄滓椀形	14	14	SK1404	8.9	6.8	3.7～4.1		180		54	12	
M8	T-40	鉄器	鉄滓椀形	14	14	SK1404	8.2	7.8	4.2～4.7		160		54	12	
M9	T-45	鉄器	鉄滓椀形	14	14	SK1404	6.5	8.2	3.5～3.6		125		54	12	
M10	T-24	鉄器	鉄滓椀形	14	14	SK1404	6.6	8.8	3.6		250		54	12	
M11	T-37	鉄器	鉄滓椀形	14	14	SK1404	6.0	7.1	2.6～3.1		130		54	12	
M12	T-32	鉄器	鉄滓羽口付着	14	14	SK1404	5.8	7.4	2.3～3.4		85		54	12	
M13	T-48	鉄器	鉄滓椀形	14	14	SK1404	4.7	4.9	4.1～4.9		80		54	12	
M14	T-19	鉄器	鉄滓椀形	14	14	第2面より上層	5.5+	7.8	3.3～3.9		130		54	12	
M15	T-74	鉄器	鉄滓椀形	15	16-17間	SK1501	6.9	8.2	3.2～4.0		160		53	17	
M16	T-3	鉄器	火箸か？	15	16-17間	SD1502掘形	8.2+	0.5	0.5				53	18	
M17	T-7	鉄器	鍵	15	16-17間	SD1502掘形	8.6	3.7	0.5～0.6				53	18	
M18	T-53	鉄器	鍵	15	15-16間	SD1502掘形	4.6+	2.6	0.3～0.6				53	18	
M19	T-6	鉄器	鉄滓椀形	15	16-17間	SD1502掘形	5.3	7.4	3.4		175		53	18	
M20	T-68	鉄器	鉄滓椀形	15	16	SD1502掘形	6.7	7.7	3.5～3.8		120		53	18	
M21	T-77	鉄器	鉄滓椀形	15	16-17間	SK1504掘形	5.5	7.5	2.8～3.0		90		53	18	
M22	T-1	鉄器	釘	15	15-16間	第2面	4.3+	1.5	0.8				53	22	
M23	T-2	鉄器	釘	15	15-16間	第2面	2.7+	1.7	0.5～0.6				53	22	
M24	T-8	鉄器	鎹	15	17	第3面より上層	5.3	1.5	0.6				53	22	
M25	T-9	鉄器	釘	15	17	P1506	5.2+	0.8	0.4				53	22	
M26	T-84	銅製品	飾り釘	18	18-19間	SD1804	1.7	0.7	0.2				53	26	
M27	T-83	鉄器	包丁	22	22	SK2201	17.4	4.3	0.5～0.7				53	31	
M28	T-81	鉄器	鉄滓椀形	23	23	北端	6.9+	8.3	3.7～4.0		165		53	34	

第７表　赤穂城下町跡　木製品一覧

報告No.	実測No.	種別	器種	地区	区	遺　構	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	残存	木取り	分析	図版No.	挿図No.	備考
W1	W-2	木製品	楔	14	14	第1面より上層	12.3	2.3	2.0	完存	柾目	○	-	11	
W2	W-7	木製品	漆椀	15	16	SD1502掘形		(器高) 1.1+	(底径) 5.3	底部若干		○	-	18	
W3	W-6	木製品	板	15	16	SD1502掘形	14.3	2.1	0.7		細い柾目	○	55	18	
W4	W-12	木製品	孔のある板	18	18-19間	SD1804	9.9	5.2	1.2		板目	○	55	26	
W5	W-10	木製品	栓	23	23	北	3.2	5.4～5.5		ほぼ完存	柾目	○	55	33	
W6	W-11	木製品	柄	23	23	北	14.2	2.5	2.2			○	55	33	

第８表　赤穂城下町跡　種実一覧

報告No.	実測No.	種別	器種	地区	区	遺　構	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	残存	木取り	分析	図版No.	挿図No.	備考
A1	-		松種実										55		

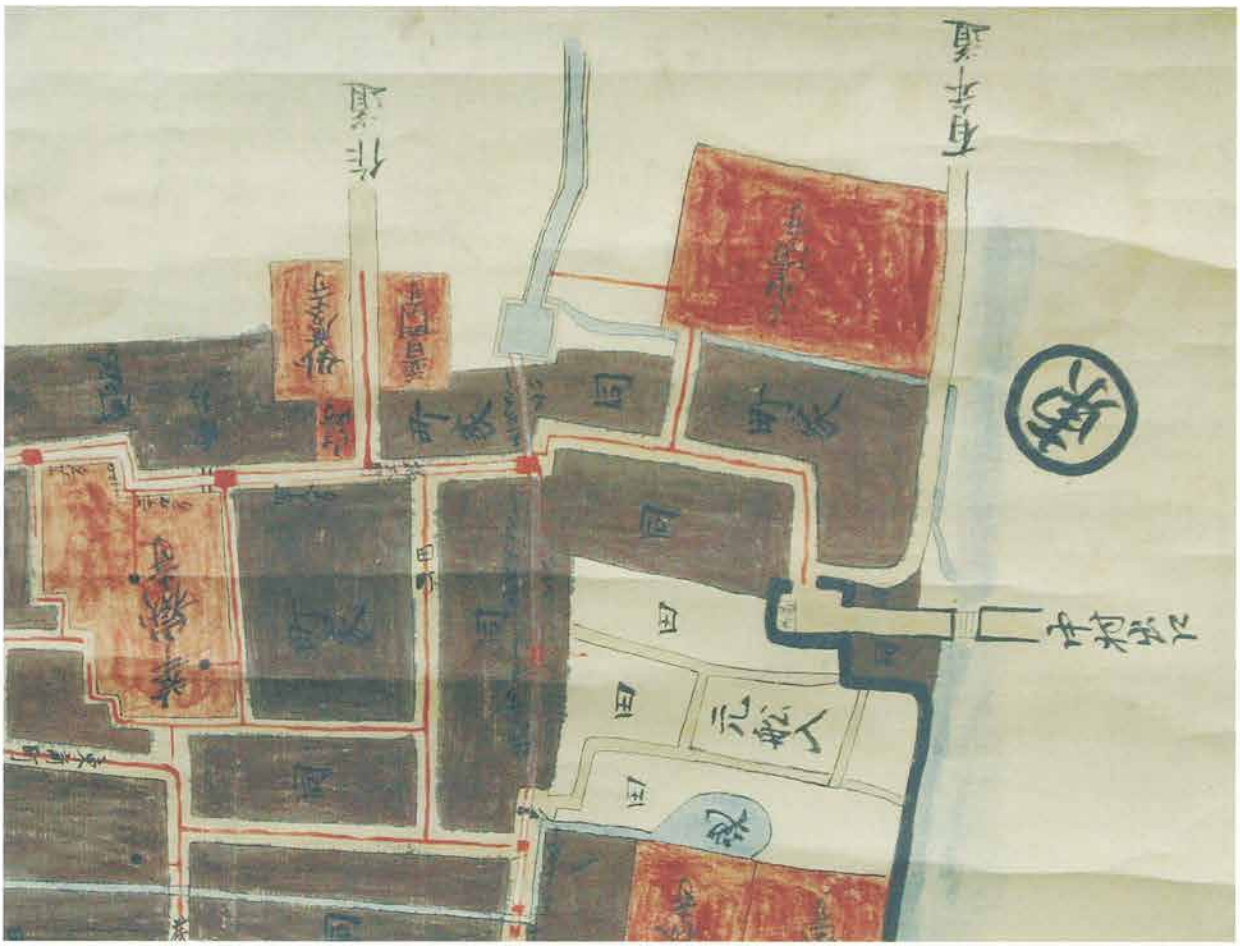
第９表　赤穂城下町跡　骨類一覧

報告No.	実測No.	種別	器種	地区	区	遺　構	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	残存	木取り	分析	図版No.	挿図No.	備考
B1	-	貝		14	14	包含層							55		
B2	-	巻貝		15	16	SD1502掘形							55		
B3	-	骨		15	15	包含層							55		
B4	-	獣骨		15	16	SD1502掘形							55		
B5	-	獣骨		15	16	SD1502掘形							55		

図版

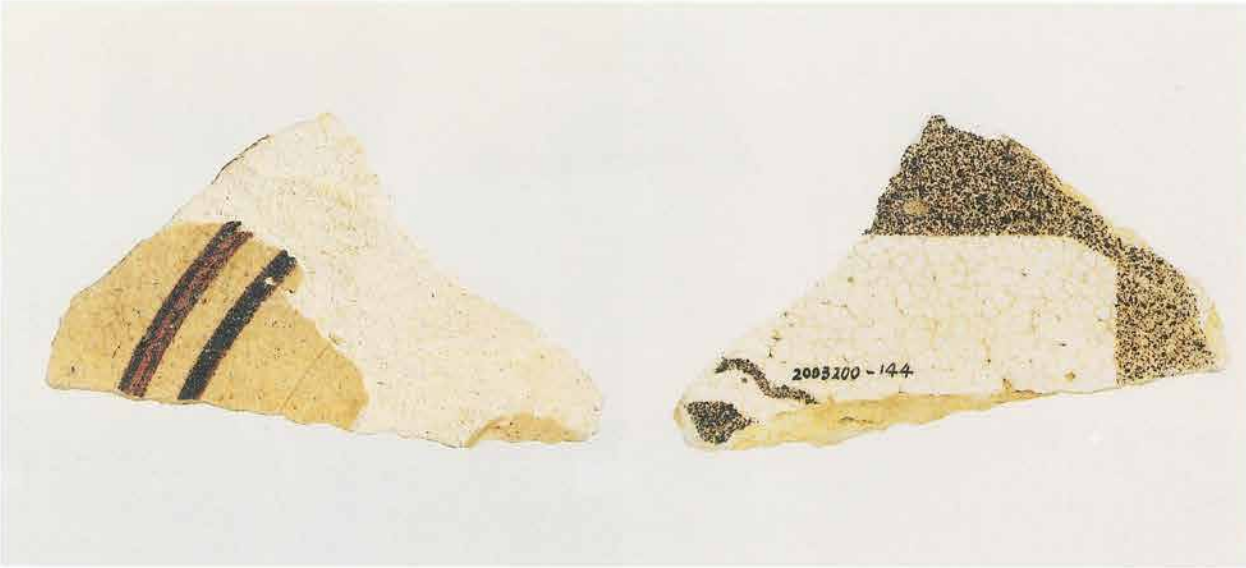
1．調査地全景

2．22区　百々呂屋裏大枡（北西から）

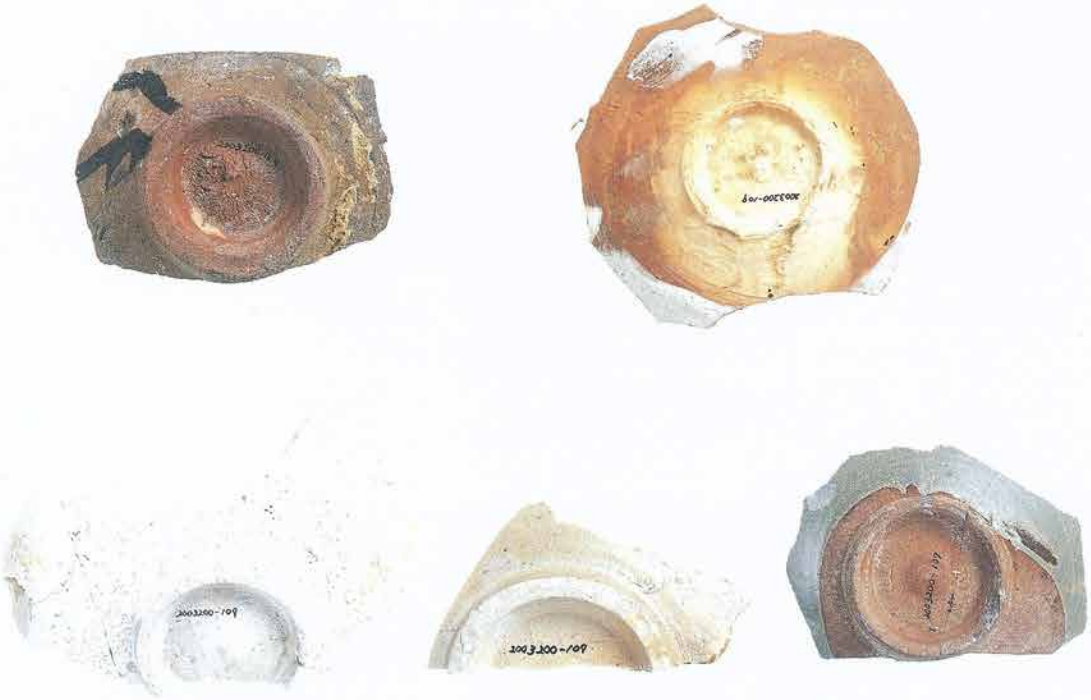


3．『赤穂城下水筋絵図』百々呂屋裏大桝周辺部分（赤穂市史編纂室蔵）

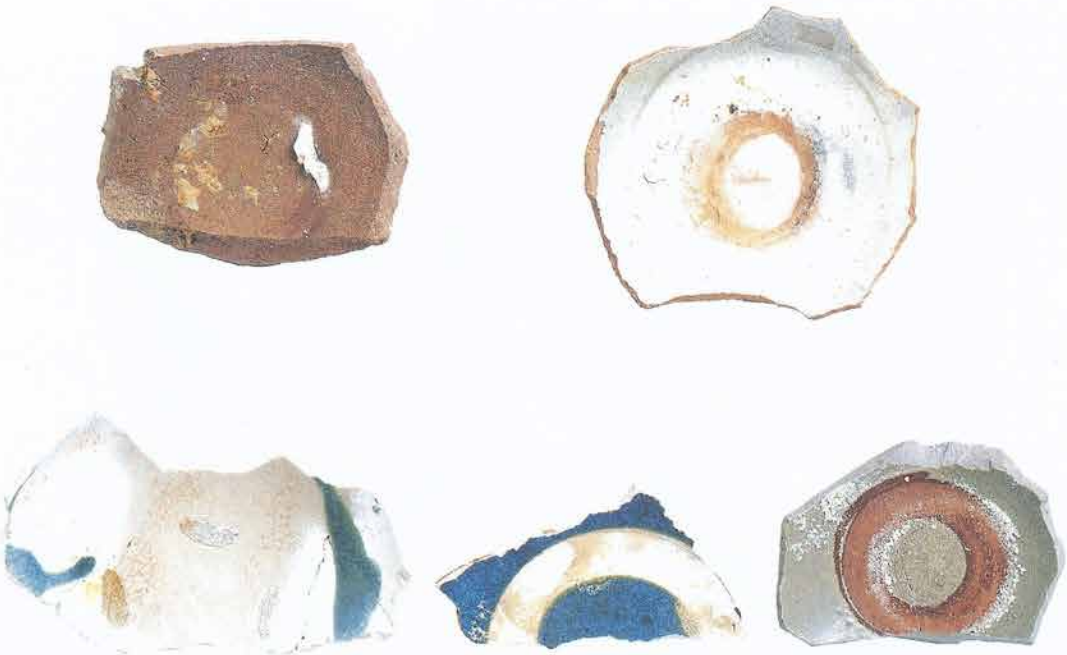
4．整備された歩道と百々呂屋裏大桝の路面表示（南西から）



上.22区　百々呂屋裏大桝出土肥前染付碗
中.23区　志野向付
下.18区　肥前唐津甕



18区　肥前唐津焼　外面



18区　肥前唐津焼　内面

5．SD1001（西から）

6．SD1001東石列（西から）

7．SD1001西石列（東から）

8．SD1001（南から）

9．完掘（南から）

10. SD1102・SD1101（南から）

11. 北壁土層（南から）

12. 完掘（南から）

13. SD1201（西から）

14. SD1201（北から）

15. 12区完掘（南から）

16. SD1301（南から）

17. SD1301（北から）

18. 13北区（北から）

19. 第1面（南から）

20. SK1401（西から）

21. 第2面（南から）

22. 東壁土層SK1401・SK1402（西から）

23. 第３面SD1403（南から）

24. SK1404（西から）

25. 全景（北から）

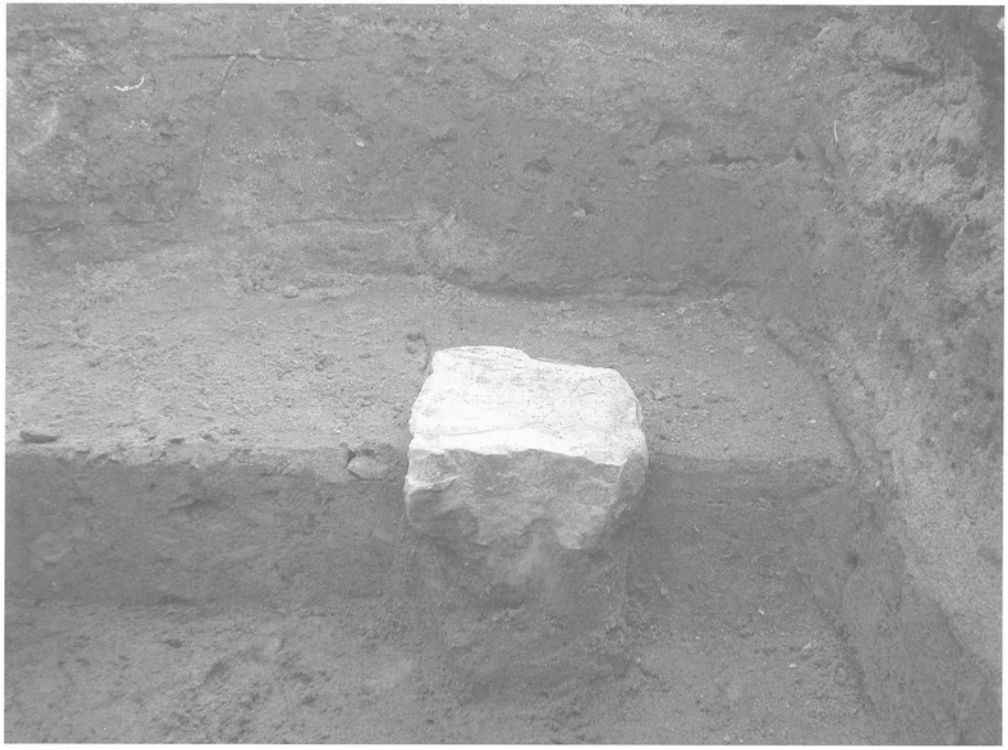
26. 東壁土層（西から）

27. 南壁土層（北から）

28. 第１面全景（南から）

29. 第１面南壁土層（北から）

30. 第１面SD1502　礎石検出状況（北から）



31. 第1面礎石断面（南から）

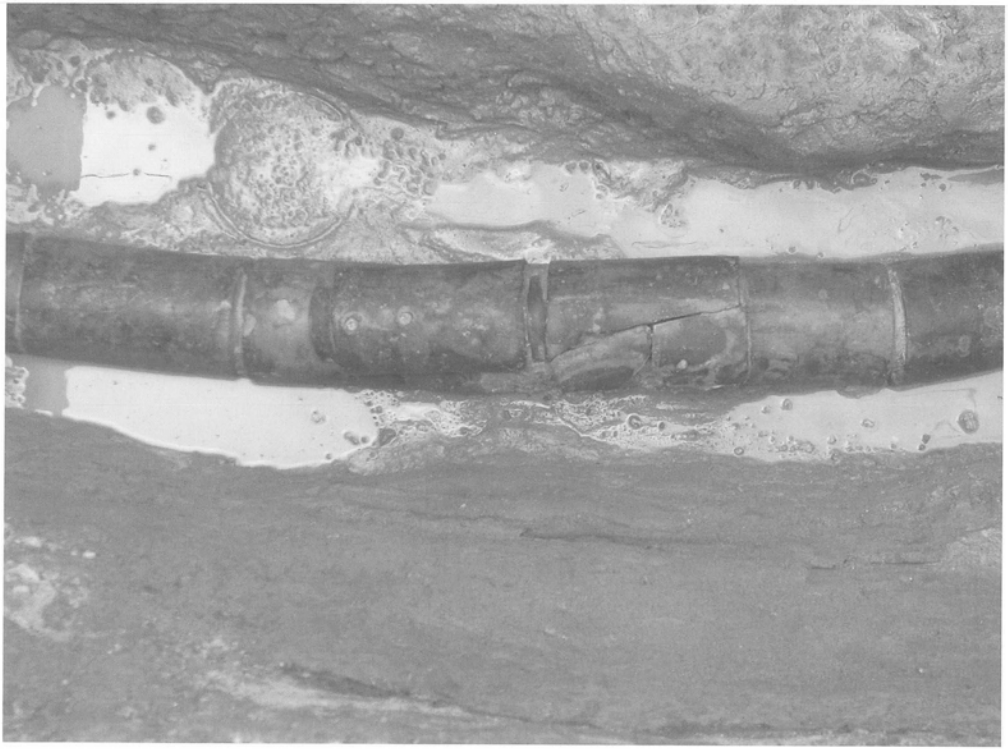
32. 第2面（南から）

33. 第3面（東から）

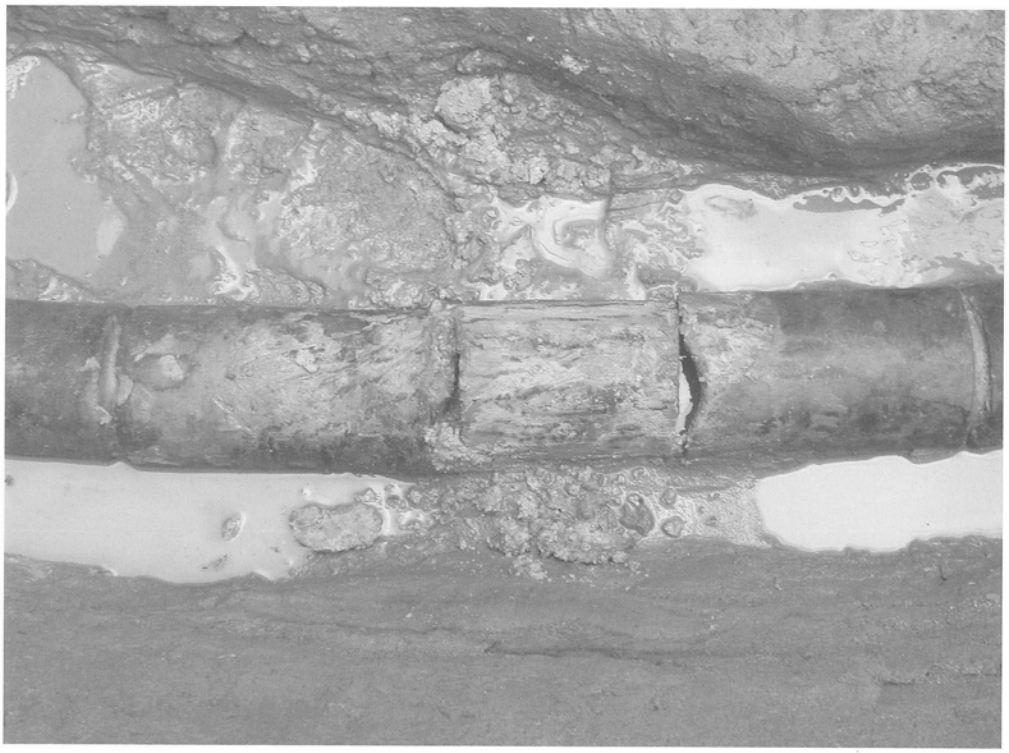
34. 第１面検出状況（北から）

35. 第１面SD1502
上水道瓦管検出状況
・第２面（東から）

36. 第１面SD1502 上水道瓦管
・第３面(東から)



37．SD1502
上水道瓦管接合部覆瓦



38．SD1502　上水道瓦管接合部

39．南壁土層（北から）

40. 第１面検出状況（北から）

41. 第１面SK1501（南から）

42. 第１面（北から）

43. 第1面SD1502（東から）

44. 第1面SD1503（北から）

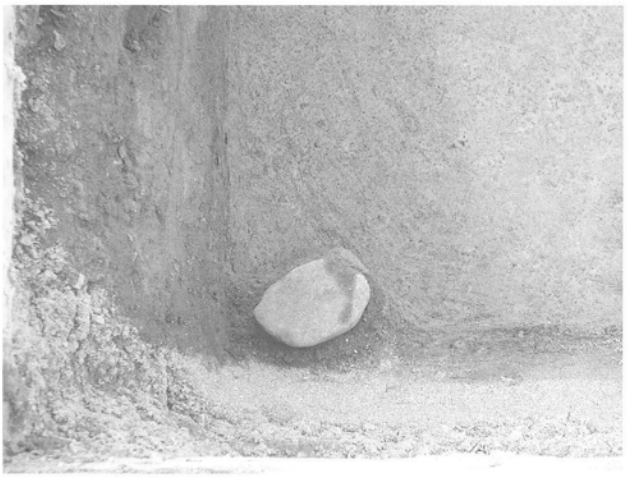
45. 第3面（東から）

46. 第3面（北から）

47. 第3面石列（東から）

48. 南壁土層（北から）

49. 第2面（北から）



50. 第2面礎石（東から）

51. 第1面（北から）

52. 第1面（西から）

53. 第2面（北から）

54. 第2面・第3面（西から）

55. 南壁土層（北から）

56. 東壁土層（西から）

57. 第1面（南から）

58. 第2面（南から）

59. 南壁土層（北から）

60. 全景（北東から）

61. SD1802（東から）

62. SD1802（西から）

63. 最上層全景（北から）

64. 最上層集石（東から）

65. 20区全景（北から）

66. 20区南壁（北から）

67. 21区全景（南から）

68. 調査前（北東から）

69. 百々呂屋裏大桝検出状況（西から）

70. 百々呂屋裏大桝（西から）

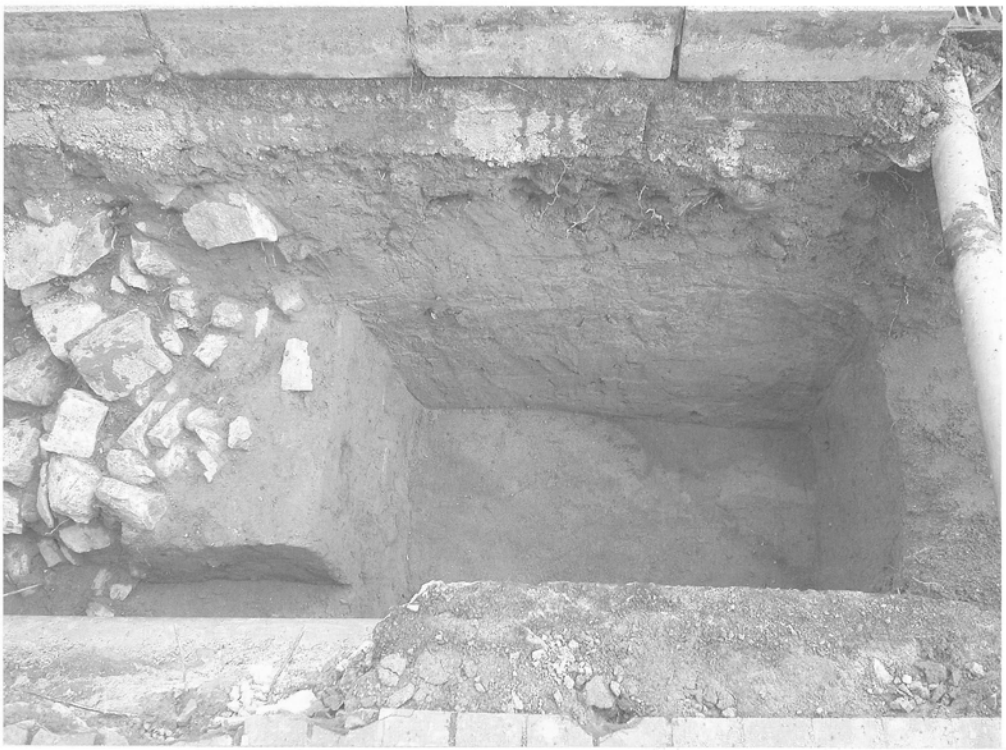
71. 百々呂屋裏大桝（北西から）

72. 百々呂屋裏大桝南面（北から）

73. 百々呂屋裏大桝東面（西から）

74. 百々呂屋裏大桝東面（南から）

75. 百々呂屋裏大桝東面（北から）



76. 百々呂屋裏大桝南側（西から）

77. 百々呂屋裏大桝南東裏込石
（北東から）

78. 百々呂屋裏大桝南東裏込石
（南西から）

79. 百々呂屋裏大桝東側
（南東から）

80. 百々呂屋裏大桝東側（北東から）

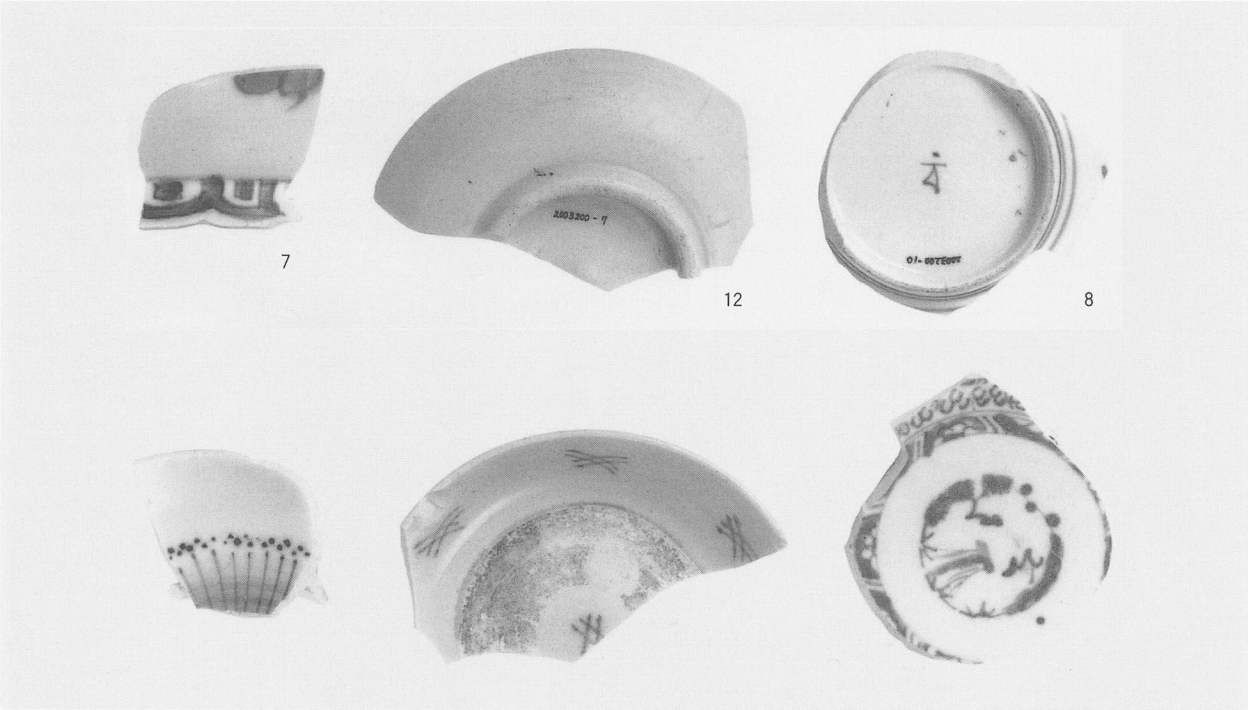
81. 百々呂屋裏大桝北東側
（南東から）

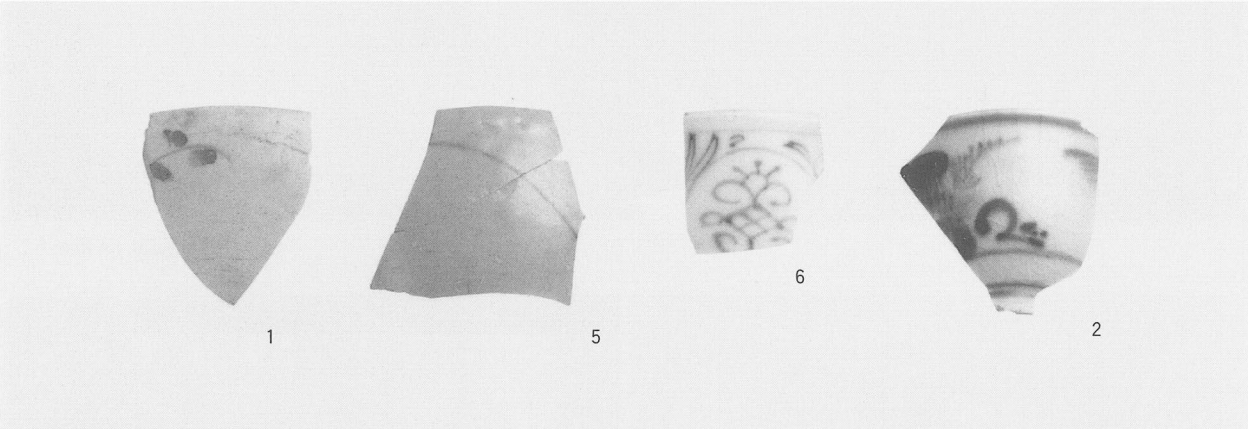
82. 百々呂屋裏大桝東側（南から）

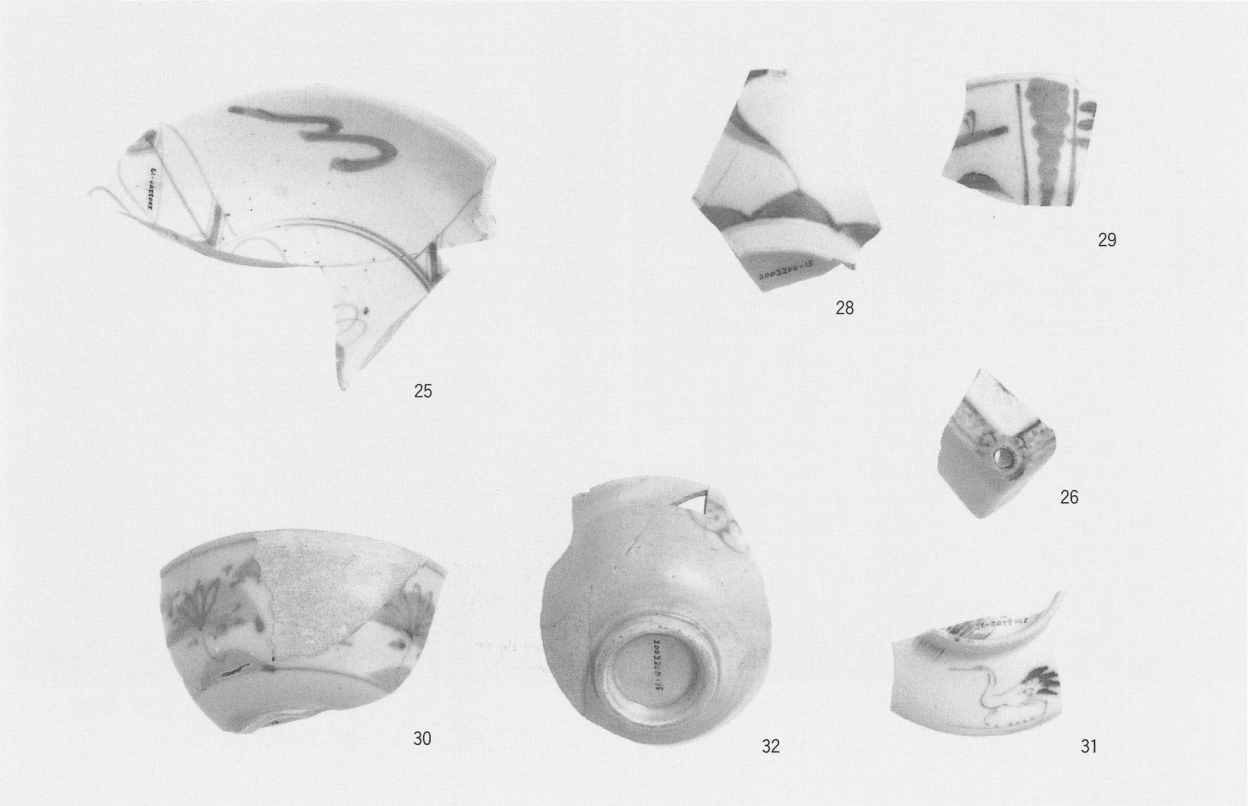
83．赤穂上水道（南東から）

84．赤穂上水道（南から）

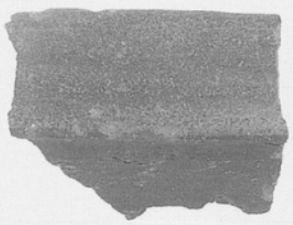
85．赤穂上水道（南西から）

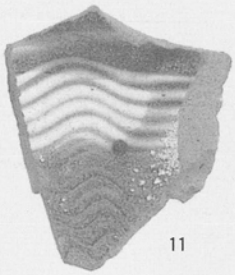


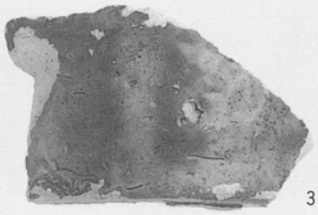


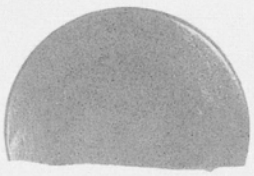


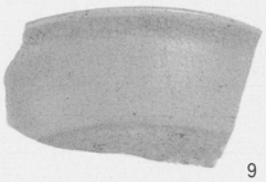
10区・12区出土遺物

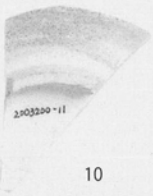

15

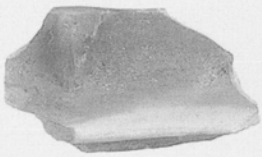

11


3


14


9


10


143

4

16

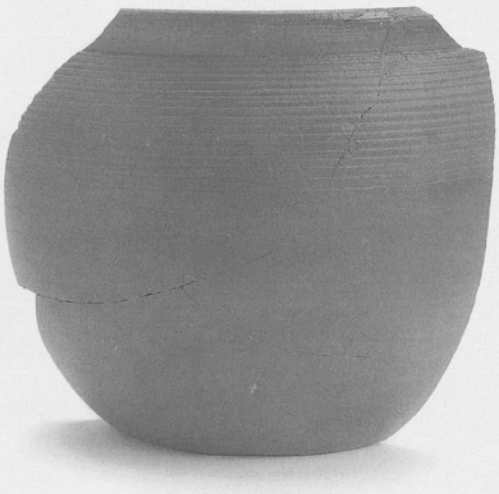
101

27

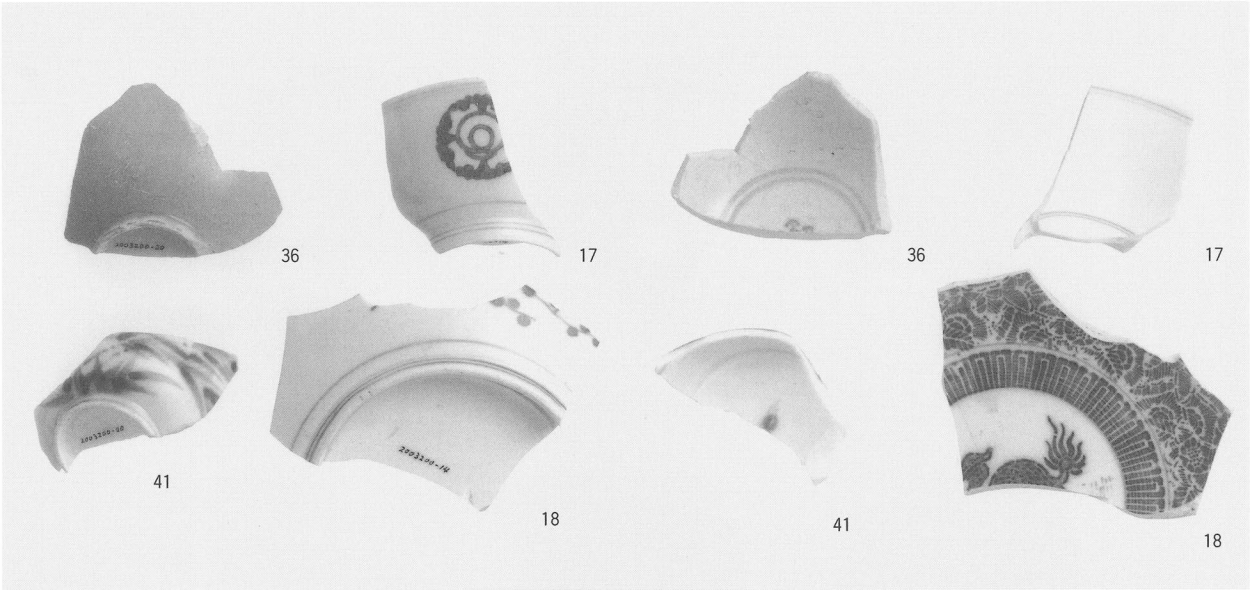
33

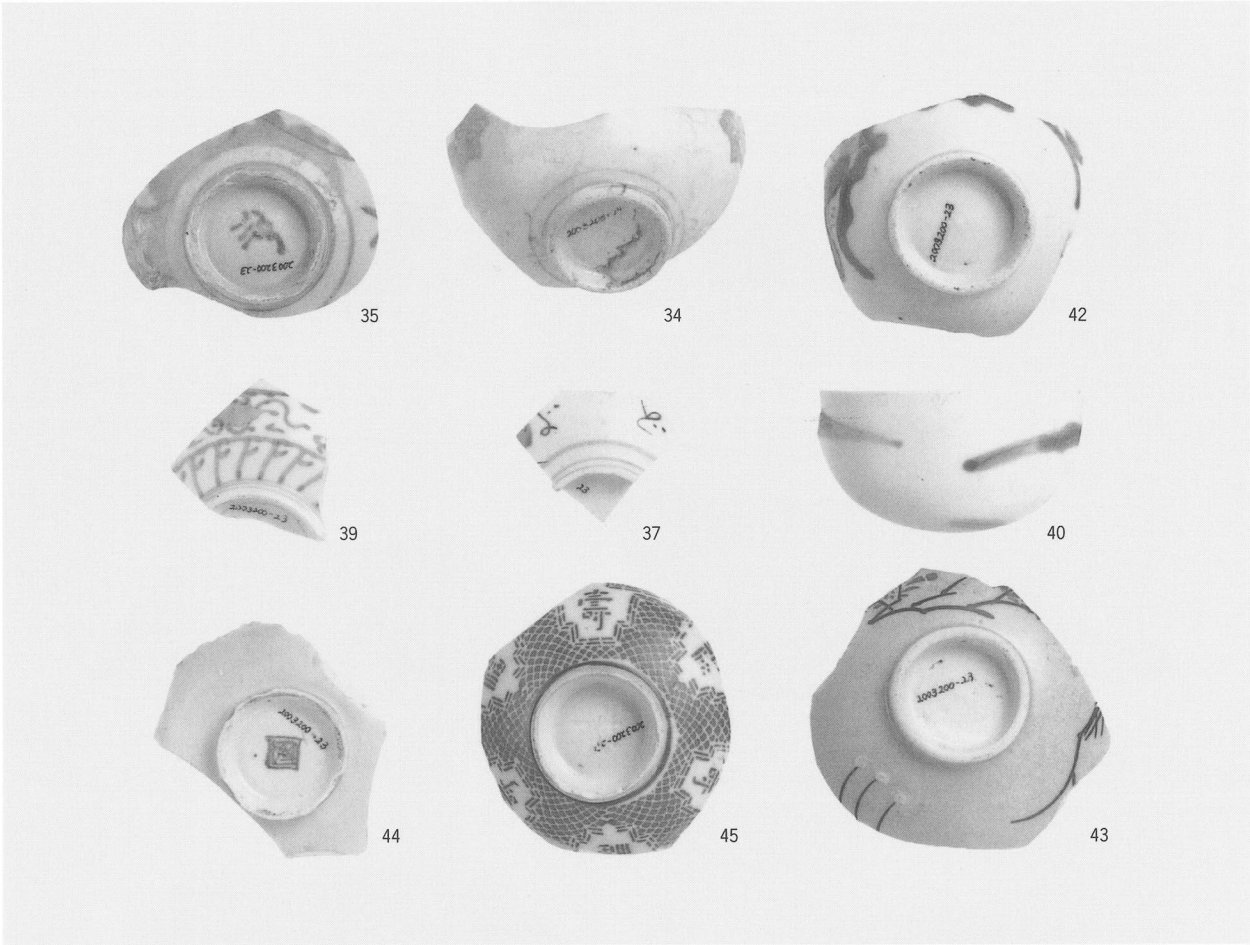
13

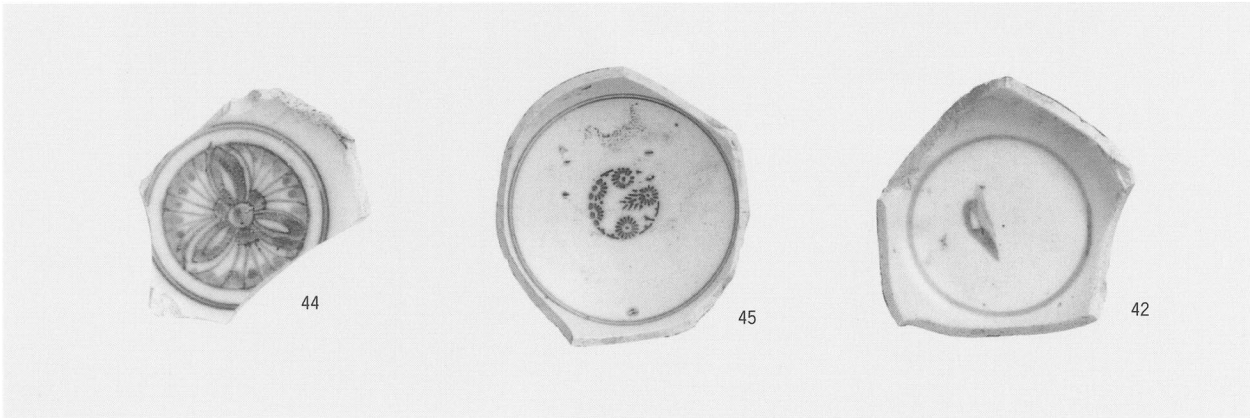
21


23

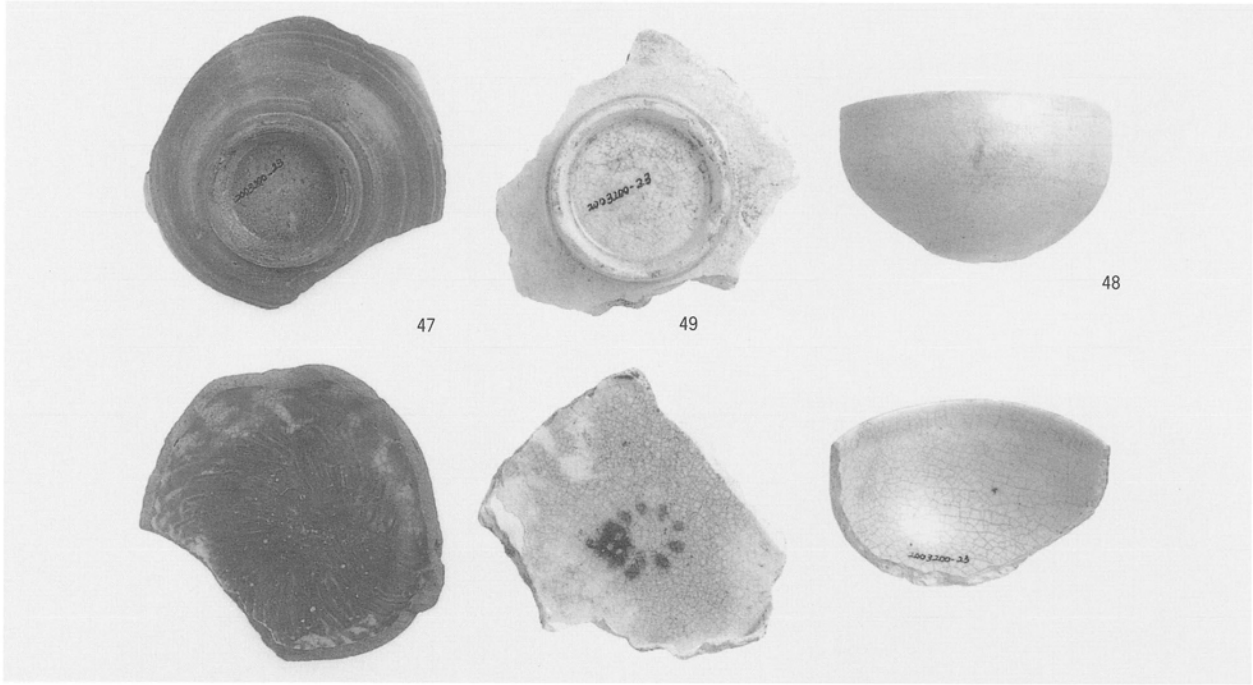
10区・12区・15地区出土遺物

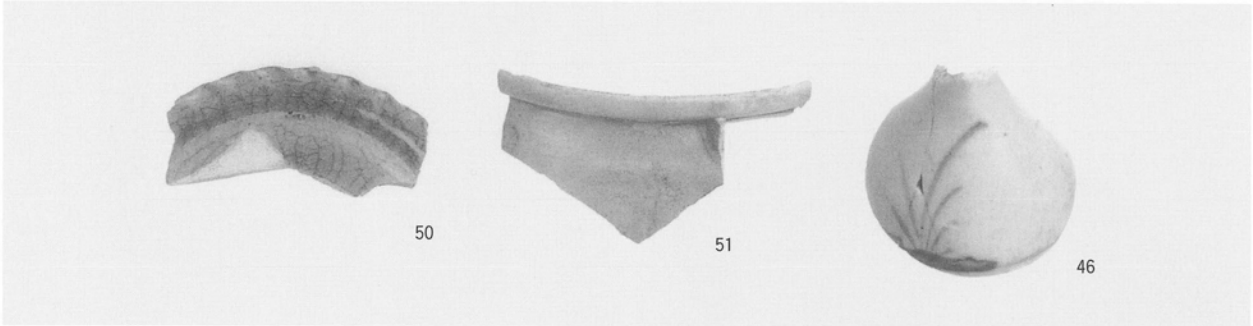


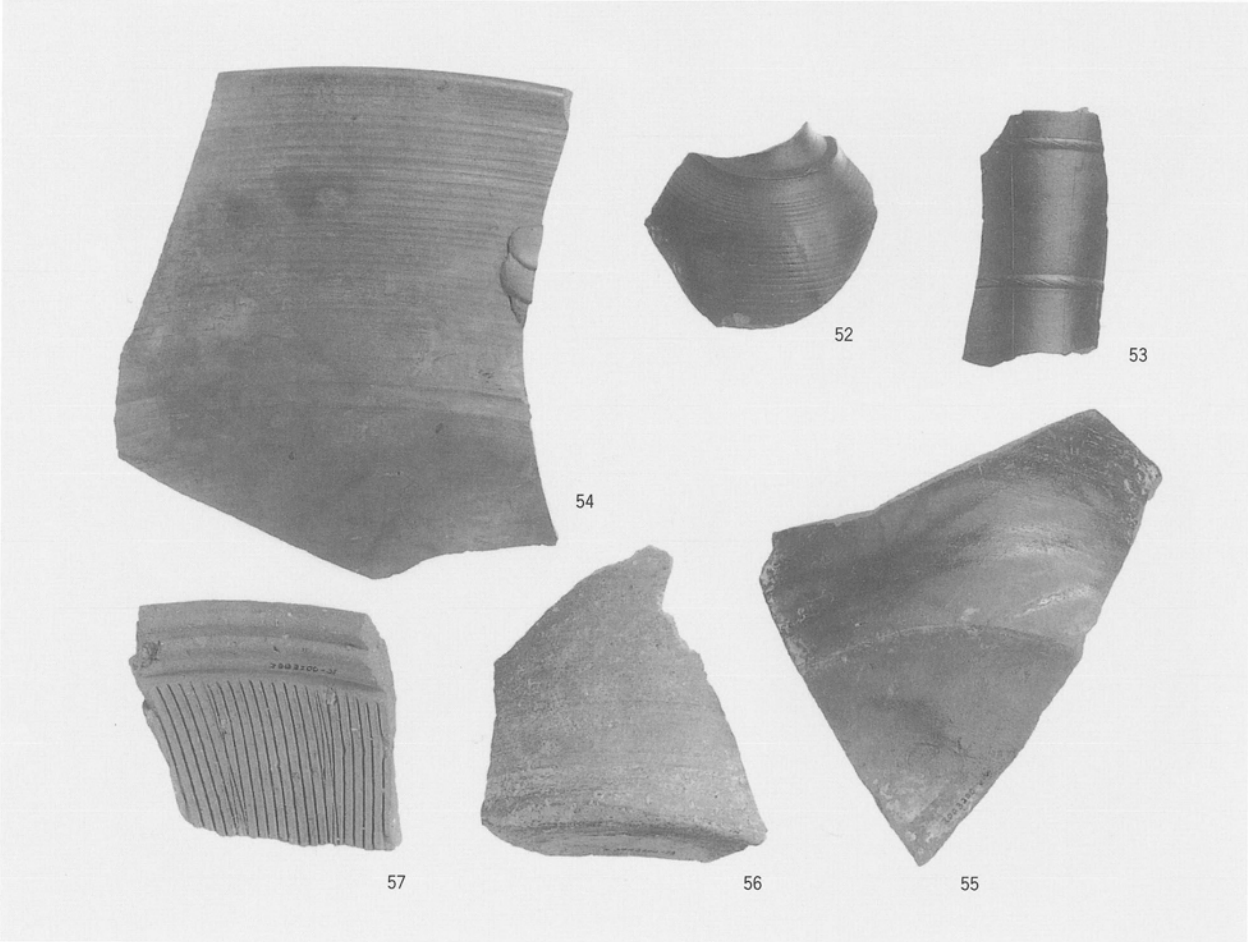




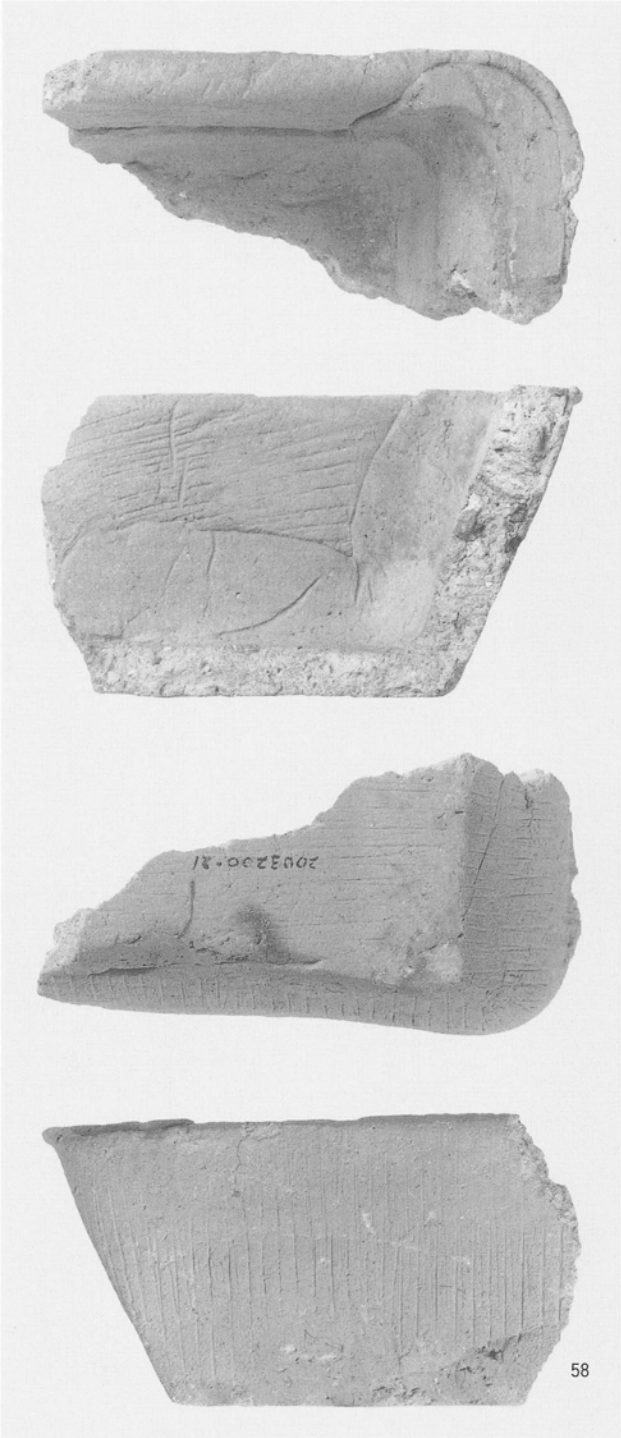
11区・13地区出土遺物





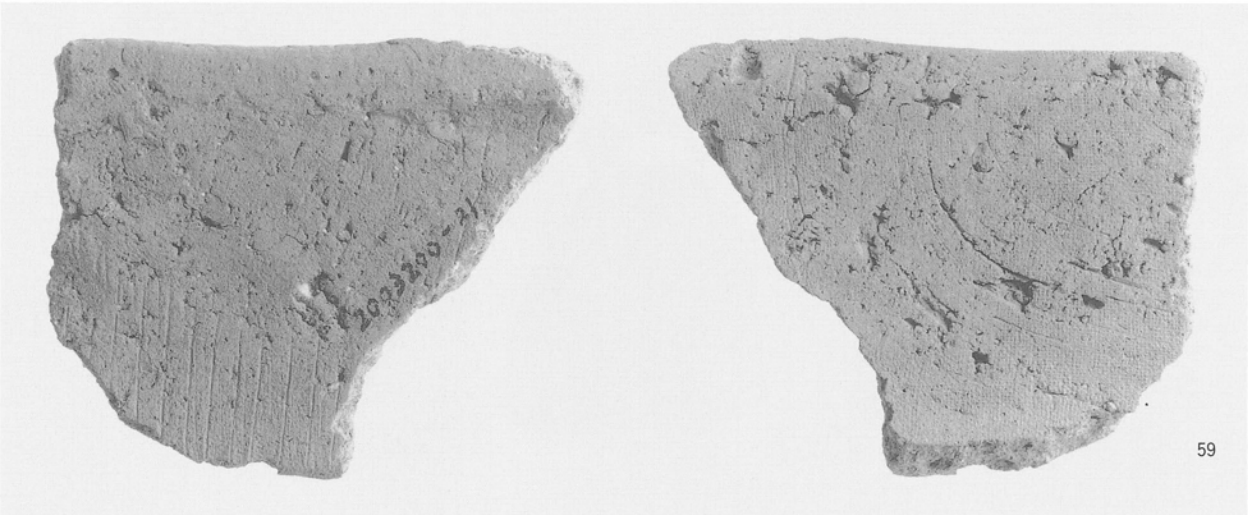


13地区出土遺物



58

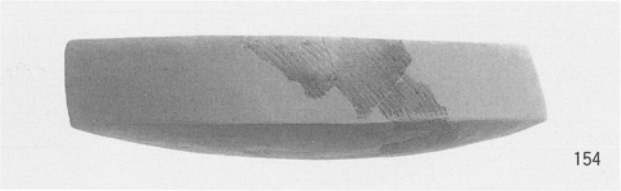
60

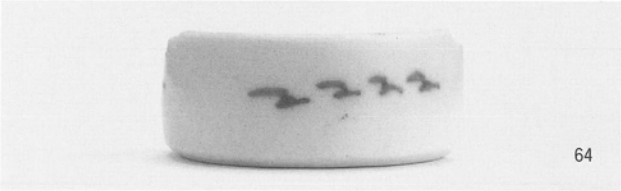


59

13地区出土遺物

38

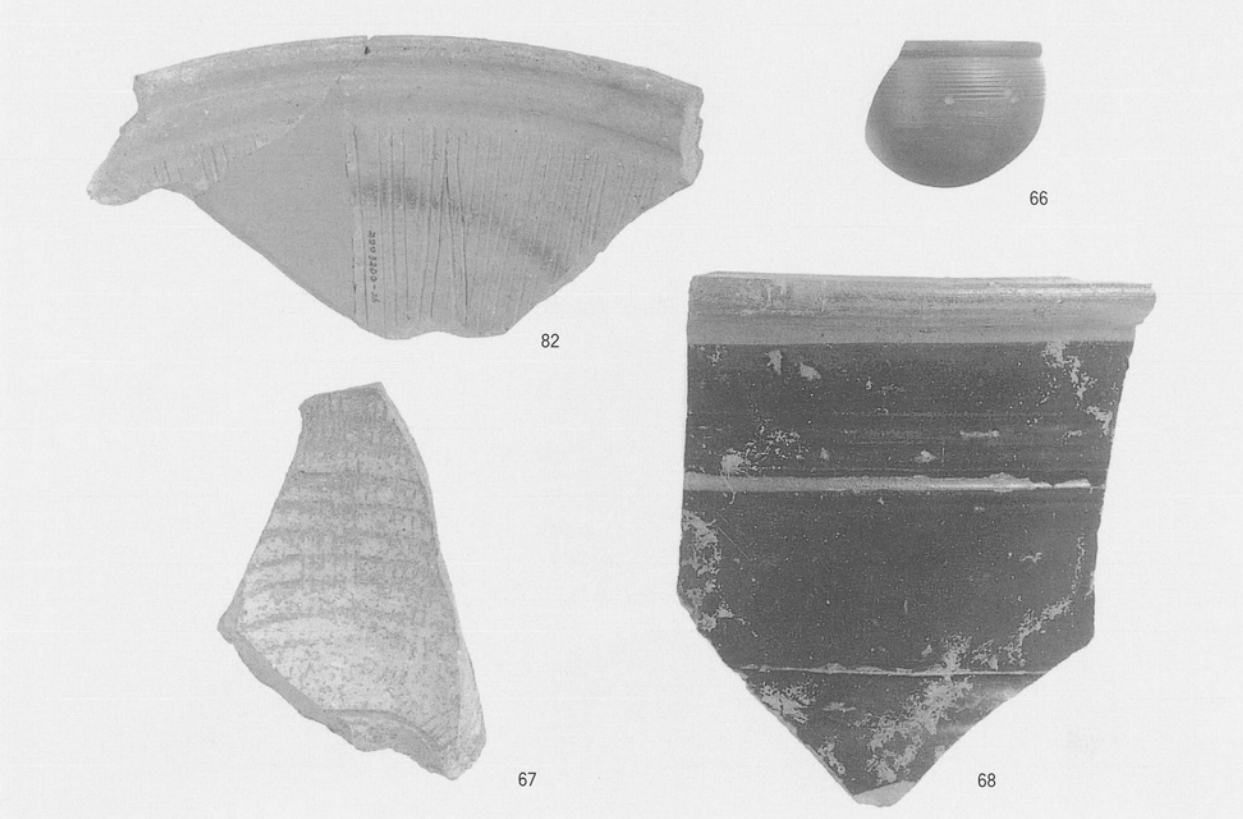

154


64

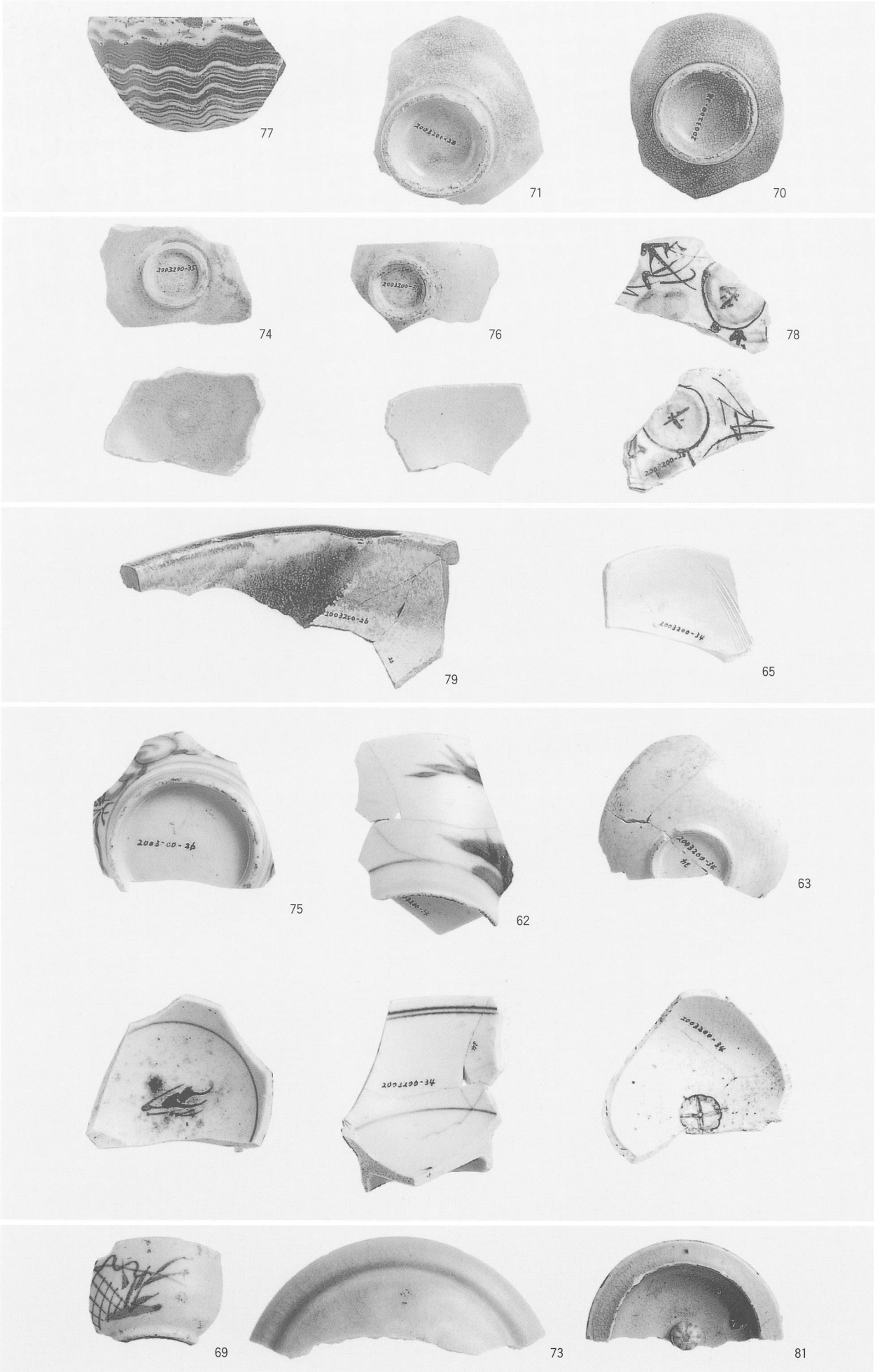
87

80

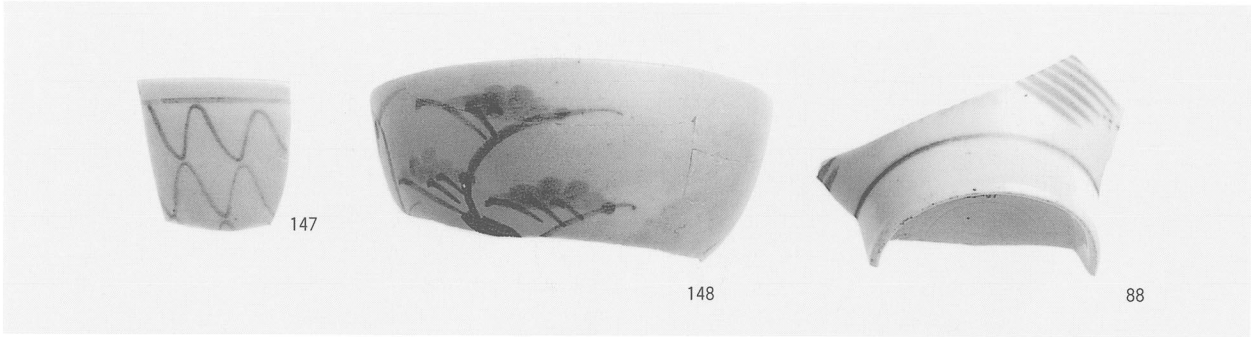
97

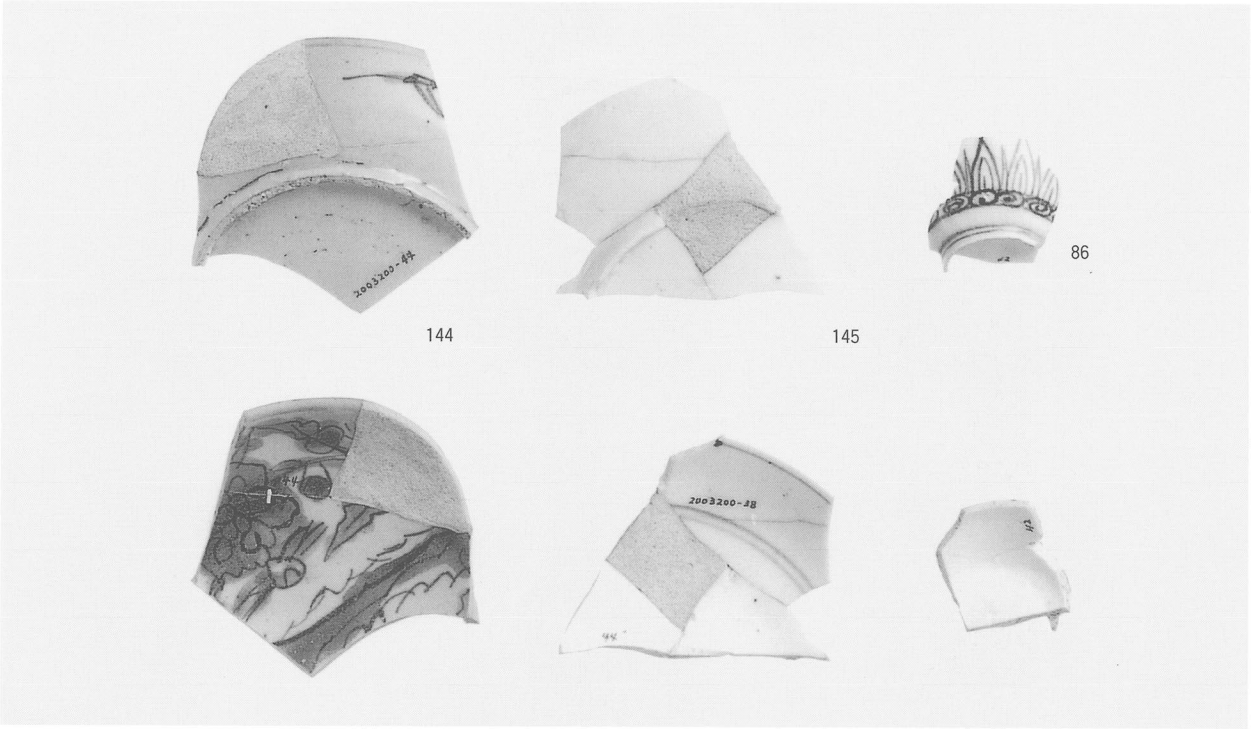


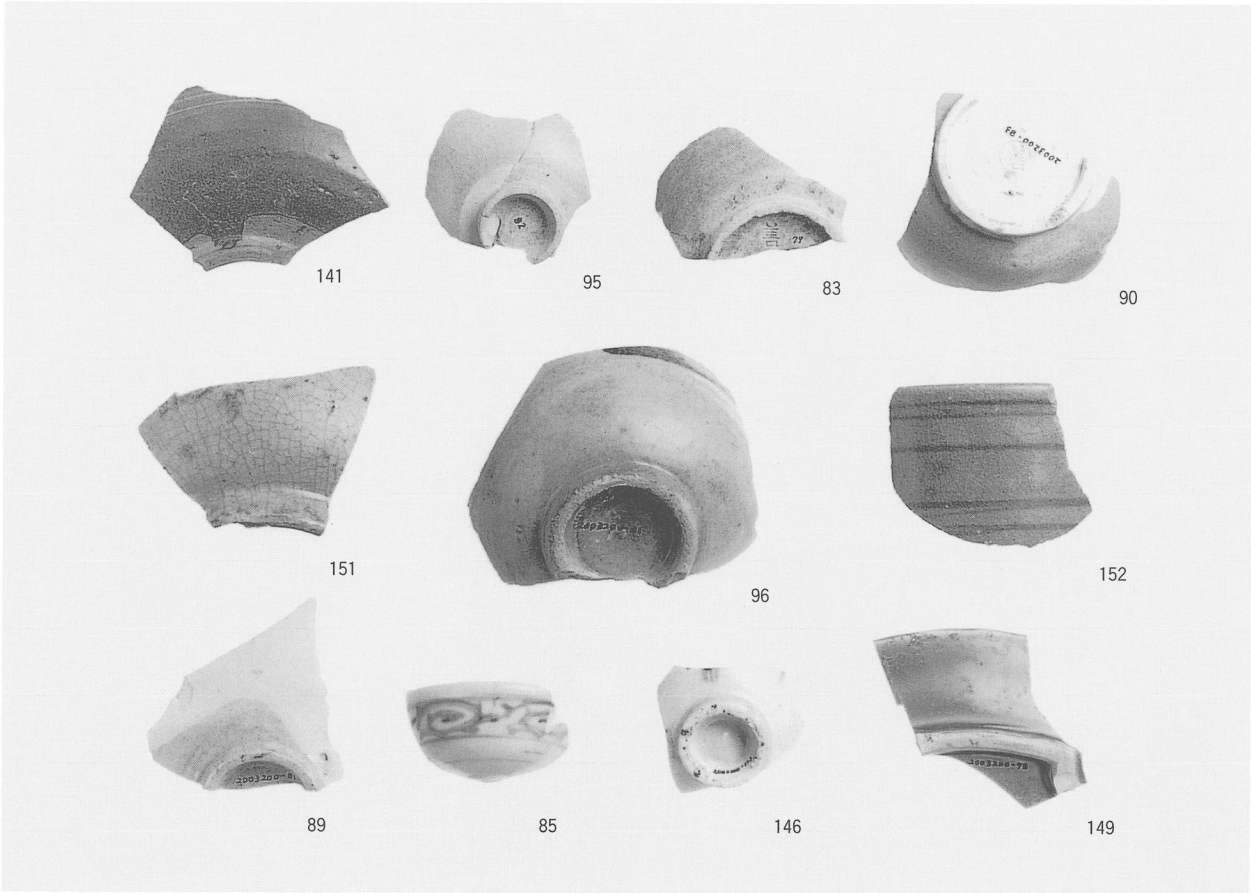
14区・13地区・15地区出土遺物



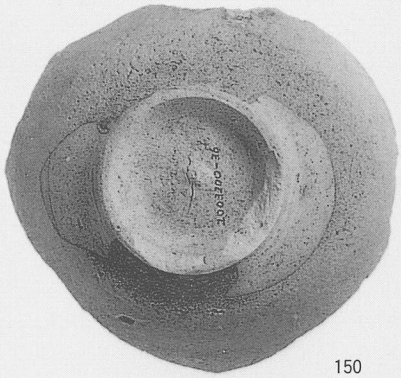
14区出土遺物

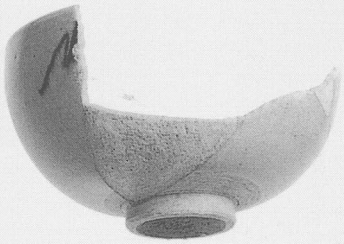


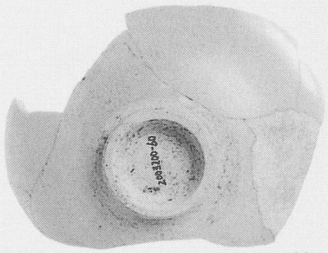


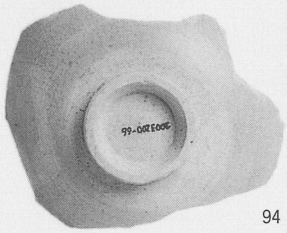


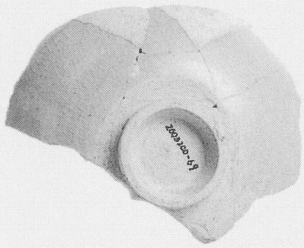
15地区出土遺物

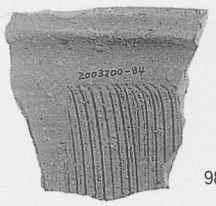

150

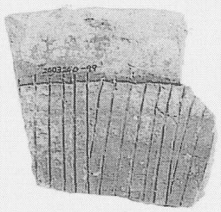

91

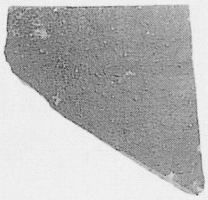

92

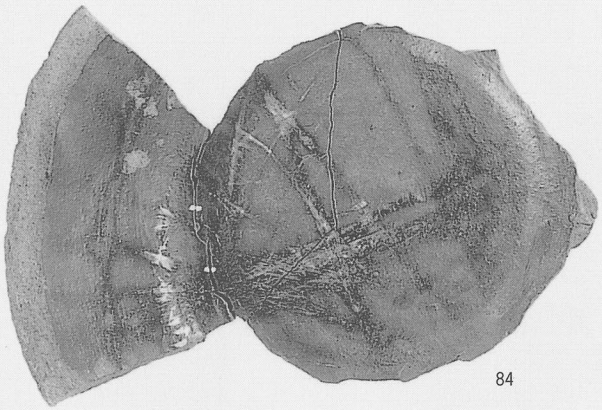

94

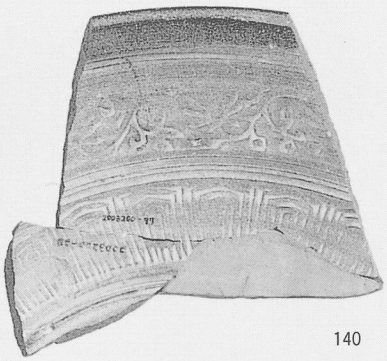

93

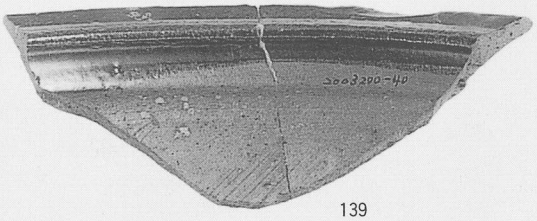

98

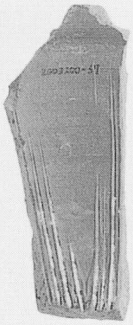

142

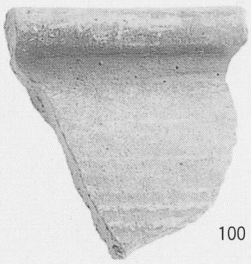

153


84

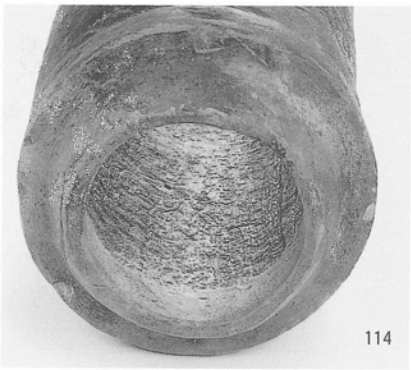

140

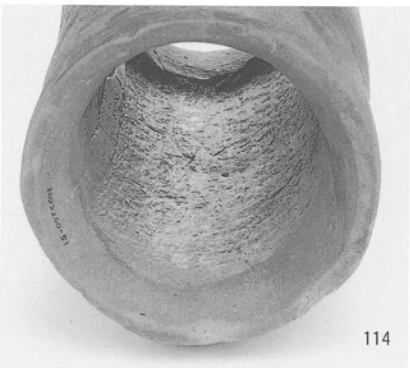

139


99


100

15地区出土遺物


114


114

116

114

115

116

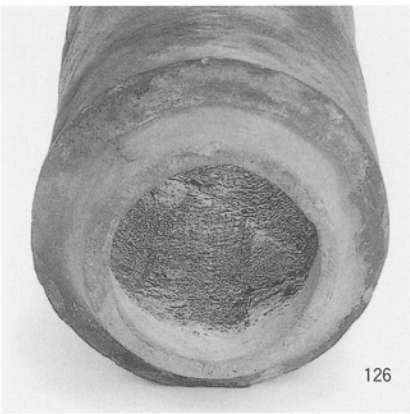
118

117

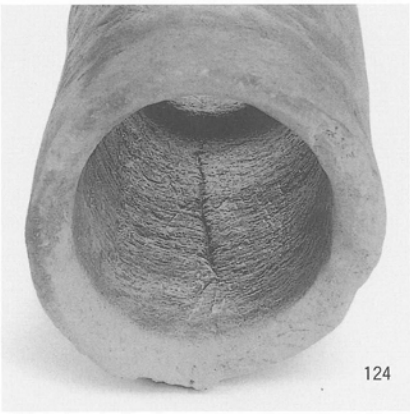
117

117

15地区出土瓦管（1）


126

126


124

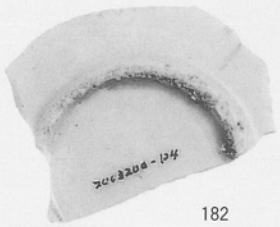
126

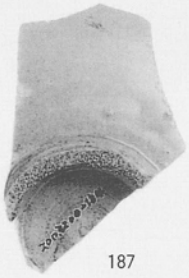
137

124

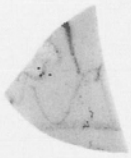
138

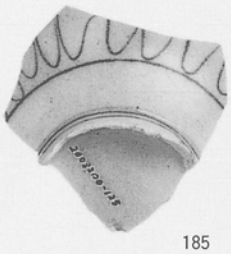
15地区出土瓦管（2）

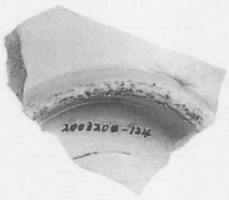

182


187

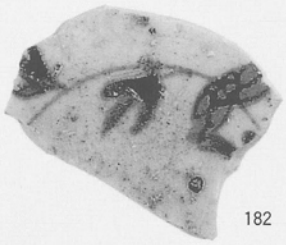
186

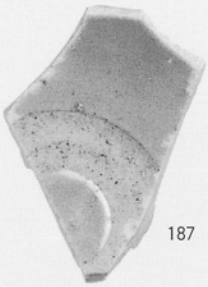

184

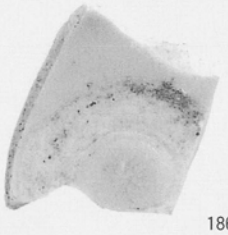

185


183

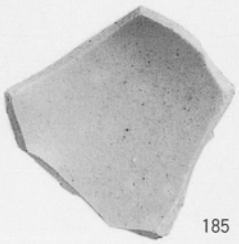
188

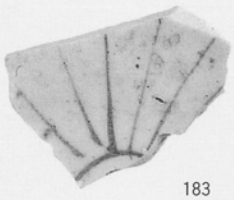

182

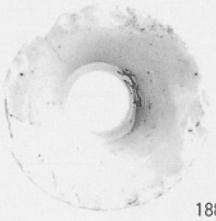

187


186

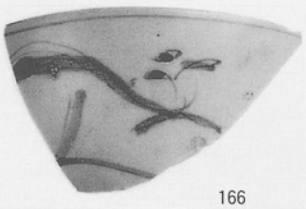
184

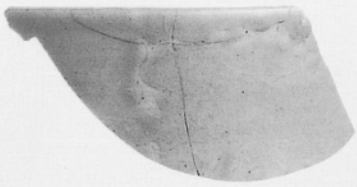

185

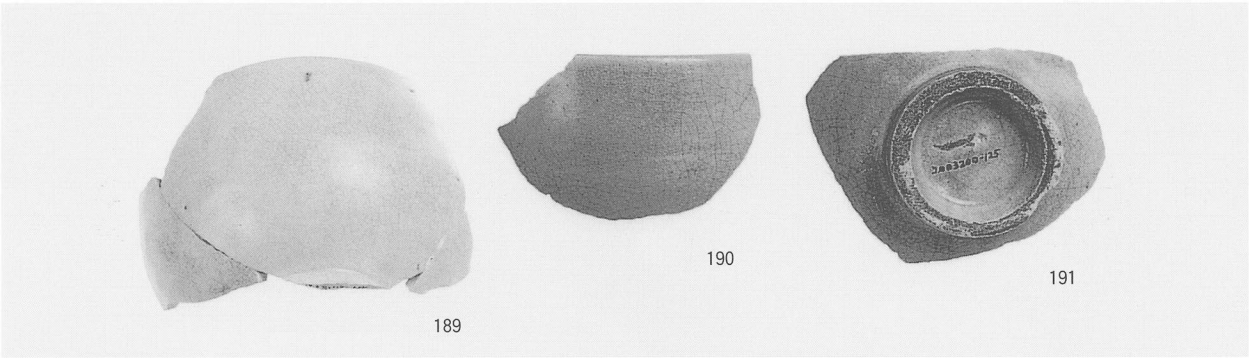

183

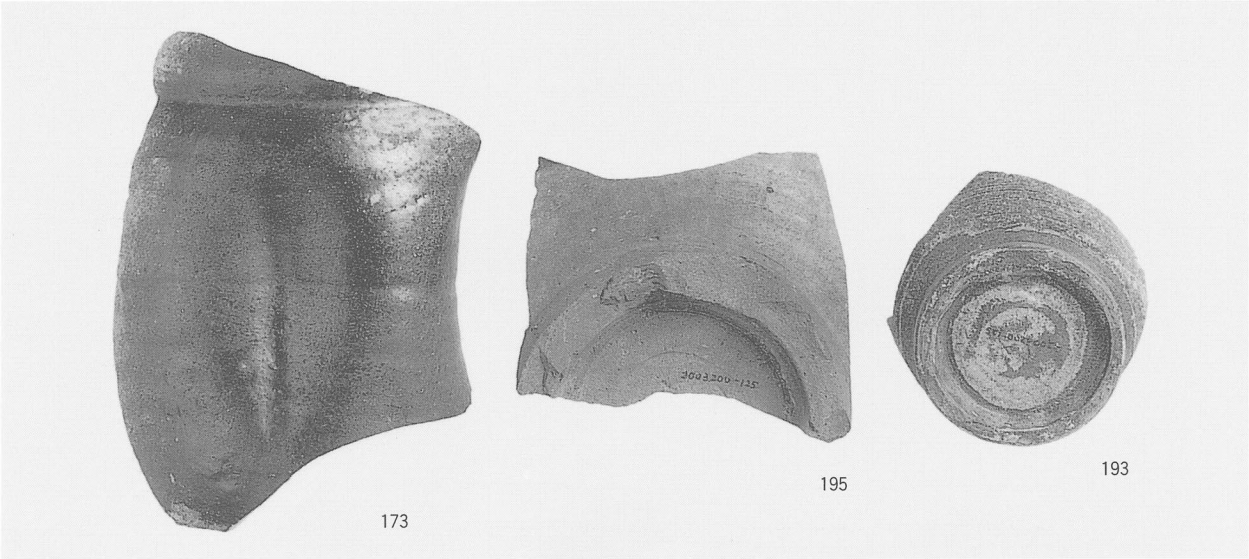

188

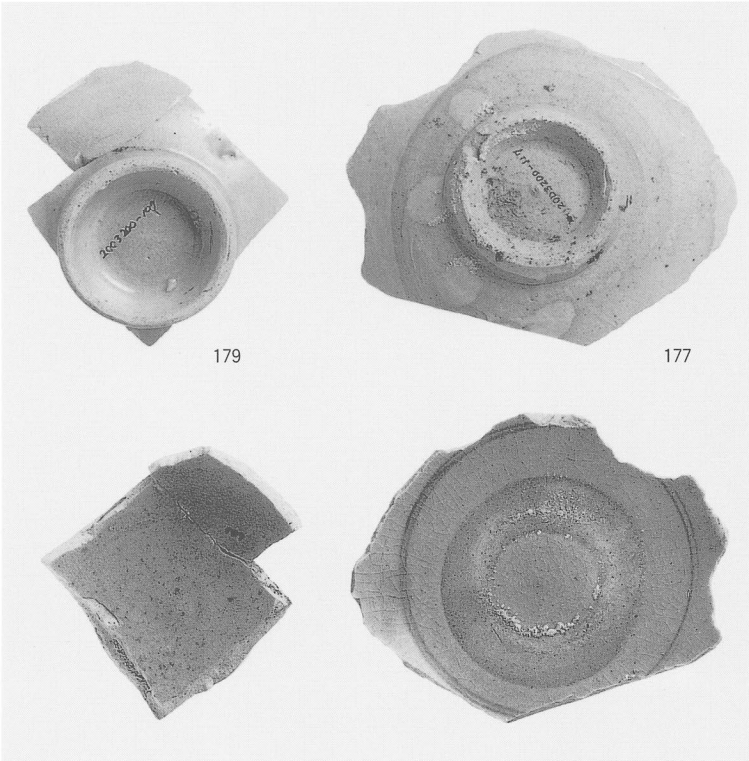
164

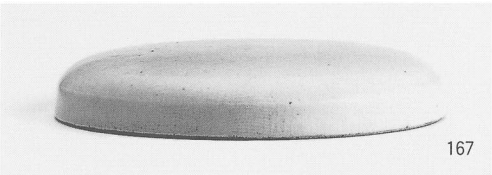

166

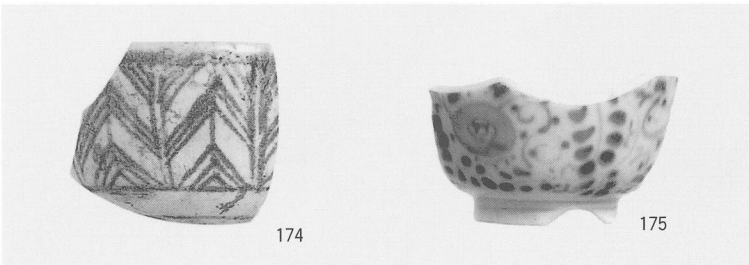

159











18地区出土遺物

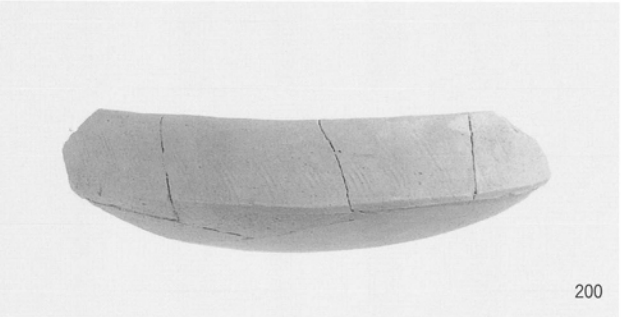
168

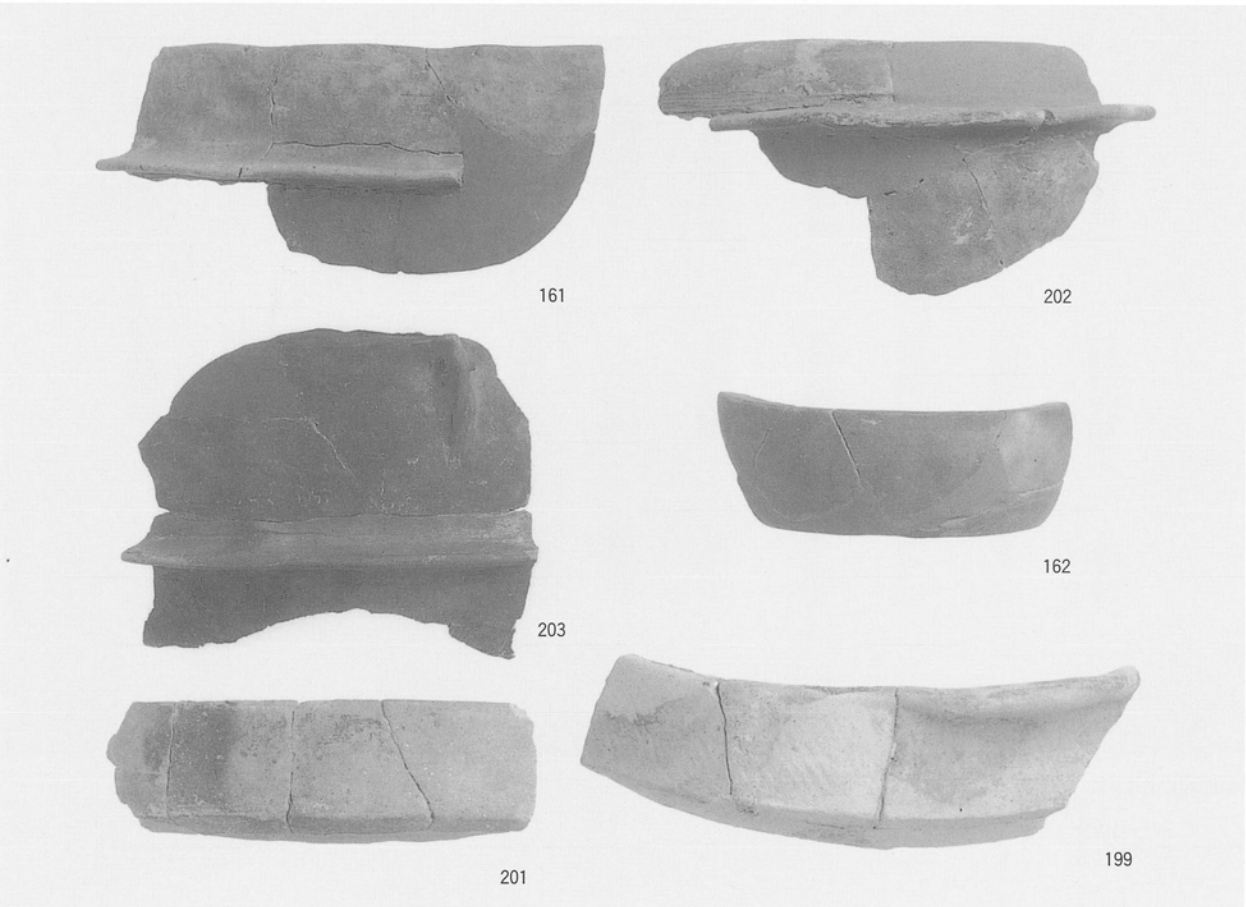
196

197

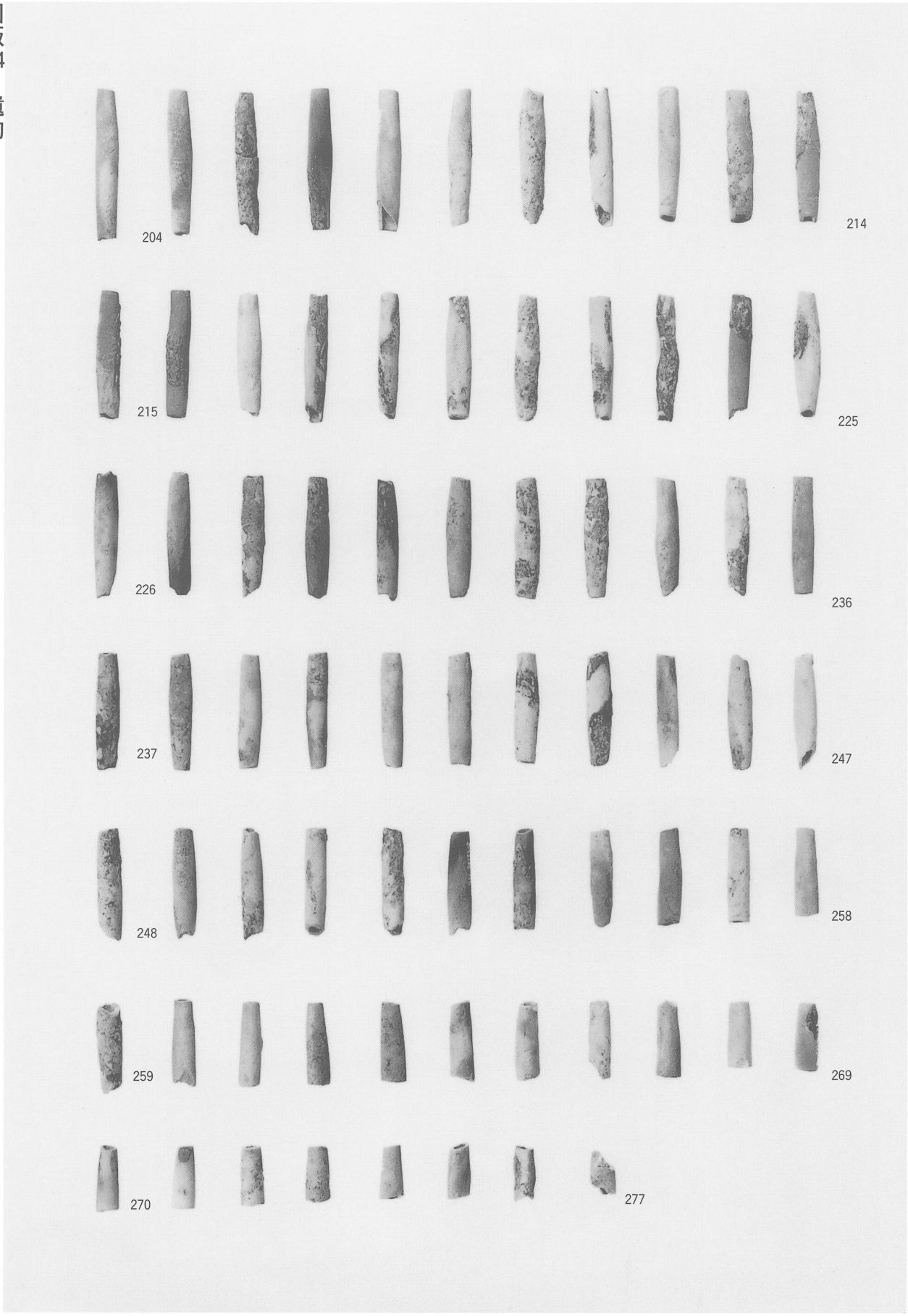
198

157

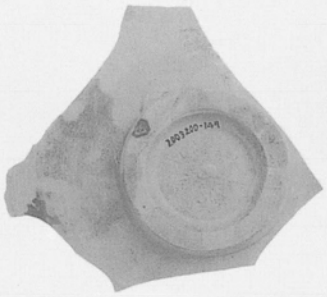

200



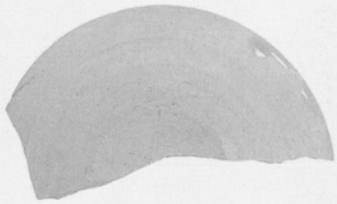
18地区出土遺物



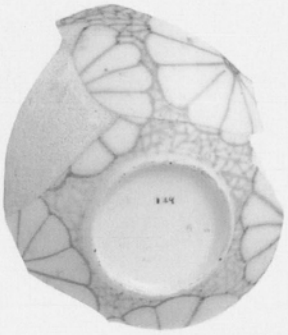
18地区出土土錘



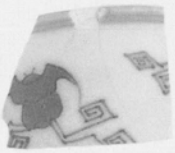
293



290



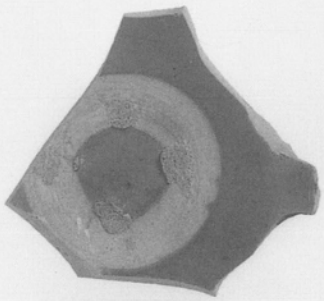
292



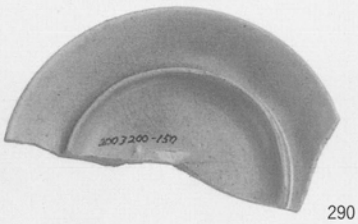
282

281

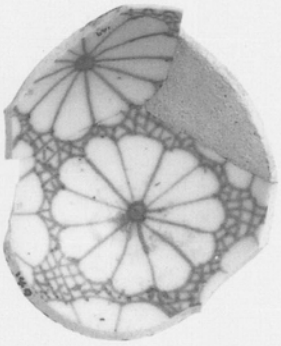
283



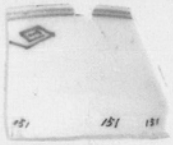
293



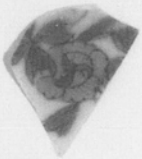
290



292



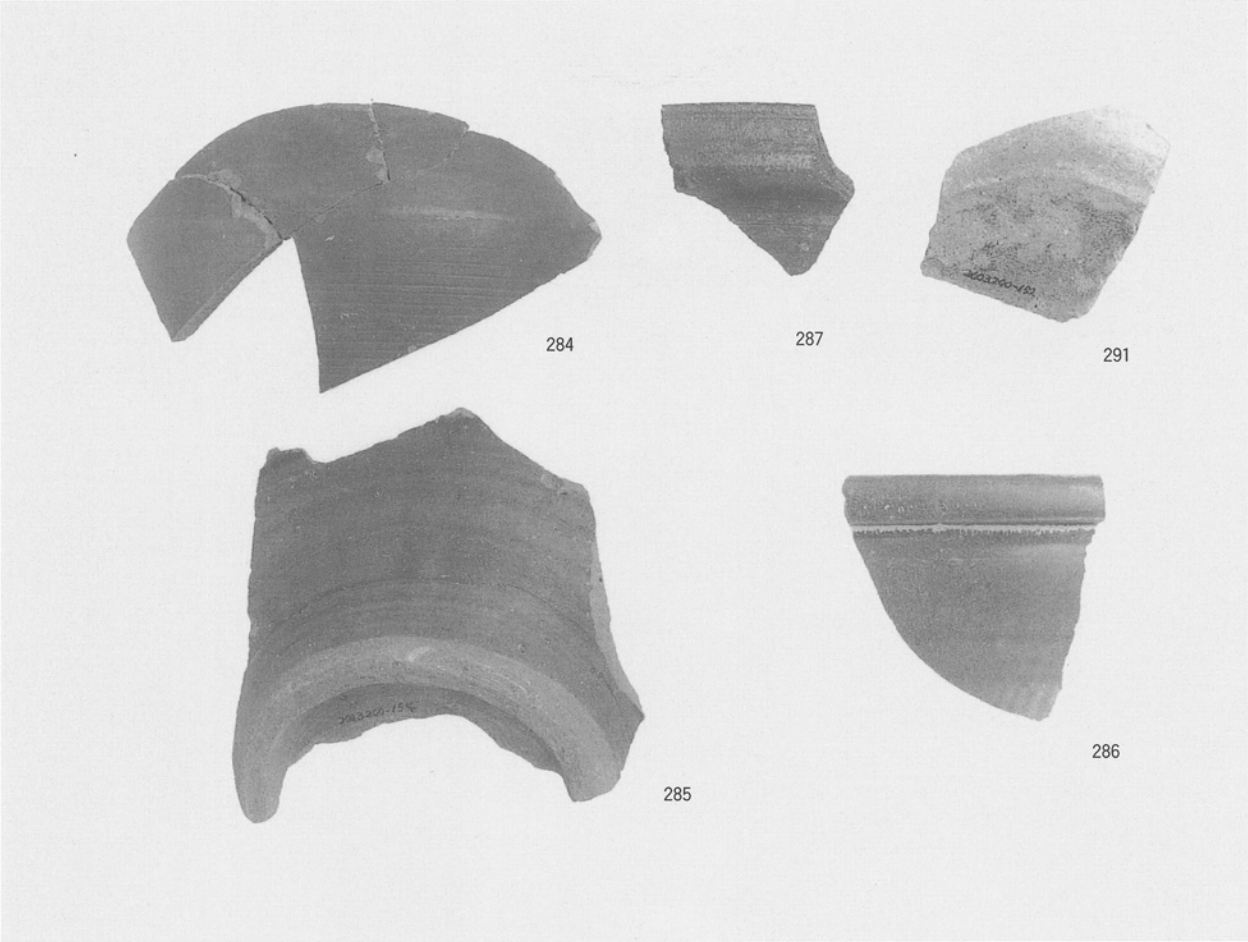
282



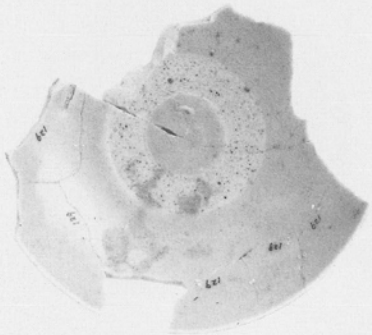
281

283

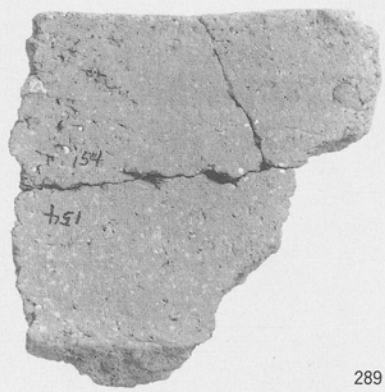
22区出土遺物（1）



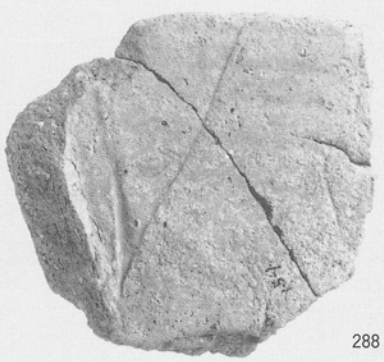
22区出土遺物（2）



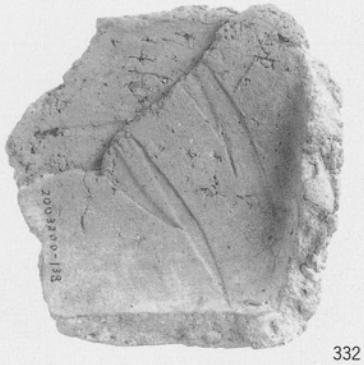
178



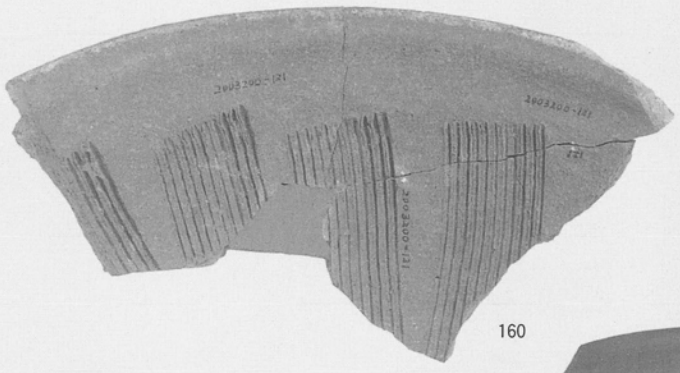
289



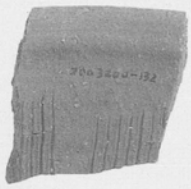
288



332

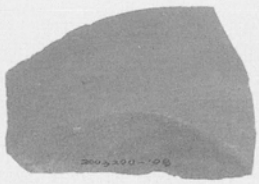


160



278

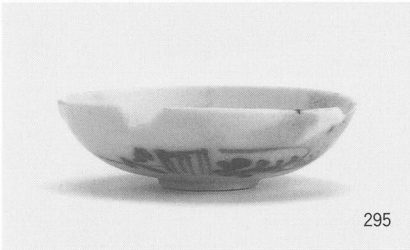
181

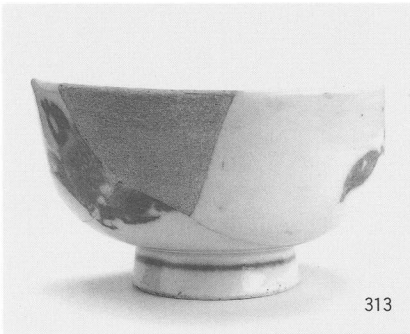


165

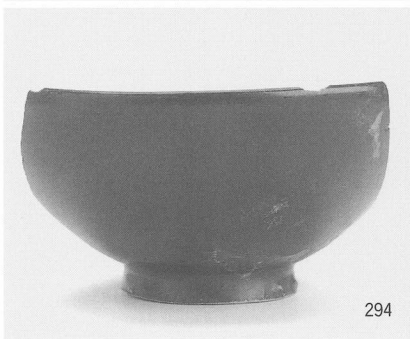
18地区・22区・23区出土遺物

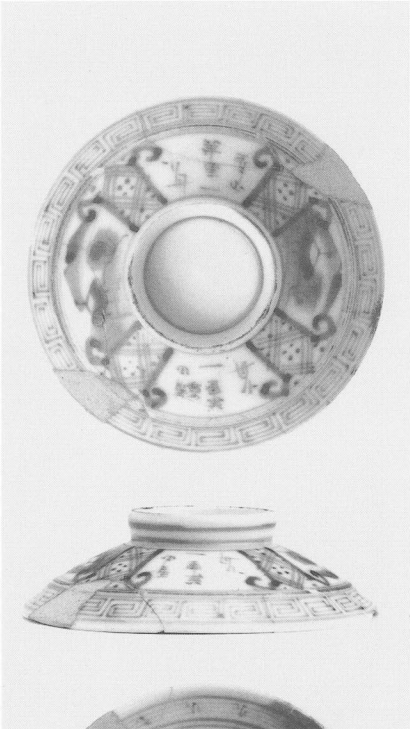
309


295


313

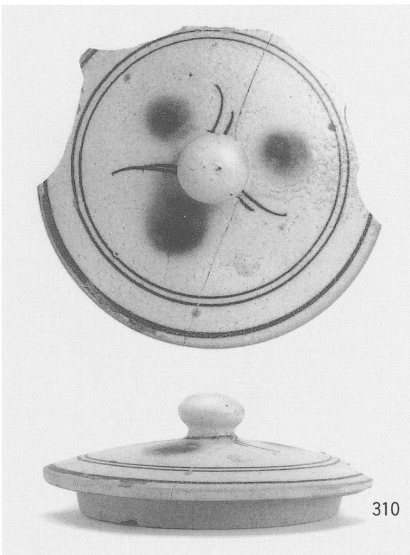
315


294


296

318

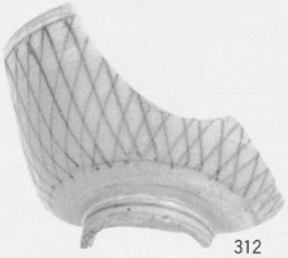
311

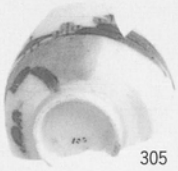

310

326

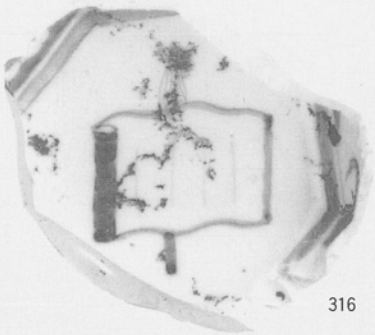
328

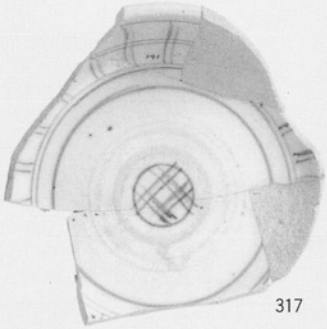
23区出土遺物（1）


312

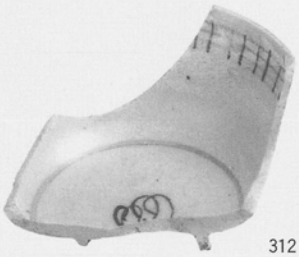

305

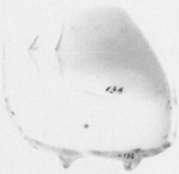
306


316


317

320


312

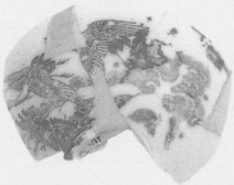

305

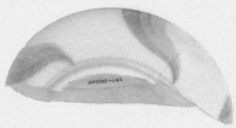
306

316

317

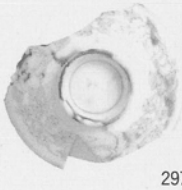
320

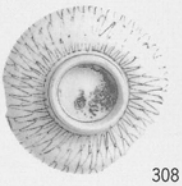

314

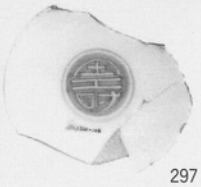

319

307

307

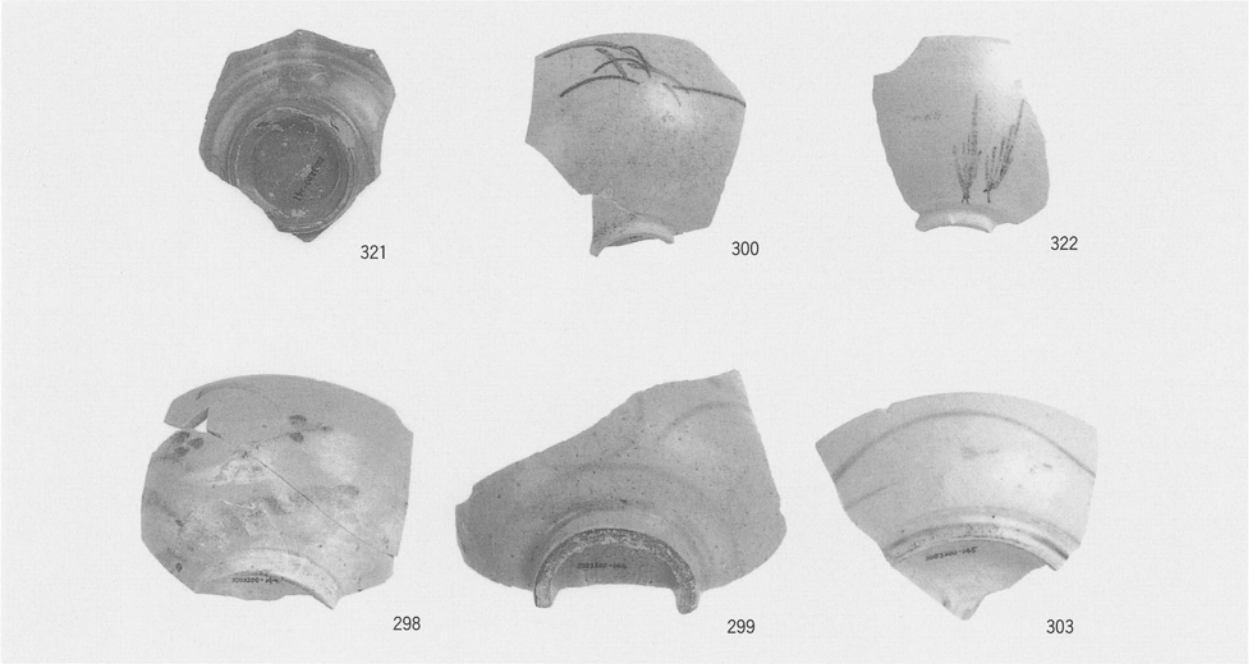

297

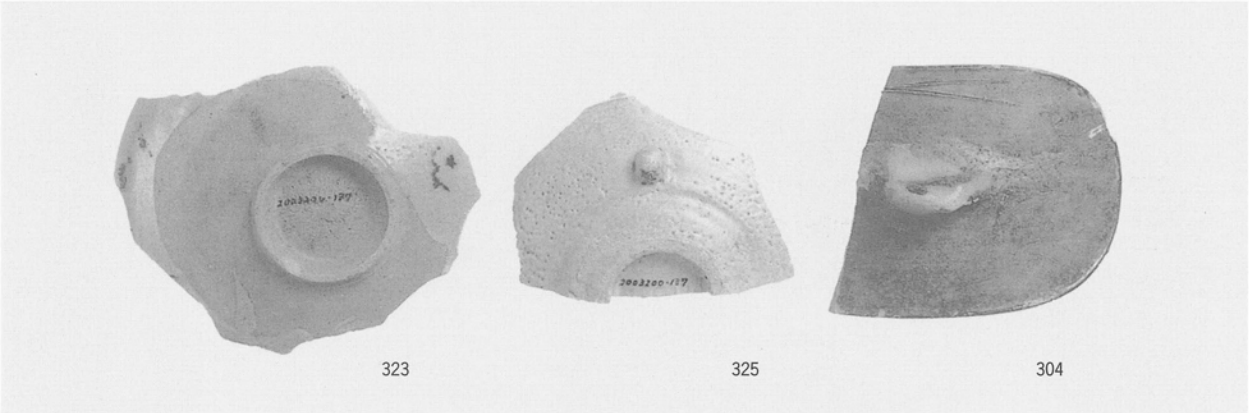

308

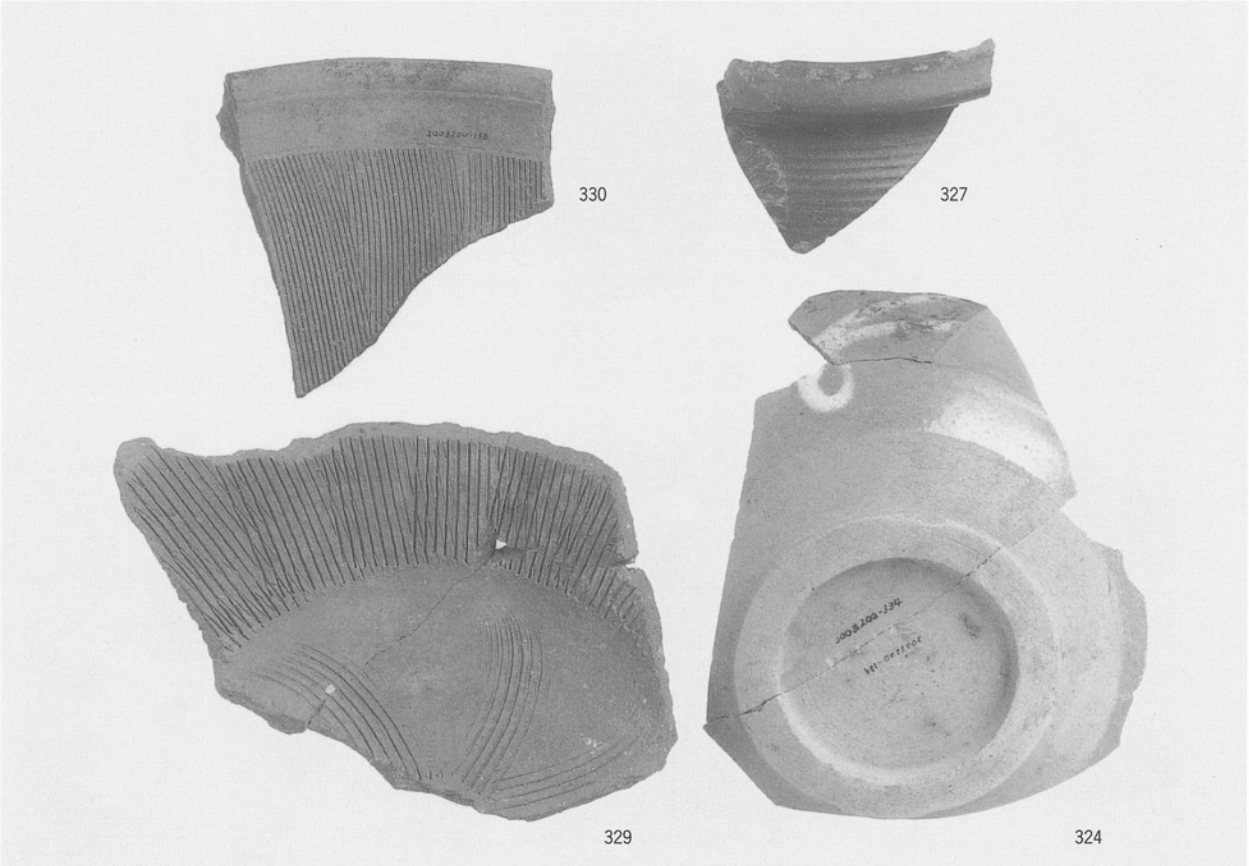

297

308

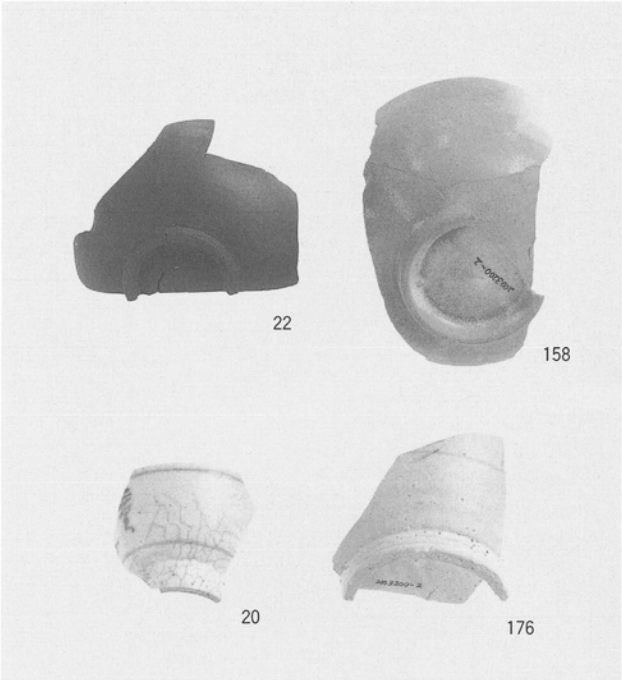
23区出土遺物（2）

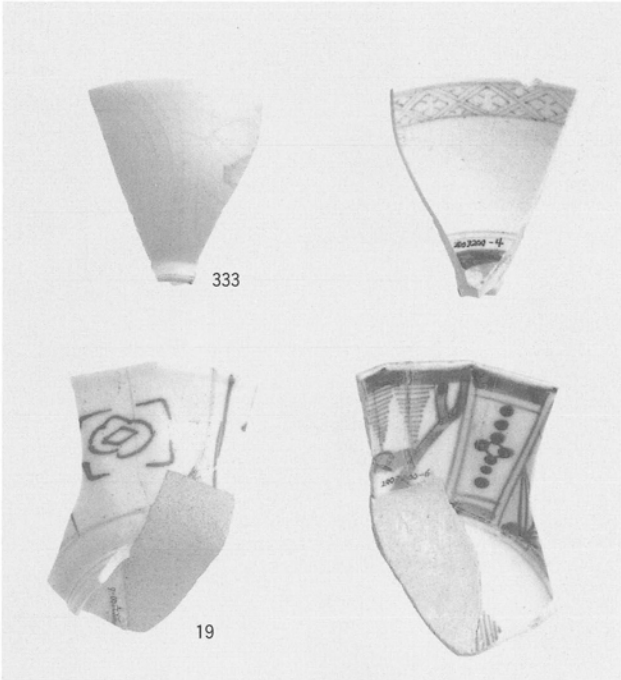


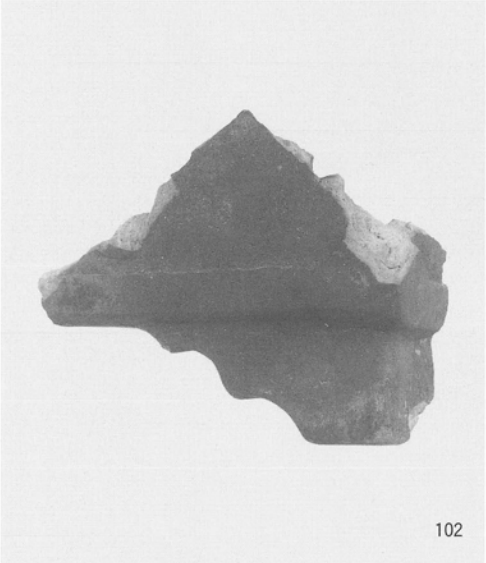


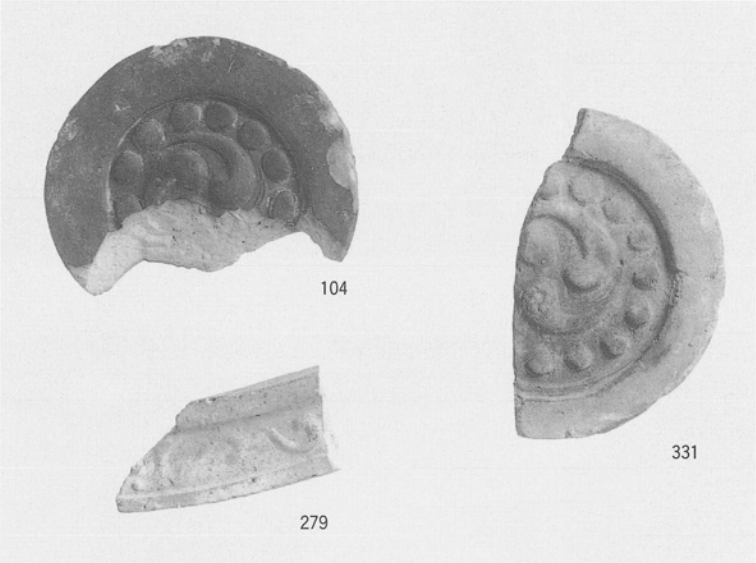


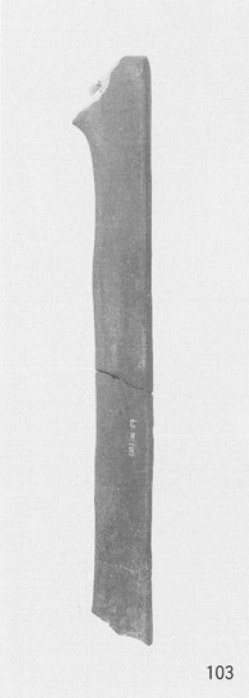
23区出土遺物（3）

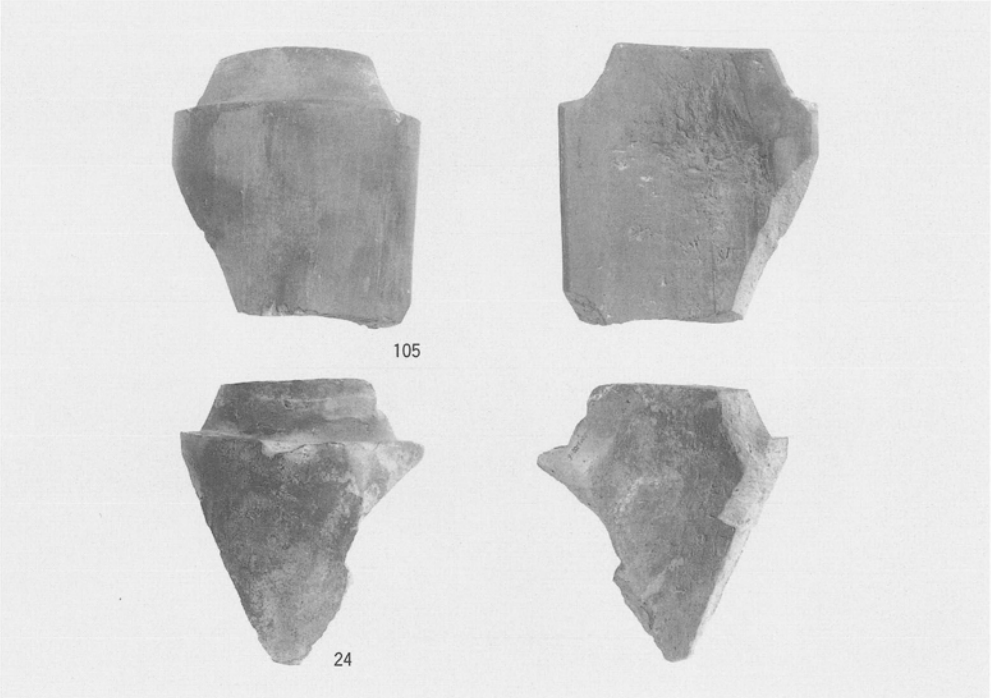




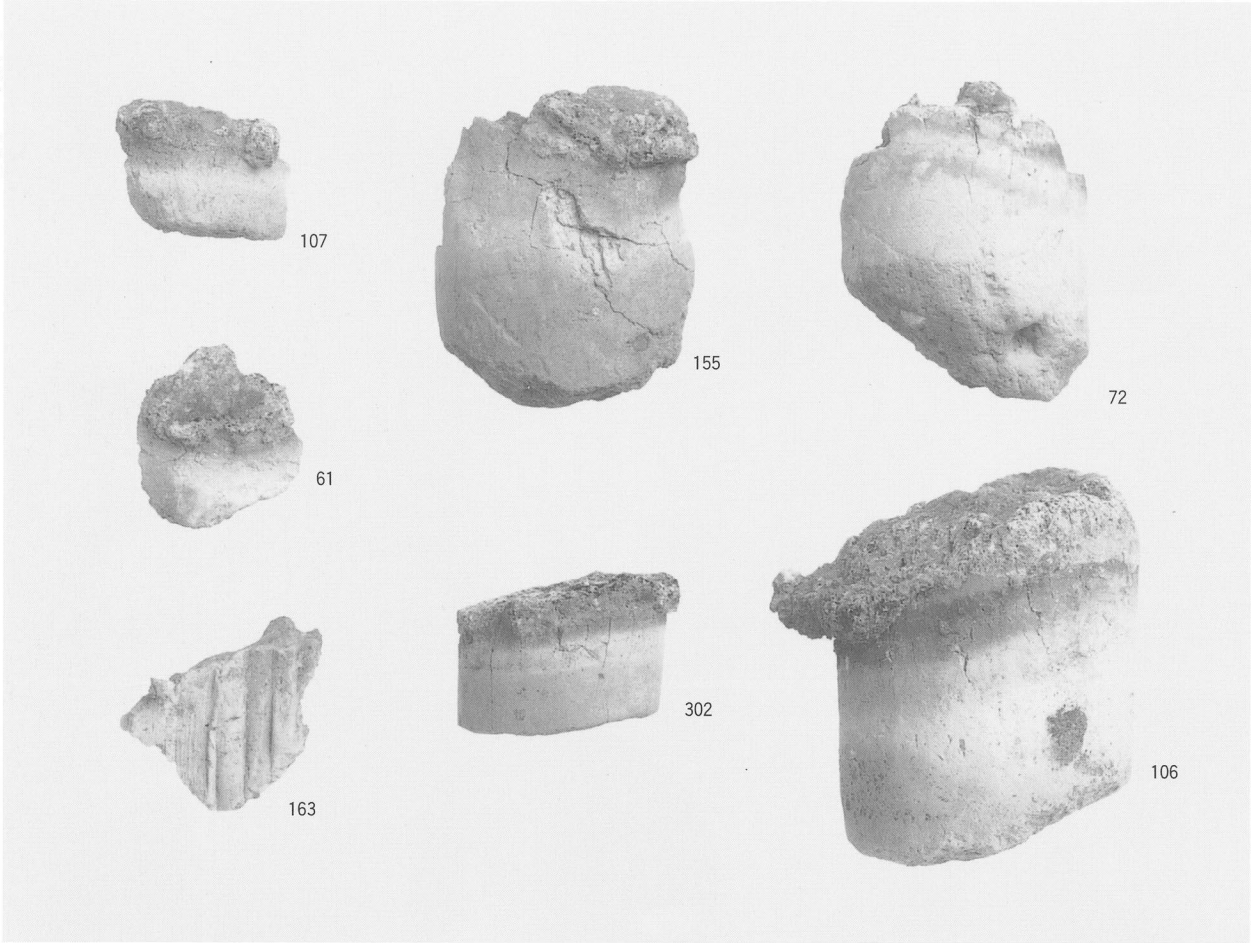




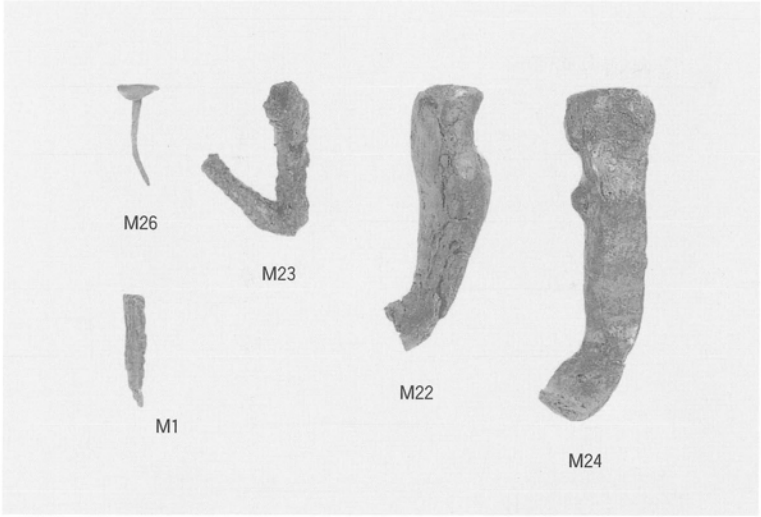


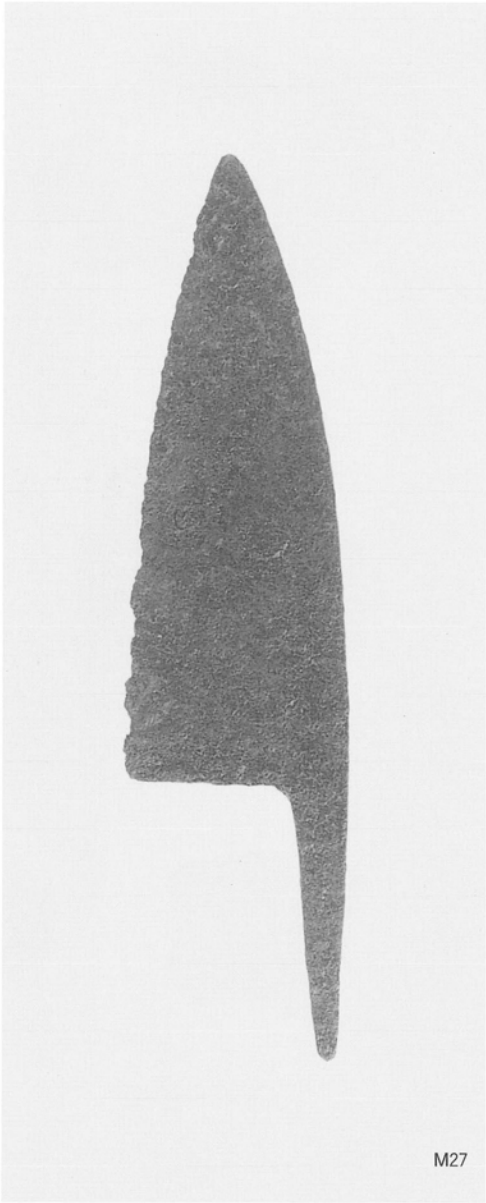


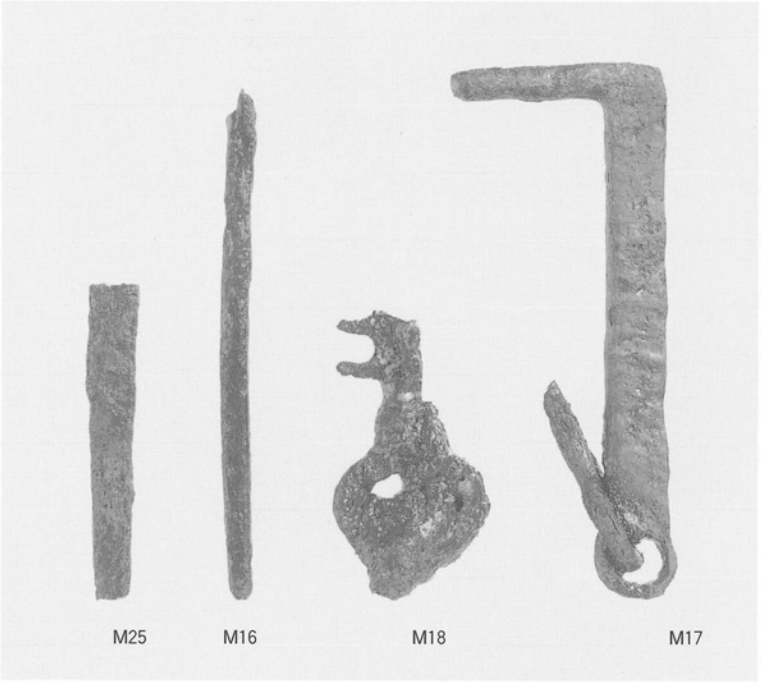
11区・16区・23区出土遺物

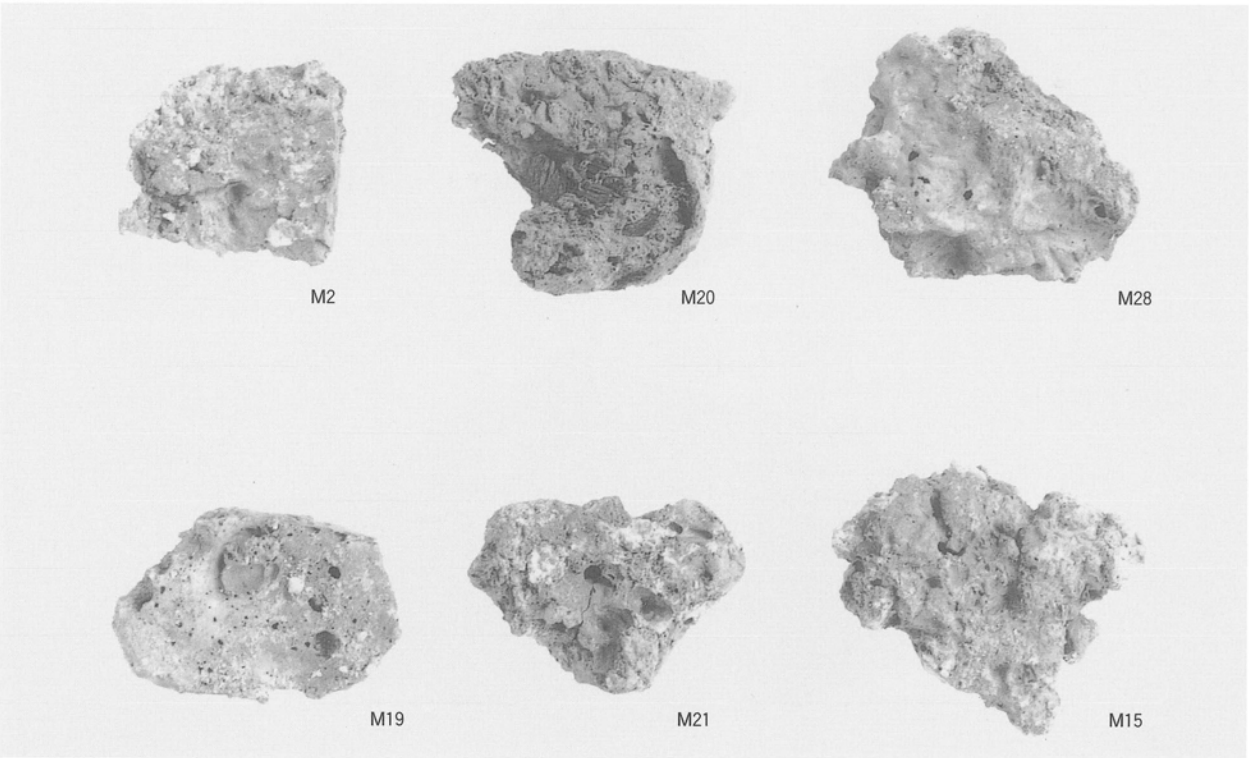


羽口・壁土

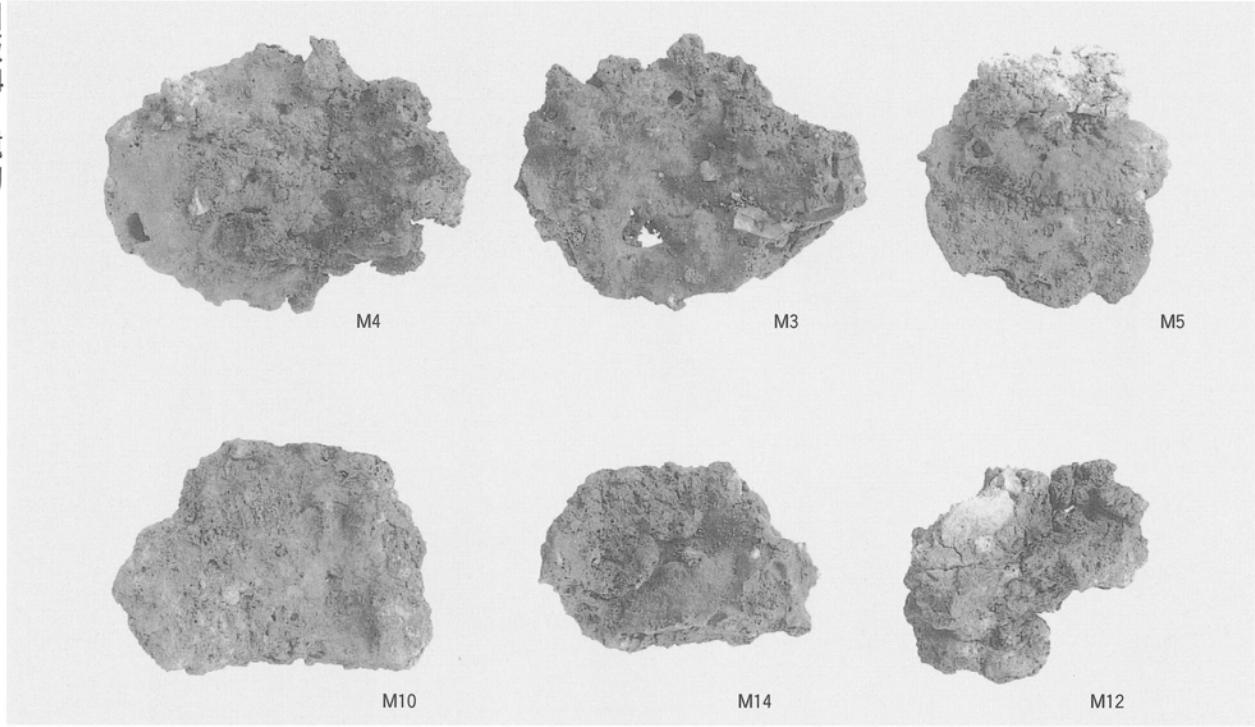


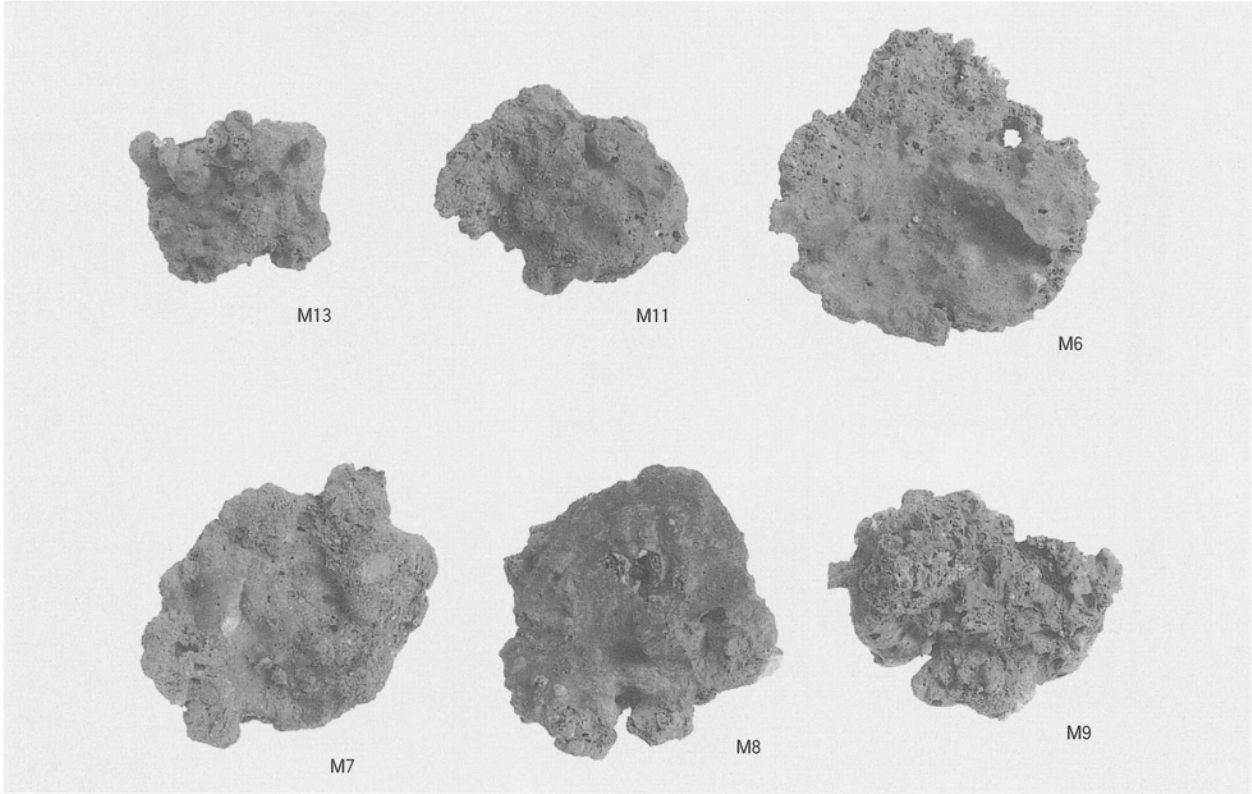




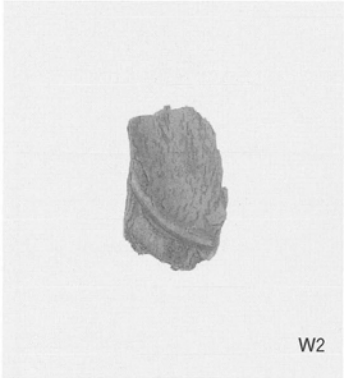


金属器

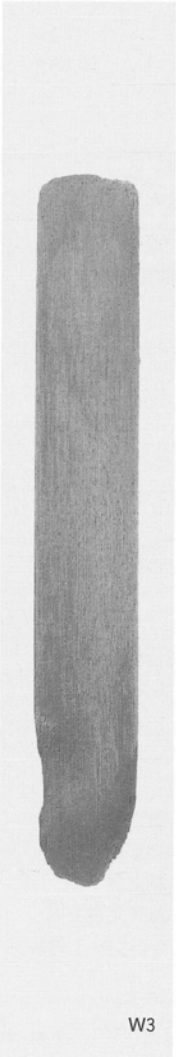


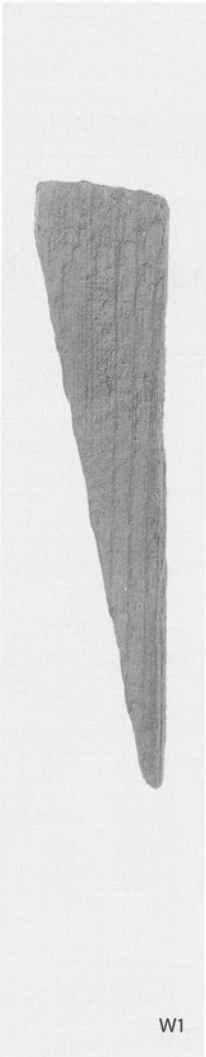


14区鉄滓

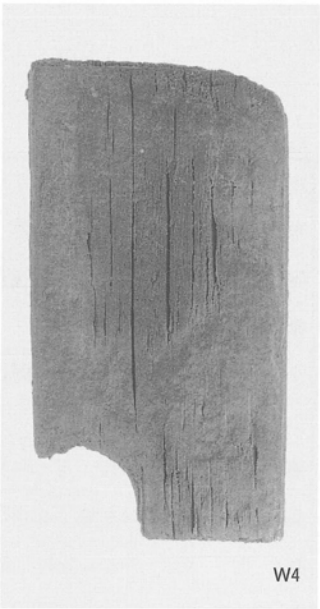

W2

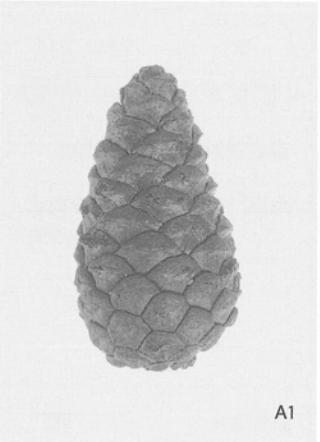
W5


W3


W1

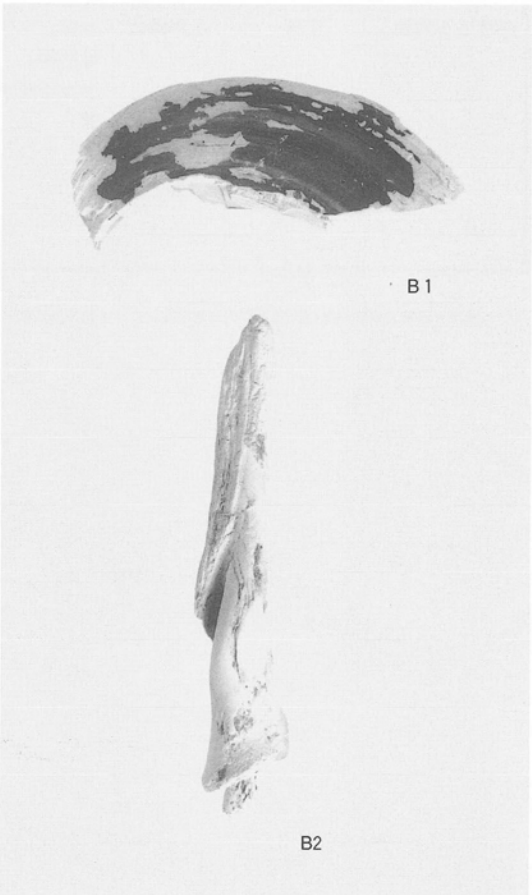
W6


W4


A1

B3

B4 B5


B1 B2

木製品・種子・骨・貝

報告書抄録

ふ り が な	あこうじょうかまちあと
書　　名	赤穂城下町跡
副 書 名	（街）赤穂駅前大石神社線電線共同溝整備事業に伴う発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第328冊
編 著 者 名	篠宮　正・株式会社古環境研究所
編 集 機 関	兵庫県立考古博物館
所　在　地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中500　　Tel 079-437-5589
発 行 機 関	兵庫県教育委員会
所　在　地	〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10-1　　Tel 078-341-7711
発行年月日	2008（平成20）年３月18日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市　町	遺跡番号					
赤穂城下町跡	兵庫県赤穂市 加里屋駅前町	28212	2001099 遺跡調査 番号 2003200	34度 45分 13秒	134度 23分 33秒	試掘 2003年11月５日 工事立会 2004年１月６日 ～１月27日	試掘 15㎡ 工事立会 107㎡	（街）赤穂駅前大石神社線電線共同溝整備事業

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
赤穂城下町跡	集落	江戸時代	赤穂上水道 町屋跡 上水道配水路 溝	磁器 陶器 土器 瓦 瓦管 土錘 鉄器・鉄滓 木器	百々呂屋裏大桝

＊緯度・経度は平成14年4月1日施行の測量法改正による世界測地系にもとづく値である。

兵庫県文化財調査報告　第328冊

赤　穂　城　下　町　跡

（街）赤穂駅前大石神社線電線共同溝整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成20年3月18日　発行

編集　兵庫県立考古博物館
〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中500
Tel. 079-437-5589

発行　兵庫県教育委員会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号

印刷　株式会社 邦栄堂
〒675-2213　加西市西笠原町766